

---

# 精霊達のレクイエム（鎮魂歌）

真条月鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

精霊達のレクイエム（鎮魂歌）

### 【Nコード】

N5367P

### 【作者名】

真条月鈴

### 【あらすじ】

訳ありで家を離れることになったモニカ。母に言われた行き先は隠された土地、ベルシア。王子の側近をしている兄が旅に同行したが、向かう先で何者かに襲われる。

一人逃がされたモニカを助けてくれたのは一人の青年と少女だった。

ここから彼女の破天荒な運命は始まった。

## 始まる時（前書き）

この小説は管理人のサイトで連載している小説を修正・補足をしたものです。

誤字脱字、わかりにくい表現、いろいろあるとは思いますがご了承くださいただける方のみご覧になってください。

## 始まる時

「お嬢様、奥様がお呼びです。」

ノックをして入って来た侍女の言葉に窓辺に立っていたモニカは振り返った。

風に煽られ舞う銀色の髪が、光に当たりキラキラと輝く。

侍女を見る瞳は質素の薄いエメラルド色だ。

淡く見えるのにその瞳は意志が強そうに見える。

「母様が？」

凝った造りをした窓枠に肘をついていたモニカは、あまりよろしくない体勢をさりげなく戻し、問い返した。

「はい。なんでも、今すぐ部屋に来て欲しいそうです。」

「わかった。行くわ。」

モニカの返事を聞いた侍女は入って来た時と同じように一礼すると部屋を出て行った。

部屋に一人になったモニカは一人首を傾げた。

「母様、モニカです。」

そう言つて部屋の戸をノックすると、お入りなさい、と母の声がしたので失礼します、とドアノブを回した。

部屋の扉はよく手入れされている証拠に音も無く、スムーズに開いた。

扉を開けると昔とあまり変わらない部屋の風景が見える。

壁にかけられた風景画に感じのよいテーブルや椅子、本棚などが目に入ってきた。部屋一帯はブラウンで整えられており清潔感漂う綺麗な部屋だ。

モニカの部屋とほとんど変わらない景色がレースのカーテンをかけられた窓から見える。

その窓の側に立つて後ろを向いていた女性がこちらを向いた。

「モニカ、急に呼び出してごめんなさいね。」

そこに立っていた母エイシャーは、本当に申しわけなさそうな表情をしている。

「大丈夫ですよ、母様。それよりどうしたんですか？」

珍しいですよねと続けた。

部屋の扉を後ろ手で閉めながらモニカは問いかける。

部屋をよく見渡すと部屋には自分と母だけだった。

「貴女に今からお願いがあるの。今から私の故郷に行ってほしいの。」

「今から？それより、母様の故郷はどこなんですか？」

「そう、今からよ。夕食は手頃に食べられるような物を馬車に積んであるわ。荷物も。その馬車でベルシアに行行ってちょうだい。」

もう、荷物が積まれていると聞いて驚いたが聞いたことのない名前が出てきて、首をひねった。

「ベルシア？」

「やっぱり聞いたことないかしら？」

そう言われ首を縦に振る。

「そう、ベルシアは一般には知られていない土地なの。隠された土地とも言っわ。」

「隠された土地？」

「ええ、そうよ。この国に昔魔物達から人々を守った八神将と呼ばれる人達の存在は知っているわね？」

「八神将って本によく出て来るわよね。確か色々な神器を持って立

ち向かった勇敢な人達でしょ？」

「そうよ。その神器を隠したとされる場所が隠された土地よ。ベルシアのような世に知らされていない土地はベルシアも足して8つ。土地のことは各国の王族のごくわずかの人が知らないわ。」

今までそんな場所が存在するなんて予想もしなかった。しかも、その場所が母の故郷だなんて。

「けれど、モニカが母様の故郷に行かなければならない理由は？」

そう、なぜこんなにも急に出発が決まったのか……

「隣国のフケート王子やその国の国王陛下が今夜お忍びで屋敷にいらっしゃることになったの。」

母親の発した初めの名前を聞いた瞬間、モニカはビシリ、と固まった。

「母様、それは本当？」

信じたくなくて、母に確認をとる。

嘘だと言って欲しい。

「この期に及んで私がモニカに嘘なんてつくと思う？」

それは思えない。

だが、信じたくなかった。

お隣りの国王陛下はたびたびこの屋敷で聞く不思議な噂を確かめに、その息子フケート王子はモニカに求婚を申込に。

どちらもモニカ絡みなのだ。

母は、娘の意に沿わぬ事を阻止しようと頑張ってくれているのだ。

どちらに転んでもモニカにとっては最悪なことには変わらない。

「父様は何か言っていていましたか？」

そう、父デラシーネの了解をとっていないとモニカは屋敷を出れない。

「ええ。許可は私がもぎ取ってきたわよ。大丈夫、心配しないで。モニカを王子達が探しているようだったら言ってやるわ！娘は今別荘で療養中ですってね。」

母のこの強気な性格がモニカは好きだ。

温かくて安心するような、そんな感じ。

けれど、父はモニカを嫌っている。

きっとフローランス家の恥だと思っているに違いない。

このフローランス家は伯爵家だが、公爵家と同じくらい特別視され



ている。

モニカの兄、フィオーラはしっかりした人で勤勉だ。

だが、女は結婚と服の流行など、そんなことをしていればいいと言われるのだ。

女には勉強など必要ないと言われる。

だが、モニカは例外と言ってもいい。

彼女は勉強が好きなのだ。

知らないことを知りたいと思っている。

「この前いらした時もそう言って帰ってもらったわよね？」

「だってモニカは身体が弱く病弱なことで有名でしょ？嘘なんだけどね。」

そう、世間には病弱なことで有名だが、実際はモニカが、社交界にあんまり出たくないことと、こういう面倒事を避けるための嘘なのだ。

フローランス家は美形ぞろいで有名なのだ。兄、フィオーラなどは引っこりなしに女性が言い寄ってくる。

そして結婚している母や父にまで…

もちろんモニカも例外ではない。

「だってあんなお世辞ばかりの退屈な社交界なんて嫌よ。楽しくもないし、つまらないもの。」

子供の頃から財産目当てや、容姿目当てだった男が言い寄ってきて、それがモニカは嫌いだっただ。

「まあ、そうなんだけどね。」

母も同意をしめす。

「けどね、好きな人と出るようになったら楽しいものよ。」

朗らかに笑いながらそんなことを言う母が心底すごいと思った。

一度だけ見たことがある。

もう、結婚もして子供もいる母に男性がわんさか言い寄ってくる人達を、母はやんわり断って離れようとしている所に父が颯爽と現れ、あつという間に辺りの人を蹴散らすという様を……。

あれが母には楽しかったのだろうか？  
と疑問を持ったがあえて尋ねなかった。

「いけないわね。話が反れてしまったわ。」

モニカも忘れていた。

「それじゃあ、母様の故郷にモニカは至急、避難すればいいのね。」

早口でまくし立てるモニカに母も同意をしめす。

「フィオーラがついて行くって言ってたからあの子に地図は、もう

渡してあるからね。」

「え？、兄様も行くの？」

「ええ。モニカだけで行かすと侍女や従者なんか付けないで行っちゃうでしょ？だから母様もフィオーラの意見に賛成よ。……あれ以来、貴女はなんでもできてしまうから侍女はいらないかもしれないけれど、せめて兄のフィオーラぐらい連れて行きなさい。」

そう言つて笑う母にモニカは言つた。

「お兄様は今お忙しい時期と聞きました。とてもそのようなこと頼めません。」

兄は実力もあるので第一王子の側近をしている。

王子には会つたことないが、その王子に実力を認められ、信頼されるほどだとも聞く。

そんな、日々多忙な兄を自分のわがままに付き合わす訳にはいかなかった。

そう。

わがままなのだ。

求婚を申し込んでくるフケート王子は仮にも隣国の王子、世継ぎなのだ。

その申し出を自分は突っぱね、家族に迷惑をかけている。

モニカがそれを受け入れれば父にとっても兄にとっても、母にとっても、とても得になる。

それをモニカは棒に振っているのだ。

「でもあの子、王子様から休みをもぎ取ってきたみたいよ？」

「そんな……!!」

「諦めなさい。フィオーラは貴女のこと心配してくれているのよ。」

絶句するモニカに母は彼女を言い聞かせるように言った。

「ほら、もう出発しないと。荷物は全て馬車の中よ。このまま屋敷の入口に向かいなさい。そこにフィオーラが待っているわ。」

そう言ってモニカの肩を押す。

モニカが部屋を出る前に、母はモニカをギュウツと抱きしめた。

「気をつけるのよ？」

「……ええ、わかっているわ。」

母が言った言葉の本当の意味。

それが指す事をモニカは身をもって知っている。

母が心配するのも無理ないが…。

「行つて来ます。」

そう言って母から離れた。

「ええ。行つてらっしゃい。」

母の言葉を部屋を出ながら聞いた。

「あつ!!」

玄関に向かおうとしている途中で、モニカはある物がないことに気づいた。

多分馬車に積んだ荷物の中には入れてくれてはいないだろう。

あれだけは置いていく気にはなれない。

モニカは立ち止まり、一瞬そう考えた後、歩いてきていた廊下を走つて戻った。

「あつた!」

部屋に戻つてドレスサー所に置いてある宝石箱を開け、中に入つてあつた小振りなアメジストが先に付いただけのシンプルなネックレスを手を取った。

このネックレスは装飾品にほとんど興味のないモニカの、唯一のお気に入りだ。

普段は毎日と言っていいほど身につけている。

だが、今日はもう部屋着に着替えようと思っていたので、外して置いていたのだ。

その後、着替えようかと思った頃に母から呼びだされたという訳だ。ネックレスを手につけたモニカは早々に部屋を後にし、玄関に向かった。

息を切らして玄関先に行くと兄、フィオーラがモニカを待っていた。

「兄様、遅くなってしまってごめんなさい。」

待たせてしまったと思い、駆け寄りなが謝った。

「モニカ、そんなに息を切らしてどうした？」

こちらを振り向いた兄の目に映った妹は息を切らして駆け寄ってきたので驚いたのだろう。

「部屋に忘れ物を取りに戻っていたら遅くなってしまったものだから……」

「それならここに来てから使用人に取りに行かせればよかったのに。」

「それもそうなんだけど、こっちの方が早かったから。」

苦笑しながらそう返事をする。

「それより、早く出発しましょう。」

だが、一刻も早く出たくて兄を急かした。

「そうだな、もう荷物も積めたし急ぐか？」

そう言っただけ手を差し出してくる兄にモニカは安心したのだった。

「モニカ、疲れただろう？着くまで寝ていてもいいぞ。」

ぼんやりと外の風景を見ていたモニカにフィオーラが声をかけた。

「兄様こそ、ちゃんと寝て下さい。昨夜も遅くに帰ってきたのでしようっ？」

昔から一緒にいるんだからそれくらいは知っているんだぞ。」

## 襲撃

塗装のされていない砂利道。そこを通る馬車に乗っている私、は前後左右に揺られながらも窓から覗く風景を楽しんでいた。

肉眼で確認できる建物はほとんど皆無。時たま民家の屋根を確認できるくらいに遠く離れている。

これはこれでゆとりがあつて良いと、私はそれを見ながらそんなことをぼんやりと思った。

「モニカ、少しは疲れたんじゃないか？着くまで時間はある。寝ていてもいいぞ。」

ぼんやりと外に向けていた視線を戻せば、兄は予想通りの顔をしていた。眉は眉間により、渋面を作っている。

「兄様そんな顔をしてたら女性が逃げますよ。」

軽く冗談でそんなことを言えば、兄に小突かれた。

「そんなことを考える暇があつたら、自分の心配をしろ。ただでさえお前は」



「それはこっちの台詞です。昨夜も遅くに帰ってきたにもかかわらず、今日のこのこと付いて来たのはどこの誰ですか。兄様こそしっかり寝てくださいよ。」

長くなりそうな説教へと変わり行く兄の言葉を強制的に遮り、私は切り返す。伊達に今まで兄妹をしてきていない。その分のスキルはばっちしだ。

「俺は良いんだよ。問題はお前だ。いいかモニカ良く聞け、そんな言葉で俺を誤魔化すな。聞いたぞ、この前屋敷で倒れたんだってな。」

いったい誰が告げ口したんだか。兄にはいつの間にか情報が行き渡っている。

私は内心舌打ちをしたい勢いだ。

「ちゃんと寝てるわ。」

「だれも不眠症で倒れたとはいってないがな。」

してやったりとニヤリと笑う兄は性格が捻くれていると思う。

「寝ようと思っても寝れないお前のことだ、ここ最近不眠続きだ

ろう。伊達に十七年間一緒に育ってきたわけじゃない。このぐらいはお見通しだ。」

確かに四才も年上の兄は頼りになり、昔は眠れないと良く兄の部屋へと行っていた。

「でもこのごろは」

「でも、じゃないだろう。そう言って倒れたのは最近なんだからな。」

それにはうつ、と詰まる。  
弁解の余地はない。

「クッションも有るし、膝もある。使ってもいいから寝ろ。」

いや、膝はちょっと……。などとおもいつつもクッションを受け取れば、気持ちよくて顔を埋めてしまう。

「大丈夫なのに……」

そう言ったのはせめてもの抵抗のつもり。

( 苦しい )

心配してほしい訳ではないのに、素直にそれが伝えることができない。

それを兄に伝えることの出来ない歯痒さを感じながらも、私は襲ってきた睡魔に勝つことは出来なくて、眠りについた。

「 二力、モ二力。 」

「 ん〜？ 」

「 起きろ、早く。寝ぼけてる時間なんてないぞ！ 」

焦ったような兄の声。

「 …… 兄様？ どうしたの？ 」

ムクリと起き上がると兄がこちらを厳しい目で見ていた。

「 ちゃんと目は覚めたか！？ 外の気配を探ってみてみる。 」

訳が分からない。だが言われた通りにすると、背後で馬を駆けてくる気配が複数ある。

「馬がこちらに向かつて複数……けど、なんで……まさか、私達が目的!？」

「だろうなあ。数分もしない内に追いつかれるだろう。」

「そんな……!」

ならどうしろと言うのか、と兄を見ると真剣な目でこちらを見ていた。

「モニ力はこの馬車の馬を使い逃げる。」

言われた言葉に神妙に頷きスカートをまくし立て前に出る扉を開き、座って馬を操っていた兄の従者に訳を話して一頭の綱を受けとった。

「お兄様もみんな一緒よね。」

背後を振り返り兄を見て言った。

馬車を引いている馬は4頭。

馬車に乗っているのはモニ力と兄と馬を操っている従者一人だけだ。残りの人は宿泊先に先に行っている。

なので、この馬車に乗っている三人が馬で脱出し、残りの一頭で遅いけれど馬車を引いて圀にすれば逃げられるはず。

だが、兄は首を縦には振らなかった。それを見て目を見開く。

言葉の意味。それは一緒には残らないということ。

「兄様は残ると言つの……なぜ?!」

理由を問うても何も返ってこない。

「……だつたら私も残るわ!!」

痺れを切らした私はそう叫んだ。

「それはダメだ。モニカは逃げる。」

「嫌よ!! 私も残るわ。私だつて闘える。」

兄ほどではないけれど、強いと自負できる。

幼い頃から兄が習う剣術の稽古をこつそり隠れて見様見真似で覚えてきていたのだ。それはかなり我流ではあるが。

兄がそれに数年前に気づいたので、両親には秘密にしてもらった。

「ダメだと言っている。お前は逃げる。」

「なんで! どうしてよ!!」

泣きじゃくりながら首を振った。

「どうしてもなんだ。……ごめんな」

トン

首筋に凄く強い衝撃があった。

「ど……うし……て」

私が意識を保っていられたのはそこまでだった。

気を失った妹を腕に抱き抱えてフィオーラは言った。

「モニカをここに残しとく訳にはいかない。」

聞こえるはずもない彼女にそう呟く。

「ビジィーラ、モニカの馬を頼む。」

ビジィーラと言う自分の従者に馬をこちらまで引き寄せてもらった。

その上にモニカを落ちないように横たえる。

「お前なら落とされるはずがないだろう。      モニカを頼んだぞ。」

前半は聞こえているはずもない妹に、後半はモニカを乗せている馬に向かって言った。

馬はモニカという部分に反応し耳を傾け自分の背中を見た。

そして了解したかのように嘶ないた。

フィオーラはそれを見て安心したようだ。

「いけ」

短く言っただけだが馬は颯爽と駆けて行った。

「よかったですか？」

それまで黙っていたビジィーラが馬が見えなくなるのを待って、口を挟んだ。

「なんのことを言っているんだ。」

「一緒に行かなくて、と言うことですよ。」

「……ならお前が行けばよかったんだ。」

「嫌ですよ。俺はフィオーラ様の従者ですもん。」

ひょうひょうとビジィーラは自らの主人にそう言っただけ。

「にしても、驚きましたよ。噂は本当だったんですね。」

馬が走って行った方向を見て彼はそう言った。

「なんのことだ。」

「いやですね。惚けても無駄ですよ。噂はかなり広まっていますからね。モニカ様には不思議な力があり、いろんなモノに愛されている、と。」

だがフィオーラは安心した。

このくらいの噂はどうにかなる。

だが、アレがばれてしまったらやばいのだ。

まだ誰も知らない。

家族以外は……

「モニカにそんな不思議なものはない。ただ、馬には懐かれているようだが。」

「そうなんですか。ですが、凄いですね。馬に好かれるなんて。」

「まあな、それより。俺はこのままアイツらをこのまま迎え撃つ。お前はとうする?」

「愚問ですよ。モニカも一緒にします。」

「わかった。」

そして彼等は来るべき者が来るまで待ち続けた。



## 出会い

「もお！！なんでこんな道通らないといけないの。」

「仕方ないだろう。嫌ならヴィオラは来なければよかっただろう。」

薄暗い山のなか二頭の馬が少し離れて歩いている。

その先に歩いている方の上に男が、後の方に女が乗っていた。

どちらともマントをかぶっており姿がよく見えないが、声からしてまだ20歳前後だとわかる。

「あんな所で残っていると、ありえないですわ。それよりあたしも会って見たかったんだもの、モニカ嬢に。舞踏会や社交的場にはほぼ欠席で、たまに顔を出したかと思えばすぐに帰っちゃうし。おまけにフィオーラは面会を頼んだって拒否するしで、全く会ったことがないんですもの。しかも、アイツ！自分に妹がいること隠してただなんて！！」

かなり怒って憤慨している女に先に行く男は言った。

「まあ、そうだね。アイツ、俺にも黙っていたんだし。妹がいるってこと。数年前なんだか不思議な噂を聞くものだから問いただしたらやっと吐きやがったくらいだ。」

男が言った言葉に、女の方ははげしく同意をしめした。

「あたし達に何も言わないなんて最低ですわ。何年の付き合いして  
ると思ってるのかしら！」

「まあ、いいじゃないか。だから、こうして仕返しもとい、いたず  
らをしに行くんだし。」

男は微笑んでいながらも黒いオーラを漂わせている。

マントでほとんど身を包んでいるため、あまり良く見えないのだが、  
容姿が両者とも整っていることだけは見てとれた。

それだけに、あまりにその表情がさまになっていることがわかる。

「それもそうですわね。早く会ってみたいわあ。」

男の言葉で機嫌を直したのか、ご機嫌のようだ。

しばらく森の中を馬で進んでいた二人は異変に気づき、自分の馬を  
ぴたりと止めた。

「ねえ、……………」

「……………ああ、わかっている。」

そのまま数秒の沈黙。

辺りの音は、風が葉を揺らす音、鳥の鳴き声、枯れ葉や落ち葉が風  
によってカラカラと動く音だ。

「何か近づいてきてる。」

「ええ。正確に言えば、私達に向かってくるような感じ……。この場所に向かって来ているんじゃない。」

「この気配は……………馬だ。」

しかも、人が操っていない馬だと。

数秒後、姿が見えた。

「ヴィオラ、ネインは出そうか？」

「ん〜。どうかしら？あの子、気分屋だからどうとも言えませんわ。」

「だろうな。この半年で出てきたのはたったの3回。1ヶ月に1回出てくればいい方だしな。」

気楽げに答える女に、男の方はしみじみといった風に呟いた。

「シャイなんですの。仕方ないでしょう!？」

「……………なら、俺が止めるか……。」

しびしびという感じに呟いた男は、近づいてくる馬に集中し、駆け来て横を通るのを待った。

が、男はあるモノを発見した。

「おい、ヴィオラ！一人が乗っている。」

乗っていると言っても気を失っているのか、馬の背で体を横になっている。

にしてもおかしい。

馬が妙におとなしすぎる。

「ねえ、見て。馬のスピードが落ちてきていますわよ。」

彼女の言う通り、馬は彼等の元に着くときにはちょうど止まったのだ。

「女の子？」

馬の上から二人で気絶している人を降ろそうとして身体の軽さに驚いた。そしてマントのフードがずれ、顔があらわになる。

「みたいだな。にしても、貴族だと思うけど、ヴィオラはどう思う？」

木の幹にもたせ掛けながら尋ねた。

ふと、先ほどこちら駆けてきた馬を見ると、綱を繋がれてもいない

のに、おとなしくその場にいた。

普通はありえない。

視線を何気なく戻すと、彼女は気を失っている少女の顔をまじまじと見ている。

「この子、可愛い！！何、この白銀の綺麗な髪は！すごい美人さんですね。」

興奮したように騒ぐ彼女に、視線を向けると、マントをのけた姿が目に入った。

確かに綺麗な少女だった。

だが、それを考えると、なおさらこんな森にいたことがわからない。

「わかったから。……貴族だろうな……。」

「でしょうね。」

気を失っている少女の着ている服は控えめながらもしっかりとした作りをしており、何より質がよかった。

貴族じゃなければ、良家のお嬢様といったところか。

だが、苦勞してそうだろうな、とも思った。

良家のお嬢様なれば、貴族達のように位の高い者に求婚を申し込まれれば、そう簡単には断れないだろうと。これだけ容姿が整っているのだ。

そこら辺の、無駄に地位の高い奴らが放っておかないだろう。

なぜだかそう思うと彼女に親しみを覚えた。

まだ目を覚まして、話してもいないのに。

そんなことを考えた自分を自嘲気味にわらった。

「あら、なに？いきなり…どうしました？いきなり笑ったりして…」

見られていたのか、ヴィオラがこちらを、なにか気持ち悪いものでも見た、といった風な表情をしていた。

「いや、別になんでもない。ただこの少女も大変そうだろうな、と思っただけだ。」

お前にもわかるだろう、その気持ち、と問えば苦笑を含んだ相槌を打ってくる。

「ふう〜ん、それよりもこの子どうやって起しますの？」

笑っていた顔を瞬時に引き締め、少女に視線を向けて問うてきた。

そうなのだ。

男ならばビンタでも、したたか殴るなどしてどうにかしただろうが、少女なのだ。

しかも自分にこのような経験は初めてで、どうしていいのかわからない。男ならあるのだが…。ここは本当ならばヴィオラに任せた方がいいのだが、その彼女が尋ねてきているのだ。

だから尋ね返すこともできない。

「……………一応ここで起こすこともないだろう。近くの屋敷に連れて行こうか？」

「それもそうですわね、ここらの近くならあそこがありましたわ。」

うなずき返してきたヴィオラは少し、いやかなり嬉しそうだ。

この少女の身が心配だ。

屋敷に着いたら、彼女に侍女を付けるべきだろうかと思案しながらもヴィオラの返答に同意を示し、行動に移すことにした。

初めに私が見た物は灰色の綺麗な糸。

とても綺麗で、私の髪の色とは大違い。

私のように質素は薄いのに、しっかりした色をもっているのがとても羨ましくて、手を伸ばした。

届いたなら自分もその色に染まれるような気がしたから……。

「……………ったあ。」

ガシリと糸を掴んだ瞬間声が聞こえた。

そして目の前にあった糸が離れていく。

だがそれを私はぼんやりと見つめていた。

手はいつの間にか糸から離れていた。どうやら指の間をすり抜けてしまったようだ。

「あれ？目が覚めた？」

先ほども聞こえたような声がしてハツとする。

「え？」

自分の置かれている状況を知り、戸惑った。

なぜか自分はベッドに寝ており、枕元には知らない青年がいた。

どうやら私が糸だと思って掴んだ物は彼の髪の毛だったようだ。

なにやらよく回らない頭を押さえながら、片手について座位の体制になろうとすると青年が手を貸してくれた。

そしてなぜ、寝ていた私の目の前に青年の髪の毛があったのかを問う。

「ああ、ゴメン。あまりにも日差しが気持ちよくて、ついつい寝てしまったみたいだ。」

そう言っただけで床に落としていた本を広げ、ポンポンとはたく。寝



てしまった時にでも落としたのだろう。

「別に大丈夫よ？兄様はもつと酷いもの。」

「兄さん？」

「そうよ。私のに」

そういえば、兄様は…。

そして思い出した。

「行かなきゃ。」

兄様を助けに……。

多分きつと、兄様はあのまま残ったのだろう。

私だけ逃がして……

ベッドを降りようと体を動かし、床に足をつけて体重をかけると  
よろめき、倒れそうになった。

が、青年が支えてくれたので倒れることはなかった。

「なにしてるの！は4日間も寝込んでいたのに、こんな急に  
体を動かしたらダメじゃないか！？」

だが、他人のはずなのになんて怒られた。

それでもモニカは退くわけにはいかなかった。大切な大切な家族のことだから。

「行かなきゃいけないの。兄様を助けに!!」

涙目になりながらも必死に彼の腕から逃れようとがくがく、彼は一向に放してはくれない。

「…………行くつて、場所が分かってるの!? ましてや、今自分がいる所も把握してないだろう。」

そう言われればモニカもハツとする。

「まずは事情を話してくれない? 出来るかぎり俺等も協力するから。」

「…………俺等?」

今、この部屋には自分と目の前に居る青年しかいないはずだ。

「ああ、それは」

バン

突然、部屋の扉が開いた。それも乱暴に。

「抜け駆けなんてズルイですわよ。」

そして、そこからずかずかと入って来た少女はそう言ったのだ。  
少女と言っても女性と言ってもしっくりとくるくらいだ。

その子の髪の色も灰色だった。

「ヴィオラ、もう少し声のトーンを下げて。彼女が驚いている。」

「あら失礼しました。私っちらはしゃいしまつて……。私のことはヴィオラと呼んでくださいな？」

微笑みを浮かべる彼女の隣で青年もついではばかりに口を開く。

「俺のことはハーレイと呼んでくれたらいいよ。」

笑みを見せてくれる二人に、とりあえず悪い人ではないのだろうと判断し、強張っていた顔を緩めた。

先ほど彼が、ハーレイが俺達と言ったのは目の前にいる少女、ヴィオラも含めてということだろう。

「はい。ヴィオラさんとハーレイさんですね。」

二人とも、どうやら私よりも年上そうだ。

「「さん、は付けないで。」」

私が呼んだ名前に付けた“さん”が気に入らなかった様子。  
息ピッタリに言い返された。

「じゃあ、ヴィオラにハーレイ。」

そう言い直すと納得したようだ。

家族以外の人をこんな風に呼ぶのは初めてのことで、なんだか新鮮に感じる。

「ええと、私はどうしてここに……？」

ともかく兄の元に急ぎたくて、今の自分の現状を把握しようと尋ねた。

「月華の森で馬の背に気を失ったまま乗っていたんだ。」

月華の森とは国境付近にある森の名前。

満月の夜に咲く珍しい花が唯一見つかる森なので、その花の名からきて月華と言う。

森に正確な道は一本しかなく、なんとか馬車が通れるくらいの道があると兄が言っていた。

そして、そこを通っていて襲われたのは私達。

兄に自分だけ逃がされたので襲われたのかどうかは不確かだが…。

ハーレイとヴィオラの話聞く限り、兄に気を失わされた後馬に乗せられたようだ。

だがよくもまあ、意識のない人間を乗馬させたものだ。  
今さらながら兄に対して腹が立ってきた。

「君はどうして馬に乗ってあんな所に居たんかい？」

心の内で怒っていた私は突然降ってきた声にはっとする。

兄と私は内密に、母の故郷ベルシアに向かっていた。だが、そこは隠された土地だ。

彼等にそれを話していいものか悩んだ末、こう言った。

「私は、兄と従者の三人で出かけていました。そのところ、何者かに追われていることに気づき、兄が私だけを逃がそうとしたんです。私はこのまま残るか、皆と一緒に逃げよう、と提案したのに兄に却下され、意識を奪われました。……そして今にいます。」

たった三人で出かける、と言っても普通そんな説明では納得しないだろうとはわかっていた。

だが、ハーレ達は黙ってそれを聞いてくれたのだ。

「追われることに心当たりは？」

「ありません……たぶん。」

自信がない。

自分はあまり外の世界を知らないから。

その分、勉学に励んだ。

一般的な知識や家に関係や繋がりのある所などは知ってはいるが、それほど詳しくはない。

社交的な場や、仕事などをしていれば他人から恨まれるようなこともあるだろう。

なので、ないとは言い切れなかった。

「そうだよ。よっぽどじゃない限り特定はできるだろうけど。」

椅子に座ったまま少し困り顔で、無意識なのだろうか、膝に置いた本の表紙を人差し指でコツコツとリズムよく突いている。

「特定できるんですか!？」

「うん、まあね。でもあれから4日も経っているから、微妙なところかな。」

「うそ!?! 4日も経ってるの!」

きつと今まで、満足に睡眠を取れていなかったせいなのだろう。だが、睡眠不足だけでこんなにも寝込むはずはないだろう、普通は。けれど私は例外中の例外。

「ベッドを降りようとした君に言っただけなんだけど…」

自分の声を失ったころはよくあったことだ。

何日も寝込んだ。

だが、それとこれは別。

あの時は3ヶ月以上の不眠症に悩まされていた。きちんと寝もせず、一瞬意識を失うということばかりだった。

そしてそんな妹を見ていた兄は強行手段にでたのだ。

すなわちそれは、急所を突いて意識を奪うというものだった。それから私は死んだように何週間も目を覚まさなかったらしい。

それと比べればまだましな方なのだろうけれど……。

「聞いていなかったみたい。ごめんなさい。でも、兄は……、兄の無事を知りたいんです。」

膝に置いた手をきゅっと握りしめ唇を噛み締めた。

「うん、わかってる。だから探しに行こう？現場に行って手がかりになりそうなのを見つけよう。」

冷たくなっていた手をハーレイは優しく包み込んだ。

優しく微笑みかけてくる。

その手をペシリと払い、割り込んでくる手があった。

その手はハーレイの手を払いのけることに成功すると、私の手を両手でひし、と握りしめてきた。

「もちろん私もですわよ。何かあったら私に頼って下さいな。このしけたツラしている男よりは役に立ちますわよ。」

今まで黙っていたヴィオラが突然口を挟んできた。

「ありがとう、二人とも。とても心強いわ。」

自分を心強く元氣付けてくれる二人に私は自然と笑みが零れた。

## 真実（前書き）

モニカの過去がチラリと？



## 真実

薄暗いのにじめじめしていなく、地に落ちた乾燥した葉がこすれあいカサカサと音をたてる。

「たしか、この辺りだったはずなんだけど。」

あれから支度をしてからすぐに出かけた。月華の森へと。馬車は身動きがとりにくいので馬を使い出かけた。

だが私が4日前に通ったらしき道を見つけたが自信がない。

するとヴィオラが馬からひょいと、飛び降りた。

「うん。あまり馬の後などは残っていないですわね。」

地面を手で少し触り呟いた。

口調も姿もどこかのお姫様を思わせ彼女。だがそれに似合わず乗馬などが上手かった。

「…この先少し行けば湿地があるはずだ。運が良ければそこに手がかりがあるはず。幸い、雨は降っていないから。」

少し思案する風に言ったのはハーレイだ。

本当に彼等は何者なのだろう。

自分は二人に助けられた身なので余計な詮索はしないようにしているが、やはり気になるものは気になるのだだった。

何かをしていないといろいろ余計なことを考えてしまいそうだ。

私は頭を一振りするとハーレイの言葉に二人で頷いて、先へと進んだ。

この乾いた森にある湿地だ。他の所のと比べてもそれほどぬかるんではないのだろう。だが、地に後が残るはず。

もしかしたらないのかもしれない。手がかりが。

淡い期待だが、あつて欲しい。

そう、私は祈るような思いで先へと馬を進めた。

「着いた。ここからが湿地だよ。所々ぬかるみがあるから足を取られないように気をつけて。」

先に馬を進めていたハーレイがこちらを振り返り、言う。

まるで小さい子供に、あそこへは行つてはダメよと、言い聞かせてくる母親のようだ。

私にしてみれば、もう一人兄ができたような心境だ。

兄

私を助けるために逃がした兄さん。  
待ってて。必ず探し出して助けてみせるから。

兄さんが強いのは知っている。だが心配だ。  
だって家族なのだから。

馬から降りて二人と別行動をしていた。一人暗闇へと進む。その時、  
何かが光った。

迷わずくさむらへと手を伸ばす。

それは意図も簡単に見つかった。

「これは、兄様の眼鏡……。」

どうしてと、呟く。

ヒビが入り、傷つき、泥が付いていた。フレームは治し用がないくらいに曲がっている。

それは馬の足跡が辺りにたくさん付いている場所に落ちていた。

それを再確認した私の顔からはサーと血の気が引いていく感覚。

「兄様、嘘でしょう……。」

時が止まったかのように感じた。

まるで世界にただ一人突っ立っているかのような孤独感。

グラリと身体が傾く。

だが、確かに自分の身体：のはずなのに、そうではないようにぼんやりとを感じる。

ああ、私はなんて浅ましいの

兄すらも失った

私の近くにあるものが、私のせいで消えてゆく、失ってゆく

目尻から涙が零れた。

途端、私の視界は目まぐるしく変化を遂げた。

頬に当たるのは固くも温かい何か。

「大丈夫、フィオーラは無事だから。大丈夫、心配ないよ。」

頭上から降ってくる優しい声。

「……ハーレイ？」

「うん。」

その優しい声でぼんやりと感じていたのが嘘のように、頭がはつきりしてきた。

自分が今いるのは彼の腕の中。

つまり抱きしめられ、支えられている状況。

おそらく、身体が傾いた時に抱きしめられたのだろう。

「……………」

私は目の前の青年を仰ぎ見た。

「？心配だったからこっちに後から向かったただけけど…」

「違うわ！どうして兄の名前を知っているの！？」

私は一切兄の名前を口に出していない。

なのに彼の唇が紡いだ名前。

それは偶然などで紡がれることなど絶対にはいはずの名前。

いくら助けてくれた人達でも私は名乗らなかつた。

家はまあまあ名の知れたものだ。そうやすやすと名乗ったがため、家族や屋敷の者に危険が及ぶ場合があつてはこまる。

それに、兄は王子の側近だ。元は騎士団長だった。それだけに、名は知れ渡っているはずだ。

ハーレイとヴィオラに心配され、笑顔を向けられた時には良心を苛まれたが、名は尋ねられなければ名乗らないと決めていた。

だが、結局尋ねられてはいない。  
だから知らないはずだった。

なのに……。

そこまで考えてはつとした。

「…………… なた、貴方、まさか… 兄様を襲ったの! ?  
疑心暗鬼にとらわれていた。

「落ち着いて、落ち着いて、モニカ!!」

彼が両肩に手を置き落ち着かせようと揺さぶる。

「なんで襲ったのよ! 兄様を返して!! なんで、…………… どうして…………… また…………… 私から大切な人を奪うのよう!」

髪を振り乱して、絞り出すような声。

最後の方は嗚咽混じりだった。

「モニカ、聞いて。俺はフィオーラの知り合いなんだ。だから眼鏡をみただけでもわかる。」

地べたに座り込んでしまった私と視線を同じくして言う。

「…………… 嘘よ。そんなの嘘。」

それでも弱々しく首を振り続ける。

「……もし俺が敵だったら、モ二力を助けたりしない。」

だから信じて、と言う。

先ほどから身体が熱くなってくる。この感覚には覚えがあった。

だめだ。

このまま力を使つては。

頭ではわかっているはずなのにどうしようもない。

その異変にハーレイも気付いた。

「モ二力？」

風もないのに銀の髪が舞い上がる。

力が暴走しする前触れだ。

このままでは二人を巻き添えにしてしまう。

敵なのに……

そう思いながらも身体は素直だった。口を突いて出た言葉それは

「に、げて、…お願い、逃げて。」

彼等を心配する言葉だった。

上手く動かない身体で必死に彼を押しつけようとする。

が、ハーレイは一向に動く様子がない。

「　だめ…っ！」

身体からあふれる力は、全ての者には強すぎる力。

いつもは制御できているのに……私の声や感情の増長によって左右される。

このままじゃあの時みたい……。

唐突に目の前が真っ暗になった。  
唇には温かい物が当たっている。

な、に

おどろいて瞠目する。

すると、それは唐突に離れた。

「ほら、大丈夫。」

ね、っと笑いかけてくる。

私の思考回路は一時停止した後、状況を理解した。

「　な、な……なにすんのよ……！」



顔に朱が走るのがわかる。

「なにつて、……収まったろう？大丈夫。」

そう言われてみれば……

「……収まったわ。」

そこではっとする。

「でも、……！！」

「でもはナシ。」

尚も食い下がる私の唇に人差し指を彼は当てた。

「……っ！」

「それにしても俺のことを疑うなんて酷いなあ。少し、いや、かなり傷ついたよ。」

「……貴方、本当に違うの？」

優しく微笑みながらも、私に疑われて傷ついたと言う彼。かなりの優男に見えるのに、していることは目茶苦茶だ。

「ああ。違う。俺はフィオーラの知り合いだ。っていうか親友？」

なぜに疑問形？などとも思ったがあえて口にはしなかった。

「信じていいのね、貴方を。」

再度確認するかのように尋ねる。

「もちろん。」

聞くまでもなく、返ってきた返事は自信満々だった。

なんだろう。

なにか頭に引っ掛かる。

そうだった。

「ねえ、なんで兄様の名前だけでなく私の名前まで知ってるの?」

私の名前はあまり知られていない。というか、伏せられている。

兄も、自分の知り合いにすら教えていないはずだ。

「ん? ああ、それは」

「何年もの付き合いなのに、フィオーラが私達に貴女のことをいつまでも黙っているから、調べましたのよ。」

ハーレの言葉を遮るように次を言ったのはどこからともなく現れたヴィオラだった。

彼女は少しご立腹のご様子だ。

「やあ、ヴィオラ。ちゃんとそっちは探したのか？」

ハーレイは、ヴィオラが立腹なのを知ってか知らずかなんでもない風に言う。

「私のことをお聞きになる前に貴方はどうなんですの。その前に離れてくださいませ。」

近づいてきならそんなことを言い、そばまで来るとハーレイの腕の中でいた私を取り返すように奪い返す。

「大丈夫です？何もされていません？」

彼女より少し背の低い私に目線を合わせて問い掛けてくる。

「ええと……はい。」

なくは無い、が。言える訳が無かった。

それに、自称チキンハートの私にはそんな度胸もない。

そして、どうしていきなりここに来たのかと思っただ、彼女は難無くそれを口にした。

「心配しましたわ。いきなり雲行きは怪しくなるし、強風が吹いて来るし、ろくでなしは居ませんでしたもの。」

「あつ。」

思わず声を上げてしまった。

辺りを見渡し空を仰ぎ見る。

薄暗い色をした雲は少しずつ遠退いていくものの、風は一向に治まらない。

私のせいだ。

私が我を失って、力を暴走させてしまったから……。

すると指先に何か温かい物が当たり、搦め捕られて握り込まれた。

それは、ヴィオラに分からない程度に近づいたハーレイの手だった。

強すぎず弱すぎず。心地好い温かさ。

彼が一体私の何処まで知っているのかは分からない、が心配し、氣遣ってくれていることは分かった。

いくら暴走を止めるためだと分かっていたとしても、キスをされたのは頂けないが……。

覇気のなかった顔に少し朱が走る。

ファーストキスだったのになあ。

それは辛い。

だが、それ以上に嫌悪感を感じない自分に疑問を持つ。

なぜなのだろう？

「……………もうそろそろ屋敷に帰ろうか。だんだんと肌寒くなってきたことだし。」

さりげなく自分の着ていた上着を私の肩に羽織らせながら言った。

まだ夏だとはいえ、夕方になると気温が急激に下がる。もう秋と言ってもいいくらいだ。

私は手の中の壊れた眼鏡を大切に抱え、ハーレイの意見に賛同したヴィオラは優しく私の肩を抱いた。当然それはハーレの上着を落とすためで、ペチリと彼に投げ返していた。

## 屋敷再び（前書き）

単純なサブタイトルですみません

## 屋敷再び

屋敷に戻ると侍女などに寄ってたかられ、バスルームに連れ込まれた。

屋敷とは私が彼等に助けられ、連れてこられた場所だ。

「自分でできますから。」

脱衣所で私から離れようとしない侍女たちにどまどうような視線を向け、口にした言葉。

だが彼女等は不満げだった。

私のドレスに手を掛け、手伝おうとしていた手をやりわり退けることで、態度を示す。

いつまでも渋る私にとうとう諦めたのか、服に手を掛けていた侍女の方が手を離れた。

「でしたらお体を洗うのをお手伝いさせて下さい。」

5人居る内の一番若い侍女が口を開いた。

となると、彼女が一番偉いのだろうか。

「すみませんが、一人になりたいものなので一人で入らせてくれませんか？」

正直言つて疲れていた。

それに兄のこともあり、一人で考えたかった。

目を向けるそこにはハンカチに包まれた眼鏡が棚に置いてある。

その物悲しいさまに侍女は渋々了承せざるをえなかった。

この屋敷の主であるらしいハーレイから何か聞いているのであろう。

若い侍女は目線だけで他の者も下がらせ、私に何がどこにあるのかを教えると自分も、失礼しましたと言つて出て行った。

扉が完全に閉められたのを見届けると、ドレスを勢いよく脱ぎ捨てた。

あらわになった身体。

白い胸元。

そこには複雑な紋様があつた。

それほど大きくないが、紅く色づいており、白い肌には目立つ。

普段は薄いピンク色なのに今は

「真つ赤。」

胸元を見下ろし、指先でなぞりながらポツリと言葉を落とす。



なぜこんな物があるのかという理由はとうの昔に答えを知っている。

あの、時から消えない痣。<sup>アザ</sup>これからも決して消えることはないのだろう。

バスタブにポチャンと浸かる音が浴室に響く。

詰めていた息をはあー、と吐き出す。

何やってるんだろう、私。

繰り返し考えることは兄のこと、それからハーレイのこと。

一人になったとたん考えが波のように押しかけてくる。

どうしてあの時私だけ逃がしたの？

どうして見知らぬ私を助けてくれたの？  
どうしてキスしたの？

考え出したら止まらなくなる。

力の暴走を止めるためならあんなことをしなくてもなにかあったはずだ。

多分……。

あの時のことを思い出して、思わずザブンと頭まで浸かる。

息を吸うために水面から顔を出し、吐き出した息は溜息なのか、息継ぎなのか私にはわからなかった。

「あゝもう！悩むのやゝめた。今さらうじうじしたってしょうがないわ。母様だつてきつとそう言うわよ。」

うんうん、と頷きながら自分を納得させる。

こうでもしないと立ち直れない。

ならばさっそく自分にできることをしないと、と勢いよくバスタブから出て、身支度をテキパキと整える。

そうと決まれば、私の向かう所はただ一つだ。

部屋を出た所のすぐ近くに先ほどの侍女が立っていた。

私が出て来たのに気づくとすぐさま近付いてくる。

「まあ、お風邪を召されてしまいますよ。きちんとおふきになってください。」

そう言つと、どこから出したのか、タオルで私の髪の毛の水分を拭き取る。

銀色の毛先から落ちる雫は、もうすっかり冷たかった。

しばらくすると満足したのか手を離れた。

その彼女に私は尋ねた。

「あの、ハーレイの居る部屋まで案内してもらってもいいですか？」  
すっかり時間は経ってしまったがまだ聞きたいことは沢山ある。

「ハ、ーレイ……イ……様の、ですか？」

なぜかハーレイの名前で詰まった彼女を不思議に思ったが、話したいことがあるの、と言えば彼女は渋りながらも了承してくれた。

長い廊下を彼女に付いて行きながら思い付いたことを口にする

「この屋敷は場所的に何処ら辺りになるんですか？」

先を行っていた彼女は何故か肩をビクリと揺らした。

そんなあらかさまに私を警戒されると正直傷つく。  
別にそんなに、振って悪い話題だったの？

「あの、えと、それは……」

何やら歯切れの悪い返事だ。

どうしてか、こちらが虐めているような感じになる。  
さっきまでは侍女の鏡のように毅然としていたのに。

「悪かったわ。ハーレイに聞くから気にしないで。」

私がそう言つと彼女が申し訳なさそうに目を伏せた。

「すみません……。」

「大丈夫、ただ不思議に思っただけだから。」

早く先を急ぎましょう、と目線を向ければ彼女わかりました、と足を進めた。

もうそこには先ほど動揺した彼女の面影は、毅然とした姿からは見出だせなかった。

「こちらにきつといらっしゃられます。」

一つの大きなドアの前で立ち止まった彼女はクルリと振り向き、私に道を空けた。

ドアは大きいと言われても丁寧に装飾を施されており、その古い紋様からは歴史を感じさせる。

促された私はドアの前まで静かに歩みドアノブに手を掛けた。

ドアは想像していたものと違い音も無く開いたが、ノブを回す音だけは開けたばかりの室内に響く。

まず私の視界に入ってきたものは闇。

室内にあった窓らしき物は、うつすらと闇夜に浮かび上がる月を映し出していた。

この屋敷に戻ってきたのは夕方頃。  
それから1、2時間も経っていないのに、もう外は暗闇が支配していた。

少しすると月明かりに映し出される室内が見えるようになった。

窓、机、ベッド、椅子にソファーに棚。  
一般的な物は全てそろってはいるが、どことなく寂しい部屋。私はそう感じた。

一歩、廊下から室内へと足を踏み入れれば、ここまで案内してくれた彼女が一礼してドアを閉めて出て行った。

シーンと静まり返る部屋。

本当にこんな所にハーレイが居るのか、と疑ったがとりあえず探してみる。

まずはヘッドの側まで行つて中を確認する。

はたと気づいた。

これではまるで、私が寝込みを襲っているようだ。

そして声をかけて探せばよかったのだと。

すう、と空気を取り込み、名前を呼ぼうとした瞬間。

「なにしてるの」

背後の耳元で息を吹き掛けられながら声がした。

「っ、きゃあ」

もごり、と口を押さえられた。

パニックった私は何が何だかわからなく、必死にもがく。

口を押さええている、ゴツゴツした手に爪を立てて抵抗し、なんとか声を出そうとする。

「ちよっ、ちよっとまって！痛い。俺だよ。ハーレイ。」

へ？

そして恐る恐る背後を振り返る。

そこには焦った様子のハーレイがいた。

見知った顔を確認し、手と肩の力を抜くと口を押さえていた手は退けられた。

「っ！ビックリさせないでよ。馬鹿。」

だが驚かされ、恐怖を覚えた私は思わず怒鳴った。

そうして彼の広い肩を力の抜けた手で叩く。

「ごめん、ごめん。寝ていたらいきなり部屋に入ってきたものだから何してるのかと思って。」

「だ、だって、貴方を探していたんだもの……。」

「だからって、男の部屋にこんな風にすぐか入って来られればこっちはたまったもんじゃないよ。もう少し用心してくれないと。」

呆れた風に言う彼はぽんぽんと私の頭を優しく叩く。言っていることは厳しいのに、していることは優しい。

「……ごめんなさい。」

そんなことを言われれば謝るしかなかった。

「うん。ちゃんと解ったならいいよ。それにモニカが以外とお転婆なことも分かったしね。」

お転婆ばと言われ真っ赤になってしまふ。

今まで猫被っていたのに…。

それより、始めの方でハーレイは気になることを言った。

「寝ていたのよね？」

「うん。」

「ベッドには居なかったわよね？」

「ソファで寝ていたからね。」

「どうりで。」

ベッドから驚かされたなら、私はそれほどまでビックリしなかっただろう。

「そうだったの。だったらいつ起きたの？」

「モニカがベッドに近づいた時ぐらいにちゃんと起きたかな？けど最初っから気づいてた。」

意味が解らない。

どういうことなのだろう。

「起きてはいたんだけど、ちゃんと意識が覚醒していなかったってことだよ。」

黙って首を捻っているとハーレイは説明してくれた。

「で、何か用事があったんでしょう？」

彼にそう言われ、ハッとする。



いけない、忘れていた。

「私がここに来たのは、貴方に尋ねたいことがあったからなの。」

自然と表情が固くなる。

部屋は月明かりが調度いいくらいに照らし出しているので、明かりはいらないだろう。

「なぜ正体の解らぬ私を助けたの。あんな所で馬に乗せられ、意識のない私を拾えば面倒なことになることくらい分かったはずよ。それに、いつから私のことに気がついていたの。」

いくら月明かりで明るいとは言え相手の表情までは見えない。

自分の、この強張った表情が見えないことは幸だが、彼がどんな表情をしているのか知りたいとも思ったが、それと同時に知るのが怖いと思った。

顔は知らず知らずのうちに顔は下を向いている。

一瞬の沈黙の後、ハーレイが口を開く。

「助けたのは君を乗せて走っていた馬が俺達の前で大人しく止まったのと、君が貴族だと思ったから。そして君がフィオーラの妹、モニカだと気がついたのは、あいつの眼鏡を見た時。森で助けた時から訳ありだとは思っていたから面倒事なんて百も承知だったから別に今さらなんとも思わない。」

唇がわなわな震える。

そんなのあるわけがない。

あるはずがない。

嘘だ。

「……うそよ…嘘。…面倒事になるのも百も承知で、今さら何とも思わないなんて嘘よ。貴方、見たでしょ！？私がしたことをっ！それでも言えるって言うの！」

怒りに任せ、言葉を紡ぐ。

感情の波に押し流されそうだ。

自分を抑えろ、と心の中で声がする。だが、抑え切れない感情は留めなく涙と共に溢れ出す。

「貴方も…私のこと、気味が悪いんでしょ…。…みんなそう。みんな…離れて…いっちゃうのよ。」

突然ぐいっと腕を引かれた。

「気味なんて悪くない。」

たった一言。

なのにどんな言葉よりも鮮明に耳に入った。

その大きな腕に抱かれ、優しく頭を触られると、なぜだか彼の言葉を信じれた。

それに促され、涙声で心の中にあつた蟠り<sup>わだかま</sup>を吐き出す。

「それに…怖い。…自分の意志に…関係なく…暴走した、当の本人…は…止めることのできない…人外の力…」

「君はその力で人を傷つけたことはあるの？」

静かな、本当に静かな一つの呟きが落とされた。

私は思わず唇を噛み締める。

その口をこじ開け、無理矢理声をしぼりだす。

「あるわ。」

暗闇に落とされた言葉は固い響きをもっていた。

「その相手は君を責めた？君のせいだと言ったの？」

「……口ではなんとも言えるわよ…」

「そうかもね……。だけど、君に力があってもなくても、人は人を傷つける術<sup>すべ</sup>を持っている。それは剣術を習っている俺にも同等のこと。」

彼の言葉に思わず顔を上げ、彼を見た。

その反応をハーレイは満足そうに見て、優しく目を細めた。

「人を傷つけることは誰だってできるし、その方法は星の数だけある。モニカの場合は方法が少し違うだけ。暴力と言う名で他人を傷

つけることもあれば、言葉で心を傷つけることもある。そしてそれの使い道を変えれば、暴力は人を助ける力にも返られる。そして言葉は相手を癒す。そしてモ二力の力をも誰かを守れる。」

守れる。

私が？

今まで暴走ばかりしていた力が誰かを守るなんて。

そんなこと考えたことすらなかった。

いつも力が暴走しないように神経を張り巡らしていただけだ。

力を解放することを恐れて、人との関わりも断ってきた。

それを彼は自ら解き放てと言う。

「……無理よ……。私にはできないわ。」

泣きつかれて頭痛のする頭をゆるゆる振りながら弱々しく言った。

「どうしてやる前から諦めるの。していない内からそんなことを言っている、出来ることも出来なくなるよ。」

「だって…始めから結果は決まっているもの……。」

「ならその結果は誰が決めた。」

真っ直ぐな瞳に射られた私は目を離すことができない。

「っ、それは…。」

「出来ないと決めつけるのは試してからでも遅くはない。だから、もう自分を否定しないで。」

彼の言葉が心に浸みた。

自分を認める、好きになれ、と。行っている。

「自分を否定……。」

「そう、否定しないで。そんなことしていたら、何もかもダメになる。君はもっと自信を持つべきだ。」

できるよねと、彼の瞳が語りかけてくる。

少しだけ、信じてみたいと思った。

彼の言葉を。

「……そう、ね。もう少し頑張って信じてみようかしら」

自分を、そしてあなたを。

言葉にはしなかったが、私は強く思った。

すると、自然と顔は下を向いていたものから、毅然としたものへと変わり、表情は笑顔になった。

悪くないかもしれない。

貴方を信じてみるのも……。

あれから2日。

続けて雨が降っているので、森へは行けていない。

家へと手紙を出して知らせようとも思ったが、まだフケート王子などが居るかもしれないことからそれはためらわれた。

もしかしたら屋敷に戻っているかも、という淡い希望も持ったりしたが、あの兄が頼まれたことをほったらかして、いそいそと帰ると思いにくい。

それにハーレイの言葉もあり、フィオーラは無事だと信じている。

なので、あの時ほどは焦ってはいない。

「モニカ様？どうかなさいましたか？」

ぼんやりと部屋のソファーから窓の外を見ていた私ははっとする。

さっきまでは雨がザアザアと降っていた空は今は曇天。

まるで今にも泣き出すのを堪えているかのようだ。

ふい、と目線を窓から逸らし、声の発せられた方へと目を向ける。

「うっん、何でもない。」

声をかけてきたのは二日前、私をハーレーの居る場所まで案内してくれた侍女、エスぺだ。

「ですが2時間もそのままではお体にも悪いですよ。」

「そうね、……ここには室内訓練所なんかはあるかしら？」

しばらく考えた後に言葉にする。

このごろ何もしていないから身体が鈍っている。そろそろ身体を動かしたい。

「訓練所ですか？ありますけど、何をなさるんです？」

「少し身体を動かそうかと思うの。」

彼女に尋ねられた言葉に、花咲かんばかりの笑顔を向けて上機嫌に用意を始める私。エスぺは戸惑った顔をして私の行動を見守っていた。

「た、たんま、たんま！」

焦った男の声。

私は相手が完全に降参しているのを目にとると、手に持っていた木刀を手元に戻す。

とたんに遠回しに見ていた人々が拍手をよこす。

ここは室内訓練所。

その名の通り、ここは身体を鍛える所。

自分の目の前には数人の男が倒れている。  
中には恐持ての者も。

「はあ、大の大人が情けない…。」

（せめて女には勝てないと…。）

「けど、いい運動にはなったわ。」

うんうん、と満足げに頷き、自分の相手をして倒れている者や腰の抜かしている者にありがとう、と手を振る。

と、そこへまた一人歩み寄って来る者があつた。

「おひとつ、私とも手合わせ願いたい。」



よろしいか、と問い掛けてくる男は図体も大きいが、しつかりと筋肉が付いており、がっしりとした体格の恐持てだった。

惜しげもなく曝し出しだ二の腕の筋肉、タンクトップの上からでも分かるほどの腹筋の割れ目。

すこしその格好は見ていて寒かった。

髭は剃っているものの、ほお擦りをすればジヨリジヨリしそうだ。髪はすくんだ金茶色。

対する私の装いは侍女から無理矢理借りたシャツに長ズボン。長い髪は頭の高い位置で一つにくくり、ポニントールにしている。シャツの下に隠しているが、胸元にはあのアメジストのネックレス。

侍女達に借りる時、よそ様のご令嬢にそのような格好をさせれません。と泣いて止められたが、普段からこんな格好しているから、と振り切ってきた。

辺りから見れば、ぱっと見私は見習い騎士ぐらいに見えるか見えないかぐらいないだろう。髪の毛なんかも梳かずに引つ詰めて縛つてある、と言った方が正しい。まさか誰も、普段はドレスを着ている令嬢だとは思ひもしないはずだ。

対する目の前に立っている例の男を見ると、40代後半くらいに見える。

だからといって中年より、壮年と言う言葉が似合いそうな風貌だ。

「ごめんなさい。私では貴方の相手にならないわ。」

その男が纏<sup>まと</sup>う雰囲気、身なりを見て人目で解った。  
この人は強い、と。

私が言った言葉に納得がいかないという顔をしている男に、私は言葉付け足した。

「相手の力量がある程度分かっってしまうから……。だから今は私、無駄な手合わせはしないわ。」

「ほお、私の力量が解るのか。」

「貴方くらいの騎士なら大抵の者は負けれると思うわよ。」

感心した風に言う男に私は思ったことを言う。

「こりゃーたまげた。小さいのにやるなあ。」

確かに彼と比べたら私の頭なんて彼の肩よりも少し下辺りになるが、標準としては私の身長は普通だ。単に彼が高いだけ。

「で、相手はしてくれないのか？」

「当たり前じゃない。貴方を相手にしたら、私1分と持たないもの。」

「そうやって相手の力量を解ることができるのはいいことだが、挑戦もしてみないで決め付けるのはあまり良くないぞ。」

若いならもつと威勢良く突っ掛かってこないとなあ、と笑いながら答える。

「分かってるわよ。だけど、今日は身体を慣らして運動したかっただけなの。」

私が言った言葉に、私によって打ちのめされた男達がビクリとした。

「そうか、明日もくるのか？」

「外が雨だったらね。」

「お前さんは騎士ではないだろう。私の知る女の騎士や、見習いは合わせて6人しかいない。その中でお前さんの顔は見たことがない。」

それにその髪色もだと。

「だって私、軍なんかに入ってもいないし、騎士ですらないもの。貴方も感づいているでしょうけど、立派じゃないけど令嬢よ。」

冗談めかして答えると、やはり、と呟きが落とされる。

「では、客人のモニカ嬢なのだな。」

「そうだけど…。なんで知っているの？」

「ああ、それは」

言葉の途中で訓練所の入口の扉が勢い良く開いた。

「私、何やっているんだ！」

そこから入って来たのは肩で息をしているハーレイだった。

「これは、ハ」

「アルギ、部下の者を連れて少し下がっている。」

何かを言おうとした男はアルギ、と言うらしい。

それを遮るようにハーレイは言い視線を投げかける。

その態度は正に上から命令しなれている者の態度で、正直驚いた。

私に接する時とあまりにも違いすぎたから。

彼の言葉にアルギは軽く頷くと、話をすっかり聴いていた部下に向かって視線だけを寄越して、そくさくと出て行った。

やはりというか、何というか、想像してはいたがアルギは偉い人だったようだ。

どうりで、並外れて他者よりも強いと感じた訳だ。

「なんでこんな所に居て、木刀を持っているんだよ。」

額に手を当てて呟く彼を見て、私は正直に答えた。

「身体を動かしたかったのよ。近頃鈍ってたし。」

そう言いながらリボンで、一つ括りにしていた髪の毛を下ろす。

「…君に剣を教えたのは誰？」

しばらく黙っていたハーレイの口から出た言葉はそれだった。

「兄様よ。けど、正確には違うのかしら？」

「あのフィオーラがモニカに剣術を！ありえない、あいつに限ってありえない……。だけど、正確には違うとはどういうこと？」

「？私のはほぼ我流なのよ。それをより正確にするために兄様が教えてくれるようになったの。」

兄に対してありえない、と連呼している彼に首を傾げた。

「あいつ、部下に相手にはなってるものの、教えはしないんだ。そうとう腕が立つのに……。なのに、よりもよって妹に教えるか、普通！」

「それは仕方ないと思うわ。」

いつもの冷静な彼とは少し違う様子には私は戸惑うものの、事実を口にする。

「だって、幼い頃から私が兄様の特訓を盗み見して、見よう見真似

で始めちゃったんだもの。」

「……………は？」

私の言った言葉に対し、呼応するように発せられた彼の声はなんともマヌケなものだった。

実際、ハーレイは啞然としていた。

私があまりにも普通の令嬢と掛け離れているものだから。

ハーレイの知っている令嬢など、お茶を優雅に飲んで会話ではお家自慢をし、何処の化粧品がいいだの、このドレスお幾らしたと思います？と高飛車にオホオホと笑っているものばかりだった。

ましてや家柄が良くなるのに比例するかのようには、そんな傲慢さは大きくなっていく。

それに比べて、彼女は家柄良し、容姿良しのかかなりの上位だ。なのに自ら剣を習っていると言う。

「だから兄様は護身術になるくらいに教えてくれようとしてくれようとしたんだけど、それが予想以上だったみたい。」

「それはどういう……。」

「護身術以上に勝るものだったみたいでね、…………。」

もう、啞然としていた。

こんなにも外見が可憐な少女が強いなんて想像もできないハーレイだったから。

「やあね、そんなリアクションしないでよ。私はお固いのが苦手なだけ。剣術だつてばれたら止めらされると思つて、隠れてしていたら我流になっちゃつたのよ。」

あまりにもハーレイの反応が可笑しかったものだから、思わず素に戻つてしまつた。

だが、彼はそんなことに気づいていないだろう。

「……けど剣術は見ていだけで獲得できるものではないだろう?」

それをどうやって、と問い掛けてくる。

「そうなんだけど、実際兄様の付けていたノートとか、こつそり読んでいたの。こういう時は剣をこうして受け流す、とかね。けど、それでは女の私には無理なことも沢山あつたわ。だから自分でなんとかしてた。」

もう、ハーレイは感心しぱなつしだつた。

そこで何かに思い当たつたように問い掛けてくる。

「まさかとは思つけど、あんまり社交界に出ないのは単に堅苦しいのが嫌なだけ……?」

ドキリと心臓が跳ねた。

「え、え。そんなところよ。」

こんな返事では、ハーレイに不信感を持たれたのは確かだ。

だが、私にはこれ以上何かを言う自信など無く、黙り込んでしまった。

自分に宛がわれた部屋に戻ると何故かヴィオラが待っていましたとばかりに顔輝かせた。  
どうして部屋に居るのはかは解らないが…。

「モニカ。いらっしやい、いらっしやい！」

彼女が居るのは私が使わせてもらっているベッドの上。

しかも、もう寝間着姿だ。

足をぶらぶらさせて手招きしてくる姿はとても20歳には見えない。

「ヴィオラ、どうしたの？」

当然それは、部屋に居ること、寝間着姿のこと、ベッドに居ることを指している。



「モニカを待っていたんですわ。」

笑顔全開で笑いかけてくる彼女はとても嬉しそうだ。

そういえば、この屋敷に再び戻って来てから早二日。

ハーレイとは顔を合わすことはあっても、彼女とは全く顔を合わすことはなかった。

「ここ二日何処に居たの？屋敷内では全く見かけなかったけど……。」

ヴィオラの居るベッドに近づきながら疑問を口にする。

とたんに彼女の機嫌が目に見えて悪くなった。

「最悪でしたわ。頭いかれてんじゃないのかしら。」

「ど、どうしたの。」

「あれからここに帰って、私監禁されていましたの。」

「なっ！かんき」

「声を下げて下さいな。せっかく抜け出して来たのに見つかってしまいますわ。」

監禁という言葉に驚き、大声を出してしまいそうになったが、跳んできた彼女の手により塞がれた。

静かにできますか、と問い掛けられ、私は頭を縦にぶんぶん振る。

「　　だ、誰に監禁されていたの。」

監禁だなんて、そんな酷い仕打ちをする人がこの屋敷にいたなんて……。

「誰にだなんて決まっていますわ。あの小憎らしい男ですわよ。」

頭にクエスチョンマークが浮かび上がる。  
小憎らしい男？

「ハーレイですわ。」

「えっ？」

そしてヴィオラの口から出た名前にびっくりする。

あの自分を助けてくれた彼がそんなことをするなんて驚きだった。

そこで一つの考えに行き渡った。

だがそのことを彼女に尋ねる前に、二人の間に声が割って入ってきた。

「　　何でもニカの部屋にヴィオラが居るの。」

それは何とも不機嫌そうに顔をしかめて、ドアにもたれ掛かっている、今話題に上ってる人物だった。

「まあ、行儀の悪い。乙女の寝所に無断で立ち入るなんて、なんて

不粹なのかしら。」

あまりにも状況が飲み込めれないでいると、ヴィオラが勇ましくも立ち向かった。

「それは君が言える事なのかな、ヴィオラ。」

私に対する時とは違い、あらかじめ毒を吐く彼。彼は今、私の目には別に映った。

そこで、フリーズしていた脳が復活。

「ごめんなさい、お邪魔して。失礼します。」

それだけ言うと、ヴィオラの居たベッドから離れて部屋の外へと向かう。

ドアに駆け寄って出ようとする時に、ポカンとしたハーレイの目と目線が合ってしまったが、慌てて目線を外して外への扉へと手を回した。

あれから走って走って走って、庭園に出た。

晴れたら綺麗だろと思われる景色は今もちろん綺麗だが、どこか寂しく感じられた。

そして雨のあまり当たらないような木陰を選び、幹の根元に座り込んだ。

湿気を多く含んだ風が雨粒を私の元まで運んでくるが、もちろん私はそんなことお構いなしに居続ける。

屋敷内に居れば濡れることはないのだが、今の私は外に出たかった。

「どうして逃げ出してしまったのかしら……」

自分で呟きながら、そんなの決まっている。

ヴィオラがハーレイの彼女だと思ったから。

彼に監禁されるようなことを彼女がした覚えは私には無い。

なら、男が女を監禁する理由は、私にはどう捻っても一つしか思い浮かばなかった。

それは、他人に彼女を見せたくないという独占欲からくるものではないのだろうか。

何でだろう。

何故か気になってしまう。

胸が痛む。

今まで家族以外の他者を、こんな風に気になどしたことはなかったのに……。

それは完全に私が一方的にハーレイの事を気にしているということ。

ただの尊敬の念からくるものかもしれない。

だけど、人を想うことがこんなにも苦しく、切ない事だともいえないかった。

この気持ちが恋心かどうかは分からない。だけど他人と関わることに恐れを抱いていた私に希望をくれた。

それは優しくも温かい心だった。

ポタリ、と葉に付いていた雨粒が私の頬に落ち、伝った。

その透明な雫はまるで私の流した涙のように地に吸い込まれて行った。

どうしてあの人のことが気になるんだろう

自分のわけの分からない気持ち。

私には恋なんていう甘い感情は持ち合わせていない。

だから恋ではない、と思う。

だったら何だ、と問われれば生まれて直ぐにヒナドリが見たものに

懐くような、そんなものなのかもしれない。  
側にいると安心できるような、そんな感じ。

けれど少なくとも、彼は貴族だ。

私は世間から身を隠さなければならない。

どんなことがあっても……  
関わりを持つてはいけない。

それが私にできる、父様への精一杯。

あの後落ち着いてから部屋に戻った私は、アスぺに散々説教をくらった。

木陰とはいえ、風に因って雨に当たっていた。そのため銀の髪からはあまり色の変わらない透明な水滴が落ちていた。

どうやら彼女は髪に水滴が付いていることにかなり敏感なようだ。

ごしごし、と髪を拭くわけでも無く、押さえ付けるようにぽんぽんと拭き取ってゆく様は馴れたものだった。

兄弟でもいるのだろうか、と思ったが、他人の私情に口を挟むのは良くないと思いやめた。

私が他人にされたくないことだったから……。

「はい、これで大分マシになりましたよー。」

そう言つて髪に手早く櫛くしを通してゆく。

「別に良かったのに……。どうせ後から浴室にいくつもりだったから。」

面倒なことが嫌いな私がぶつくさ言っていると過敏な反応を見せた。

「良くありません。体を温めるにしても、そのままにしていたら風邪を引くんですよ。熱が出て、苦しい思いをしてもいいんですか？」

「それは嫌。」

だったらほつたらかしにしないで下さい、と返してくる様は口調こそそうではないが姉のようだった。

実際私よりも三歳年上なのでそう思うのも無理なかったが、他人と関わるのが苦手な私が自然と素直に言葉を返すには十分だった。

そう言えば、とエスぺが言った。

「私が部屋に入って来た時、ハレーレイ様とヴィオラ様が何故か居たんですよ。どうしてでしょう?」

ビクンと身体が不自然に反応してしまった。

だが、それに気付いた風もなく彼女は、あまりにも五月蠅いので出て行ってもらいましたけどね。と退屈なく笑う。

そんな彼女に私はホッとした。

気負うことなく話せる事が素直に嬉しかった。

「あの二人仲がいいわよね。」

「ええ、それはもう、微笑ましい限りですわ。」

アスペの言葉で確信が持てた。

やたぱり彼等はそういう仲なのだろう。

「ですけど、ヴィオラ様もお可哀相に。全く以って不敏ですわ。あの方の独占欲の強いことといったら……まあ、本人は気付いていないみたいですけど。」

後半は聞こえなかったが、部屋のあちこちを動き回り部屋着やらタオルやらを準備しながら彼女はそんなことをぼやいていた。

そしてそれらを渡しながら頑張つて下さいね、と言われた。

その言葉に私は動揺してしまう。



「な、なんで……」

「さあ、なんででしょう。ヒミツです。」

そう言って可愛く笑う。

どうやら私の気持ちに気付いたわけではなさそうだ。

そしてその時私は気づいていなかった。  
その言葉の本当の意味を……

「さて、早めに身体を温めてきて下さいませ。」

そう言って彼女にバスセットを渡された私は、薄暗くなってきた廊下から窓の外を眺めながら歩いた。

外はもう、黄葉していた葉が静かに、そしてゆっくりと地に落ちてゆく。

そんな季節の始まりだった。



## 屋敷再び（後書き）

一応この章で一句切つきます。

サイトではもう少し進んでますので修正補足を頑張ります（笑）

## 思い出の郷愁（前書き）

サイトでは第2章とここから分けられているんですが、まあ、あまり関係ないんですがね。

## 思い出の郷愁

朝から外が騒がしい。

だいたい私は夜型だ。早起きは得意でもない。

いつもならお昼前に寝台から起き出すのだが、今日は五月蠅くて目が覚めてしまった。

日はまだ出ていないので今は5時過ぎくらいだろうか。

「……………な、に……………」

我ながら人様の屋敷で図々しく昼過ぎまで寝るのもどうかと思うが……………。

こつちまで駆けてくる足音がする。

私に宛がわれた客間まで走ってくる人など心当たりがない。

というより、みんな不自然なほど足音がしないのだ。まあ、単に私が気づかなかっただけかもしれないのだが。

なんだろう、と思いつつ急いで、椅子に掛けていたカーディガンを引っ掛けるように羽織る。

寝間着は寒くなってきている季節とはいえ、室内管理はしっかりとされており、薄着でもいけるくらいなので薄い生地で、身体のライ

ンがわかってしまうものだ。

森で襲ってきたやつではないだろうが、一応武器になりそうな鉄製のパイプとおぼしい物を手に取った。  
(なぜそんな物があるのかは謎だが)

膝丈より下まであるネグリジェの裾を大胆に捲り上げ、手早くドレスサーにあつたピンで手早く留めた。

胸元にある紫色の光が私を優しくはげましてくれているようで、私はホッと息をついた。

そして素早くドアの隣に移動し、壁に張り付いくのと、ボタンと扉が開いたのはほぼ同時だった。

「乙女の寝所に無断で入ってくんじゃないわよ！」

私はその物に向かって飛び込むように地を蹴り、頭にパイプを減り込ませようと勢いよく振り下ろした。

が、それは思わぬ形で受け止められることとなった。

自分の置かれている状況に目をぱちくりさせる。

背に回った手、パイプを捕まれた感覚、頬に当たる温かさ。

そして

「やあ、モニカ。元気してたか？」

懐かしい声。

「は？」

状況が飲み込めない。

まるで久しぶりの友に会ったかのような口ぶりで、話し掛けてきたのは兄だった。

兄を探しに行く、と言って4日目。

なんと兄は自分からのこのことやって来た。

「ほらモニカ、素に戻ってるぞ。口調、口調。」

そんな妹を余所に、兄はポンポンと言葉を投げ掛ける。

ようやくフリーズしていた脳が正常に動き出した。

敵と思ってパイプを振り下ろした相手は兄、フィオーラ。  
そして

「なんで兄様が居るの！しかも乙女の寝所に無断で入ってくるなんていい度胸ね。っていうか、どさくさに紛れて肩抱かないで。」

なまじりを吊り上げて口早にまくし立てるが、この兄には全く効果がない。

「なんでってモニカを迎えにきただけだし、乙女の寝所って……妹が飛び込んできて、抱きしめない兄はいないだろう。お兄ちゃん

うれしいぞ。モニカが自分から俺にハグをしてくれるなんて。」

ああ、思い出した。

兄はこういう人だ。

いつも最低では2日に1回は顔を出していた兄だったから、4日も離れていて忘れていた。

「兄様、わかったから……。」

いっそ脱力する。

心配していた自分が馬鹿みたいにに思えた。

自分に抱き着いている兄をペリツと引きはがし、向き直る。

「どうして私がここに居るのが分かったの。」

そう、私がハーレイ達に助けられたのは偶然のはずだ。  
必然なんかじゃない。

なのにどうして。

「ああ、それは」

私から離された兄は、名残惜しげに自分の手と私とを見比べていたが、尋ねられたとたん雰囲気が変わった。

いつも思うが、人が変わったかのような豹変振りだ。



「月華の森の周辺であるのはこの屋敷ぐらいだからな。君に限っては賢い馬のことだ、ここに来ると思ってね。」

だが、返ってきたのはなんとも単純かつお気楽な返事だった。

「……………そこにたどり着かなかったらどうするつもりだったのよ……」

妹に平気でそんなことをする兄の正気を疑う。

この屋敷の所有者らしきハーレイはどうしたのだろう。

というより、兄が非常識すぎるのだ。

こんな朝っぱらから良い迷惑だろう。

あの後、この客間からアスペによって追い出されたらしい二人。またヴィオラは監禁されているのだろうか？

というより、二人とも一緒に寝ているんじゃない……。という考えに行き着いた瞬間さあー、っと血の気が引いていく。

「兄様なんてことしてくれたのよ！ハーレイと兄様は知り合いなんでしょ。なのに、たとえ兄様の想い人がヴィオラだったとしても、なにも邪魔することないじゃない。」

勝手な予測をして兄に詰め寄る。

私はあの優しさに甘えそうになるのを我慢し、極力関わりを断っている。

なのにその決意が台無しではないか。

「?どういうことだ?確かに俺はあいつと知り合い?だが、別に遠慮するようなことは何もないぞ。」

全くもって意味が分からない、といった風な兄は、戸惑った目でこちらを見てくる。

「何馬鹿なこと言っているのよ。十分あるわ。あの二人は付き合っているのに。」

つい意気込んで、推測を口にすると、ブツと噴き出す音がした。

音の方を見ると、兄が肩を震わして笑っている。

「...付き合ってる?有り得ない、有り得ない。だってあの二人」

「朝っばらから俺の睡眠妨害するとはいい度胸だな、フィオーラ。」

何かを言いかけたフィオーラを無作為に遮る声が突如として現れた。開け放たれたままだったドアに手を付けて、不機嫌そうに現れたのは話に上がっていたものその者だった。

「おっ!ハーレイじゃないか。やっぱり来ていたんだな。この節はどうも、感謝はするが」

フィオーラはそのままハーレイに向かって歩いて行き、耳元で何か

を呟く。

もちろん、彼等から離れている私には聞こえるわけない。

兄の言葉に何か反応した彼はチラリと私の方を見ると、何かを言い返している。

なんだろう。

ものすごく気になる。

少しして兄が戻って来て、もう行くぞ、と言って私の手を引いた。

「えっ！何突然、どうしたの。」

ものすごく突然だ。

何が何だか分からない。

探していた兄が、突然やって来たかと思えば、次は私の手を引いて早々と出ていこうとする。

兄はハーレイの知り合いなのに、碌ろくな挨拶もしないで去ろうとしている。

世間知らずの私でも分かる。

これではかなり失礼だ。

フィオーラはこんなふざけた性格をしているが、礼儀は弁わきまえている。その彼がなぜここまでぶっ放しているのか。

それほど心を開いている、ということもあるのかもしれない。

だが、これでは失礼窮まりない。

「ちょっと！待って兄様。」

私は兄を急いで引き止めようとするが、兄は聞く耳を持たない。ハーレイの方を振り、仰ぐが彼は気まずげに顔を反らすだけで、口を挟もうとはしない。

さっきまで不機嫌丸出しだった彼だが、今はなぜだか申し訳なさそうな顔をしている。どうということだろう。

何があったかなど、とても聞ける雰囲気ではなかった。

兄に引つ張られて、ハーレイの隣をすり抜ける瞬間。私は兄に分らないように、こっそり魔法を使った。

ただの、指先だけの軽い魔法。

もう彼には森で見られているので、これくらい支障がない。

これは彼を守る魔法。

実際使える者はほとんどいない。もし使えたとしても、弱いものしか使えないのが普通だ。弱くてもそれを使うには全力をかけなくてはならない。

誰かを守ることは生半可にはできないということ。

しかし例外もいる。  
私のような。

しかも異例中の異例だ。

軽く、指周りにスペルを書き、指全体に纏わり過ぎてから彼に向かって投げる。

効果は一回分だが、ないよりはましだ。  
多分彼は、高位の位のある貴族だ。  
嫉まれ、命を狙われることもあるだろう。

そんな大変な彼の力になりたかった。

自分は逃げてしまった道だから。

淡い光りが彼を包み込む。

ハーレイがそれに驚き、こちらを見上げた。

私は兄に掴まれていない方の手で、笑って唇の前に人差し指を立てた。

口パクで言う。

『あ・り・が・と・う』

声に出したら、兄に見つかってしまふ。  
今の兄はとてつもなく不機嫌だから。

そして兄の背中を追い掛ける。

ドアが出る前。

やっと兄が振り返った。

「妹が世話になった。だけど、もう私には関わらないでくれ。」

そして、じゃあつと手を挙げると、すたすたと行ってしまう。

私も兄の意見に賛成だ。

私に関わると彼に迷惑をかけてしまう。

私には関わらない方が身のためだ。

兄にとってはハーレイや私の事を思つての言葉。

誰かを巻き込みたくないのは私も同じ。

だからせめて貴方を遠くから見守ることくらいは。

「助けてくれてありがとう」

貴方は絶対巻き込ませないから。

言葉こそ出さなかったが、私は強くそう心に誓った。

お礼だけ口に出すと、私も兄に倣って出ていく。

できればヴィオラやアスペなどに別れを告げたかった。  
だが、私は未練がましくて。

それができない。

ただ私は運命に従うだけ。

抗うことなど私にはできない。  
分らない。

やり方が。

怖い。

運命を受け入れることが。

だから一步を踏み出せないでいる。

逃げてばかり。

運命からも

ハーレイからも

ゴロゴロと整備されていない森。

そこを小振りな馬車が行く。

もうすぐ昼時になるのだろうか。森の中と言っても眩しい日の光りが白昼だと主張していた。

「……………」

「……………」

向かい席に座る兄。  
そして私。

車内は沈黙に包まれていた。

あくまで車内は、だ。

外からは従者、ビジィーラの陽気な鼻歌が聞こえて来る。  
だが、音程は合っていないのだ。これでは、とてもじゃないがなんのメロディーかすら分らない。

「……………兄様。」

耐え切れず口を開いたのは私。

「……………なんだ。」

二人とも言葉少なだ。



「……………あれ、……………なんとかして。」

「無理だな。」

私の懇願に間一髪を入れずに返してくる答えは、とても簡潔だった。

「……………」

「……………」

会話終了。

いつもの兄なら会話が滞るということはなかったのだが。

今回はそうもいかなかった。

何が気に食わないのかと聞ければ苦勞はしない。

聞けないからこそ、こういう状況になっているのだ。

もう、誰かこの状況をどうにかしてほしい。

だが、私達の他にいるのはたった一人。

兄の従者、ビジーラだけ。

しかもその彼、自分は全く関係ありませんとばかりに、陽気に鼻歌を歌っているのだからどうしようもない。

それがさらに追い討ちをかけて、沈黙が重い。

本当にどうしようかしら、と考えるが、良い案が浮かぶわけもなく。

おとなしく黙っていることにした。

しばらくして森を抜けた。

この土地は隣国との境すれすれにある。

フケート王子、並びにケイシー王の治める国。

ガイシー国。

鉱山から鉄がよく採れ、それを輸出し、生業やりわいとしている者が大半を占めるといわれている。

もちろん国家もそれらで財政を補っている。

その国の中で、もつとも人里離れた土地との境にあるので、あちらから訪れる人はいない。

そしてこちらも。

月華の森が目晦くましになっており分からない。

それも、何本もある森の道を正しく通らないと辿り着けないのだ。

そして、正しく通り抜けるとベルシアへと着くのだ。

「　　　うわあ！すごい、すごい。」

森を抜けた所から、外の風景を見ていた私は、感嘆して声をあげた。

なぜなら、先程まで森だった風景が野原へと変わったかと思うと、

赤黄白で様々な色の花ばなが咲き乱れていたからだ。

いくら自分が可愛くない性格をしていようが、花を慈しむ心はある。

というか、かなりの花好きだ。

あまりの妹の興奮ぶりに、フィオーラも思わず苦笑を漏らす。

「……………綺麗か？」

「ええ。とっても！」

そちらに心奪われていて、兄が自分から喋ったということにすら気づかなかった。

花ばなは秋だというのに鮮やかに咲き誇っている。  
そのことにとてもおどろく。

それに見たことのない花ばかりなのだ。

後で、良く見て見よう、と降りた時のことを考えるのだった。

それから程なくして馬車は停車した。

止まったのは少し趣おもむきのある家の門の外だった。

否、屋敷と言ってもいいくらいだ。

門は頑なに閉まっている。

兄に引き続き、馬車を降りた私は、門と屋敷を見上げた。

「ここはフィオーラ様とモニカ様の母君、エイシャー様の御実家になります。」

兄の従者、ビジイーラが隣に降りたって説明してくれる。

「へえ。お母様の……。」

そう言えば、あまり母からは昔のことは聞かない。

この土地と何か関係があるのだろうか。

「行くぞ。」

「あつ！待って」

先に行つててしまう兄。

思わず、服の裾を掴んでしまった。

「あ、ごめんなさい。」

別に悪い事をしたわけではないのだが、つい決まりが悪くて咄嗟に謝る。

変に挙動不信になってしまった。

なにやってるんだろう、私。

兄は立派な人だ。

王宮仕えを立派にこなしている。

私も、兄や家族の恥にならぬように最低限の礼儀作法は身に付けてきたつもりだった。

それが例え、滅多と人前に出ることが無かったとしても。

なのに、ふとした瞬間不安になる。

自分の存在があまりにも不確かだということに。

それがばれないように仮面を被って生きてきていた。  
優秀な兄、父なのに釣り合えるように。

弱音など吐いたことはない。  
どんなに辛くても。

なのに。  
なのに。

兄のいつもと違う様子に。  
冷たい態度に  
涙が出そうになる。

俯いて涙を出すまいと、必死に堪えている私の頭に優しい手が置かれた。

「！」

「わるい。少し素っ気ない態度を取りすぎたな。……別にモ  
ニカのことを怒っていたわけではないんだ。考え事をしていたらつ  
いイライラして。悪かった。」

思ってもいなかった事を言われ、思わず顔を上げる。

そこに映った兄の顔は相当参っているように見えた。

「……考え事？」

どういうこと？と問い返す私に、兄は知らない方が幸せなこともある、と言われた。

「？」

意味は分かるのだが、意味が分からない。

「ほら早くこい。伯父様と叔母様に挨拶するぞ。」

今度こそ兄は進む。

けれど今度はさっきとは違う。

私に手を差し出して来たのだった。

兄が従者に開けてもらった門をくぐる。

さっきの様子からすると、兄は叔父と叔母のことをしているのだろう。

いつ会ったんだろう？

少なくとも私は会ったことがない。

どんな人達なんだろう、と考えていると兄が突然止まった。

「？」

兄が無言で見ている方を向くと、そこには少し歳をとった風の老人

がいた。

兄が、嗚呼忘れていた、と呟く。いかにも面倒くさそうに口を開いた。

「……お久しぶりです、ガイバー殿。」

（ガイバー？）

聞いたことのない名前だ。

「フィオーラ様、そのように他人行儀にされて、じいやは悲しゅうございますぞ。」

そう言つて泣きまねをする老人はいかにもツツコミ処が満載だ。

他人が聞けばかわいく映るが、親しくなればうざったいだろう。

「あゝ、はいはい。じいや、急いでるんだ。バイトリー叔父様と、アラグレラ叔母様に挨拶しなくちゃいけないから案内して？」

兄も後者のようで、面倒くさそうだ。

「嗚呼、旦那様と奥方様ですね。かしこまりました……おや？」

ガイバーさんの視線が私で止まった。

（あら、挨拶しなかったのがいけなかったかしら？）

ともかく、ガイバーさんの肩がフルフルと小刻みに震えている。

「？」

「……………モニカ様でございますか!？」

いきなりズイツと詰め寄られ、私はたじろぐ。

「…え、え。そうですが…………？」

「大きくなりましたなあ。じいやは嬉しゅうございますぞ。」

「……………？」

私、この人と合ったことあるかしら、と瞬時に考える。  
だが、それは無回に等しい。

こんなインパクトのある人と一回でも顔を会わせていたならば、嫌でも覚えているだろう。

「……………あの…？」

一人で、感慨深げにしきりに頷いているガイバーさんに声をかける。  
だが、返事など返ってくることはなく。  
隣にいる兄を仰ぎ見た。

すると兄は、またか、と呟いた。

どうやら、良くあることらしい。

「この前お会いした時は、モニカ様はまだ6歳で御小さかったです



なあ。その前はモニカ様が赤ん坊の時に会いました。」

（えっ、そんなに前なの！道理で覚えてないはずだわ。）

それでもキラキラとした、何かを期待しているような目で私を見てくるものだから、思わず謝った。

「ごめんなさい。覚えてなくて……………」

「……………そうでございますか……………」

言っただとたん、あまりにも落ち込むもので、少しばかり申し訳なく思った。

「　　バイトリー叔父様とアラグレラ叔母様に会いにきたんだけど。」

そこに兄が割って入ってきた。

そしてもう一度用件を言う。

「嗚呼、そうでしたね。すみません。あまりにも嬉しかったもので……………」

（嬉しかったって……………）

この先が少し思いやられる私であった。



## 思い出の郷愁（後書き）

サイトの更新している所までなんとか追いつきたいです…

## 記憶の片隅（前書き）

前回の続きです

そして新年初の投稿です

今年も一年よろしく願います。

## 記憶の片隅

やっと着いた客間。

そこでガイバーは「少々お待ち下さい。」と言って出て行った。

ぐるりと室内を見渡した私は、用意されたソファアへと腰を下ろす。

兄はというと。

突っ立ったまま窓の外を見ている。

何かあるのかと思い、私も覗き込んでみるものの、そこにはこれといった物がなかった。

では、どこを見てるのかと言うと、その瞳は遠くを眺めているのだった。

ずっとそんな様子なので少し心配だ。

あくまでも、少し、だ。

心配して損するのは目に見えている。

そして時はそのまま流れ、もうそろそろかな、という頃合いにノックの音が響きわたった。

入ってきたのはダンディーのようなお洒落な老紳士と、少しばかりふくよかな熟女だった。

それを見て人目で分かった。

これが自分の叔父、叔母なのだろうな、と。

なぜなら雰囲気は母と似通っていたからだ。

母が醸し出す雰囲気は、優しく和やかなのだが、どこか毅然として  
いる。

正にそのようなのを二人から感じた。

まず、兄が向き直って挨拶をする。

「バイトリー叔父様、アラグレラ叔母様、お久しぶりです。」

「ああ、久しぶりだ。その様子だと元気そうだな。」

「ええ、本当に久しぶりね。元気で何よりだね。」

二人とも言い方は違っても言っていることは一緒だ。

似た者同士、といったところか。「そうですね。お二人とも変わ  
りないようで何よりです。このたびはお騒がせしてすみませんで  
した。それから、モニカをよろしく願います。」

このたび？

お騒がせ？

何もやってもないし、お騒がせした覚えもない。

（どういうことかしら？）

「あんなの大したことではない。それにモニカのことなら任せろ。」

自分の知らないところで何かあるようだ。

兄に促され、私は二人に挨拶する。

「……初めまして叔父様、叔母様。母、エイシャーの娘、私です。お世話になりますますがよろしくお願いします。」

とりあえず、挨拶を試みるが、ぎこちなくなってしまう。

自分の叔父、叔母、といっても会ったこともないのだ。それもそうだろう。

「まあ、そんな他人行儀なこと言わないで、モニカ。貴女は覚えていないとは思うけれど、小さい頃良く遊びに来てたのよ。だから、初めましてじゃないわ。そこはアラグレラと呼んでくれなきゃ。」

誰を口を挟む間もないまま、叔母が喋り出した。

なかなか親しみやすそうな人のようだ。

「私のこともバイトリーと呼んでくれ。」

次いで口を開いたのは叔父だった。

こちらも気さくな人柄のようだ。

「ええと、」

兄もバイトリー叔父様、アラグレラ叔母様、と呼んでいた。

「それじゃあ、バイトリー叔父様、アラグレラ叔母様。」

「ダメよ。叔母様だなんて付けしないでアラグレラと呼んでちょうだい。」

他人行儀は嫌なの。

と言われてはそうするしか私にはなかった。

ベルシアの地に来てから2日が経つ。

叔父、叔母の屋敷には最低限の使用人しかいないことが分かった。

ガイバーさんはこの屋敷の執事だという事も、後に聞いて驚いた。

私には特にすることが無く、ぼーっとして景色を眺める事が多かった。

もちろん自分に宛がわれた部屋からだ。

母達の居た屋敷でもそうだった。

景色を眺めることが好きだった。

風に揺れる草花が遠くからでも見て取れ、自然と笑みがこぼれる。



秋風で少し冷たいが、支障はない。

そこへ、ノックの音が響いた。

現れたのは兄、フィオーラ。

「どうしたの兄様？」

開け放たれたバルコニーから室内へ戻りながら、私は尋ねる。  
確か兄は、休んでいては溜まる一方の仕事を従者に届けてもらい、  
部屋に立て籠もってやっていたはずだ。

「……ビジィーラの言っていた通りだな。」

ポツリと。

兄はそう漏らした。

「ビジィーラが何か言ったの？」

別に言われるようなことしてないわよ、と呟く。

そう言えば、今朝早くに彼を見た。

馬を駆けて、兄に仕事を持って来ていたような気がする。

「いや、ビジィーラはどうでもいい。モニカ、少し外に出たらどう  
だ？天気もいい。」

「外、に？」

「ああ。ずっと部屋に籠っていると聞いて、な。」

自分だって、ずっと部屋に籠っていた癖に、と思う。  
やはりビジーラから聞いたのだろう。私のことを。

「兄様ほどは籠ってはいないわよ。こうして室内に光りを取り入れているもの。」

「そういうことを言ってるんじゃない。……お前も分かっているだろう？」

いつにも増して困惑した様子の兄。  
私も諦めて腹を括った。

「……そうね、分かってる。心が、魂が唄いたいと訴えてくるもの。ひしひしと、ね。」

「だったら」

「できないわよ。」

口を開いた兄の言葉を遮り、否定を口にする。

その言葉に兄は黙る。

「できないの。」

もう一度。

先程とは小さく漏らす。

兄の顔を仰ぎ見れば、痛みを堪えているかのような表情をしていた。

（嗚呼、兄にこんな顔をさせてしまっなんて……）

「……この土地の意味、忘れてしまったか？」

「？」

「この土地は八神将、クレイムの生まれ故郷。空気は澄み渡り、自然が力を貸してくれるから力を制御することもできる。」

言われた言葉に驚いて兄の瞳を見る。

いつもはふざけた調子の兄が、真剣に語っていた。

確かにベルシアの土地は、神将の故郷だというのは母から聞いた。だが、クレイムの故郷だというのは初耳だ。

「力の制御……」

「そうだ。力を制御してくれる。それに、我慢する必要もないんだ。この地で馴らしていけばいい。父様も母様もそう思いだ。溜まりに溜まった最後、苦しいのは私だ。そうならないように、俺達家族はここを選んだ。私が普通に生活でき、普通の幸せを掴めるように。と。だから、ここで制御することを覚えよう。」

私を思ってくれている家族の存在を感じ、涙が零れた。

「……と、う様…も……？」

私のせいで迷惑を掛けてきた存在だ。

「ああ。あの人は外見からは想像つかない人だからな。けど、私のこと、超が付くほど心配してるんだ。」

本当が嘘か、良くわからないような言葉を吐く。

「うん。ありがとう。」

「だから唄っていいんだ。俺だって私の唄は好きだぞ。」

本当に優しい事を言ってくれる。

それが私を促した。

「なら、少しだけ練習しようかな？」

皆の期待に応えようと思った。

せめて、力が制御できるようになればいいのだ。完璧といわないまでも、多少は。

私の言葉に、兄は明らかに安心してた。詰めていた息を吐き出すかのように、息を吐きだす。

「なら、いつでも外に出かけてきていいぞ。ただし、この辺り周辺にいること。出かける時は誰かに言ってから出かけること。」

これさえ守れば人でもいいと言う。

こんなこと初めてで。私は無性に嬉しかった。

端から見れば、私は世間知らずの分類に入るだろう。

だが毎年一、回、コッソリと屋敷を抜け出して街へ行っていた。

家族の誰かに許可されて、一人で外に出るのは初めてだ。

「分かった。」

私の返答はもちろんYesだ。

こんなに都合のいい機会は滅多とない。

こんな機会逃してなるものか、と私は取るもの取って用意をした。

兄に「行つてきます」と言えば、「遅くなるなよ」と返された。

「もちろん。」

そう言い残して、私は後ろ手にドアを閉めた。

廊かに出ると隣室に入つて、ドレスを勢い良く脱いだ。

私に宛がわれた部屋の隣。ここには持ってきた荷物などを置いてある。

そこには当然衣類もあるわけで。荷物の中からそれらを出した。

そして、その中で一番シンプル且つ軽い者を選んだ。

そしてまた部屋を飛び出す。

走ってははしたないだろう、とは分かっているが、今の私にはそんなことどうでも良かった。

広がる野原。

所々地面から突き出た大きな岩。

気持ちの良さそうな木漏れ日を造っている木々。

そして、名も知らぬ鮮やかな花々。

それらが地平線まで続いているかのような広さ。

風は澄み渡っており、まだ残暑の名残を残した秋風が銀色の髪を揺らす。

私はまず、自然を感じる事から始める。

目を閉じ。

全ての感覚を研ぎ澄ます。

まず耳に入るのは。

鳥の囀り。  
さえず

擦れ合う木の葉の鈴の音。

そして

大地に吹く、神の吐息。

感じたのは

大地の優しい母の臭い。

最後に  
揺れ合う花々の可愛いダンスに。その真上で踊っているのだろう、  
妖精達のヒソヒソ話。

目に見えないもの、それを感じること。

それが大切なのだ。

例えるなら。

風。

それは確かに感じるのだが、目に見えない存在。

すると、私に気がついた妖精達が近づいてきた。

『奏霊弔者<sup>そうれいちようしや</sup>だわ。』

『ほんとだわ』

『久しぶりに見るわね』

『やっぱり、この波動いいわ』

『クレム様の時並ね』

奏霊弔者とは、亡くなった人の魂や自然を弔い、かつ自然の力や精

霊や妖精の力を借りた魔法を自在に扱うことができる。今まで公に奏霊弔者と知れ渡り、呼ばれた者はただ一人。八神将にして最強と謡われた、神の担い手、クレム。

この国、アラインダ国の地位はこうだ。

下にレクイエム、上に国守り、そして、一番上には奏霊弔者。

一般的には国守りが一番上だ。

なぜなら、奏霊弔者は初代のクレム以来存在していないとされているからだ。

レクイエム（鎮魂歌）とは、この国では教会などの聖職者などで、ごくわずかな力ある者が妖精などからそう呼ばれることから始まった。

国守りは、その限られたレクイエムの中から国に選ばれし者のこと。両手で数えきれるほどの者しかない。

そして、全ての生命秩序もを崩しかねないとされるほど、絶大な力を駆使するとされる奏霊弔者。自然に、精霊に、妖精に愛され、力を与えられる。伝説とされる者。レクイエムなど以外の外、国守りなどの力の及ばない存在。

その力は人には隠せても所詮妖精達などにはばれてしまう存在なのか、と私は自嘲してしまう。

小さな、そして薄い羽根を背に付けた妖精。  
愛らしい容姿をし、自然と共にある。



花の精や風の精。

種類はばらばらだが、この世界には美しいものにはほとんど妖精が付いている。

だが人前にはめったと姿を現さない。

その、普通なら見えることのないはずの妖精が近づいてくる。

自分から。

だが、慣れてしまえば別段返すリアクションもない。  
もう見慣れた光景にもなっている。

「あなたたちはここの土地の妖精？」

手を差し出せば指先に一人の妖精が留まった。

「そうよ。貴女が次の奏霊弔者？」

「どうやらそのようね。」

「なら、ずっとこの土地に居るのね。」

無邪気に、とてもかわいらしく問い掛けてくる小さな妖精。

だがその質問は、私には予想もしないものだった。

「え？どうして？」

どうしてずっとここに居ることになるの？

私には初耳だった。

「……なんでって、ねえ。」

指に留まっていた妖精は背後にいた、自分の仲間に同意をもとめるかのように振り返った。

「奏霊弔者は外の世界では生きていくことは難しいんだ。」

その内の一人。

少年の姿をした妖精が答えてくれた。  
が、意味が分からない。

生きていくことが難しい？  
どういうこと？

「意味が分からない、って顔ね。」

私の表情を読み取ったのだろう。  
再び指先に留まっていた妖精が言う。

私は肯定のため、コクリと頷いた。

「人間に見つかれば、奏霊弔者の力はものとして利用され、王宮に閉じ込められ、世間から隔離される。……このことは知っているわよね？」

確かに母達から口をすっぱくして、幾度となく言い聞かされた。

だから私は余り、世間に公にされることなく育った。  
私もそれにはたいして疑問を抱いたことはなかった。

（だって、それは私を思ってたのこと）

けれど、時おり感じる反発心からか抜け出すことはあった。

が、これはこのさい許してもらおうことにしよう。

妖精の問い掛けに頷き返せば、それを確認した彼女は再び説明を始めた。

「幾度となく奏霊弔者は秘密裏に王宮に隔離されていたの。けど、彼女らは初代クレム様ほど力もなく、奏霊弔者とはとても言えないほどの力ぐらいしかなかったの。これで、民には公にしくとも貴族たちの支持は得ろうとしたの。」

「……………偽の奏霊弔者……………」

たしか、奏霊弔者の力を持った者は初代のクレムを筆頭とし、人は異なる者からそう呼ばれたのはわずから人ほどのはず。

「そうよ。彼女らは良くて国守り、悪くてレクイエムほどの力しか持っていない者達だった。中では国王の妃になりたいがため、金を積んで自分の娘を嫁がす貴族もいたわ。中でも力などないのに、偽って王宮に入った者もいたの。」

「えっ！？それって、王を騙していたってこと？」

王を騙すことは重罪だ。

「そうとも言えるけど、そうとも言えないのよ。」

何かの謎掛けみたいだ、と思った。

「国王は知っていて、知らぬ振りをしたの。……王座がそんなに大切なのかしら？」

その妖精はボソリと漏らした。  
きつとそれは本音。

私は政治、権力、財、どれにも興味もないし、執着もない。そんな私には、とても悲しそうに呟く妖精に掛ける言葉が見つからなかった。

## 記憶の片隅（後書き）

少しずつ主な登場人物が揃ってきました。

グレファ―は根は素直でいい子、のはず

## 精霊達の真実（前書き）

少しは本題にかすってくれたかな……？

## 精霊達の真実

「王は権力を求めるがために、見て見ぬふりをしていたわ。自分から望んでなったものもいたけれど、残り半分くらいは無理矢理入れられた、という方が正しいの。」

私は驚きを隠しきれなかった。自分の住んでいる国がそんなもので成り立っているのかと思うと嫌だった。

「王宮は強力な結界が張られていて、人外の者が入ると悪影響を及ぼすの。ひとたび貴女がの奏霊弔者であるとばれたなら王宮に入ることは免れない。私達にとっても奏霊弔者にとっても両者は生きる糧かてとも等しい存在。そして貴女も例外ではないわ。」

彼女が言うには、このことで世界の秩序は守られるらしい。

妖精達の心遣いは嬉しい。

だが、私は思う。

守りたい訳ではないのだ。

それに

「私が奏霊弔者だということは変えようのない事実だわ。前に進まなければ何も変わらない。進むことでの失敗なんて仕方ないことだ。」

今大切なのは

「志を強く持つこと。今の私にできることはそれだけよ。見つかることを恐れてばかりじゃ何もできないわ。だから私はここには残らない。」

私の一言で妖精は驚いた顔をした。

「……………忘れていたわ。私達は奏霊弔者を保護する事しか頭になかったわ。……………ほんと、クレア様に似てるわね。」

「似ている？私とクレア・バズ・デーランが……………？」

クレア・バズ・デーランとは、神の担い手クレアと言われた彼女のあまり知られていない旧姓だ。

「ええ、似ているわ。……………仕方ない。私達は貴女の意志を尊重するわ。」

（あれ？……………妖精は一人で決定や決断をしないはず。決断するのは……………）

そこに一陣の風が吹いた。

ふわり、と

懐かしい匂いがした。

と、ともに別方向から人の気配がした。

（こんな所に人？）

ここに来てから祖父や兄達以外の人を見かけることはなかった。



少し離れた所に村があるらしいが、こちらにはあまり来る事がないとも聞く。

誰だろう、と思って振り返る。

「…あなたは……………」

そこに立っていたのは。

「やっと見つけた。」

「ハーレイ。どうして、ここに……………」

数日前に会ったばかりの彼がいた。

あんな別れ方して顔を合わせづらい。

もう会うことはない、と思っていたのに…。

私に関わると私にとっても、彼にとっても良くない。

どうしたものか、と彼を見る。だが、何か足りない。

「あれ？ヴィオラは？」

そう、いつも一緒にいる感じの彼女の姿が見当たらない。

「ああ、あいつは」

「人間。どうしてここに来た。」

何かを言いかけたハーレイ。

それを遮った迫力ある声。

女性の声なのだが、明かに威嚇を表した声だ。

えっ？、と振り返る。

と、そこに立っていたのは

「あなた、さっきの妖精！？」

だが、先ほどまでの小さい妖精の姿ではなかった。

顔立ちは同じなのだが、明らかに今の方が大人びて見える。

そして周りには始めから一緒になって群がっていた他の妖精達が彼女を守るようにして飛んでいた。

「ええ、そうよ。」

そう答えた彼女から漂ってくる仄かな香。

それがどこか懐かしかった。

「モニカ、あれは？」

ハーレイが指しているあれとは妖精だった彼女のことだろう。

彼女の周りの妖精は、ハーレイが表れた時点で彼には見えないように姿を隠していた。

当然、奏霊甲者である私には見えるのだが……。

だからといって私にその質問が答えられるわけもない。  
なぜなら、彼女は今し方まで妖精だったのだ。  
だが、今は妖精ではない。

この姿は

「人間風情が私の事を指差すな。私は誇り高き精霊よ。」

「  
精霊……」

まさか、精霊が姿を偽って、妖精の姿になっているなんて思いもしなかった。

「お前、ここから私を連れて行くつもり？」

あれ？と思った。

（私、彼女達に名前を教えてないはずなのに……。）

「……ならどうする。」

なぜかハーレイは精霊を挑発するような言葉を言う。

「ここからは出て行かぬつもりか。」

その問いに彼は頷き返す。

「ならば消えろ。」

瞬時に気温が下がった。

私は瞬時にヤバイと思った。

私には強力な結界を張ることができる。

だが、精霊の魔法壁が私の周りに張り巡らされており手を出せない。

「　　……逃げてっ！」

精霊から目を外し、ハーレイの方を見る。

彼も身の危険を感じたのだろう。身を強張らせていた。

ああ、だめだ。

彼は精霊の魔力に充てられている。

逃げられない。

精霊から放たれた力の塊はハーレイに向かって一直線に向かっていく。

目の前に起こるであろう惨事を予測し、私は反射的に目を閉じてしまった。

だが、想像していた音はしない。

代わりに、何かが弾けて跳ね返す音がした。

「え？」

目を開けば、そこに映った物を見て思わず素っ頓狂な声がでた。

致命的な一撃を受けていると予測していた彼には、なんの外傷もな

く。

ただそこに立っていた。

いや、突っ立っていた、という方が正しい。

おそらく、彼も訳が分からないのだろう。

戸惑った顔をしていた。

「何故私の攻撃が効かないの。私の攻撃は同一の力を持つ者、もしくはそれ以上の者でなければ防げないはずなのに！」

精霊が言った言葉にハツとした。

そういえば。

ハーレイとの別れ際、彼に守りの魔法を掛けた。

あれのおかげだったのだろうか？

だが、あれは国守り一人のモノよりは強いが、簡単なモノだ。

そんなモノで精霊の力を防げるとは、私も思っていない。

何故

という疑問が残るが、私は精霊の魔法壁が緩んだ隙にハーレイに駆け寄る。

「ハーレイ」

そう呼べばすぐさま彼はこちらを振り返った。

「モニカ……」

何とも言えない戸惑った表情だった。

いつも優しいが、毅然とした表情をしていた彼からはとても想像できなかったので瞠目した。

「ねえ、どうしてこの人を傷つけるの。さっき、私の意見を尊重すると言ったじゃない。」

元は妖精の姿をしていた精霊。  
彼女に向かって言った。

初めて言っていたことが違う。

「そいつは王家の血を引いている。あの虫酸が走る、血をね。」

すると、思ってもいなかった言葉を聞いた。

位は高い高いとは思っていたが、そこまでとは思ひもしなかったのだ。

それに、よっぽど不快なのだろうか、精霊は顔を歪めて吐き捨てるように言い放った。

「ハーレイが王族……」

それも、直系に近いのだろう。

私の呟いた言葉に反応するかのように、彼の肩はぴくりと揺れた気がした。

「でも、だからと言って彼を攻撃しないで。王族かどうかなんて関

係ないわ。ハーレイは私の命の恩人よ。  
」

## 精霊達の真実（後書き）

微妙に本題にかすりました（苦笑）



s a i dハーレイ（前書き）

s a i dハーレイ

視点が変わります。

といつても1ページですが…

s a i d ハーレイ

訳が分からない俺の所に駆け寄ってくる少女、モニカ。

彼女を改めて見た瞬間、安心すると共に体が強張るのがわかった。

それは、彼女を見た瞬間フィオーラの顔を思い出したからだ。

別れ際言われた言葉が脳裏に横切る。

だが、自分はそれを覚悟でここまで来た。

しかしその場に、神々しいまでの精霊の一言に全身が凍る。

その言葉からは自分は逃げられないのだと、知っているからこそ動けなくなる。

自分の逃げられない宿命、とも言えるべきもの。

こんなもの望んでいない、と幾度となく思った。

だが、思うだけではなにも変わらない。

変えるために動くんだと知ったから、自分はここにいる。

自分の胸が疼くような感覚や気持ちの名前をまだ見つけられていないが、分かった時に何かが変わるような気がするから……。

だから、自分は立ち止まらない。

俺の前に立ち、華奢な身体で俺を守ろうとする彼女に、ふと笑みがこぼれた。

自分と少し似ている。  
そう思った。

逃れられない運命に嘆く姿も、まるで昔の自分のようだった。

s a i dハーレイ（後書き）

s a i dハーレイ e n d

この人の性格は作者にもあまりわかりません

人の手、精霊の手（前書き）

視点戻ります

## 人の手、精霊の手

自分の言葉には嘘偽りはない。

確かに、王族に私の力のことがばれたら私に未来はない、とも言えるだろう。

だがそれ以上に、彼なら大丈夫だと、本能とも言える直感的なモノが伝えてくるのだ。

それは、私の恋心からくる臆惧かもしれないが、私はそれでもいいと思った。

「な、に・・・命の恩人」

「そうよ、それでも貴女が彼を攻撃すると言っただけならば、私は貴女を許さないわ。」

その言葉は、奏霊弔者を守ると言った精霊ではなく、人間の手を取るという意思表示。

それが、どういうことを指しているかは分かっているつもりだ。

「っ……！」

そして、私の言葉に、意志に怯んだ精霊。  
明かに動揺、と見て取れる。

私は、ただ言葉もなく彼女を見つめる。

と、まず先に身じろぎしたのは精霊。  
そして言葉を紡ぐ。

「……それほどに貴女の意志は固い、ということなのね」

それは質問でも疑問でもなく、確認。

私の一言で全てが変わるような気がした。  
だが初めから私の答えは決まっている。

「ええ、変わらないわ。」

精霊の金色の瞳を揺らぎ無く見つめ返せば、今度はそれに答えるか  
のように見つめ返された。

底光りするその金色の光りは先程と違い、どこか優しさを感じさせ  
た。

「……いいでしょう。貴女の好きにきなさい。」

どこか突き放すような言い方。

だが、口調こそそうなのだが、やはり目だけは優しかった。

彼女の言葉は絶対だ。

彼女の周りに群がるようにして居た妖精達は、自身から身を引くように一歩後ろに後退した。



嫌いなものは…

あれから騒ぎを聞き付けた兄がやって来た。

そして、私の傍らに立っていた人物を見て足を止めた。

ハーレイと兄の視線が睨み合っているように見えたのは気のせいではなかっただろう。

屋敷に戻った私は、2階の部屋にいるように、と言われのけ者にされてしまった。

（兄様のバカ！）

2階へと続く階段を登ながら、思わずため息が零れた。

今頃、応接間ではあの二人が話しているはずだ。

私は最後まで、残ると言い張ったのだが兄の睨みを効かせた一声で

このさまだ。

（はあ…、情けない。）

二人の会話に自分が関わっているのは二人の態度を見れば、火を見るよりも明らかなのに。

それに、聞かせたくないことでもあるのだろうか。

ハーレイにまでフィオーラと二人だけで話させてくれ、と頼まれた。

けど、一番バカなのは私だ。

兄を説得することも、ハーレイと向き合うこともできない意気地無し。

こんな自分嫌だなあ、と呟きながら今入って来た部屋の窓を開け放った。

ふと何かが聞こえる。

何を言っているのかは分からないが、風によって人の話し声がしたのだ。

何だろう？

窓から身を乗り出し、下を見れば開け放たれた窓が見えた。

そして気がついた。

ここは応接間の真上に位置するのだと。

（ここから話を聞けないかしら）

そう思い先程よりも大胆に身を乗り出す。

中の様子が気になったのだ。

「 危ないでしょう、モニカ。何してるの。 」

突然背後から声が聞こえた。

諭すような、どこことなく呆れたような声。

「 えっ……わあ、きゃあ！ 」

当然私はびっくりしてバランスを崩しそうになったが、窓枠を掴んでいたのなんとかバランスを崩すことなく踏み止まった。

我ながら情けない声だと思う。

なんとか落ち着きを取り戻した私は、落ちそうになった原因である  
う背後の人物を突き止めるため振り向いた。

そこにいたのは

「あなた、さっきの…精霊。」

精霊と言うことにためらったのは、また妖精の姿をしていたからだ。

それよりも思いもしなかった人物だった。

「その精霊という呼び名、やめてちょうだい。あたしの名前はグレ  
ファーよ。」

姿も変われば言葉遣いまで変わるようだ。

「グレファー…?」

その響は、どこことなく不思議で、懐かしく感じさせた。

それに、そう呼ばれたグレファアはどことなく嬉しそうだ。

「けど、グレファアって言いにくいわね。レファアでどう？」

妖精の姿をしている時のグレファアは少しやんちゃな女の子のよう  
だ。

精霊の時にはあんなにも威厳があるのに不思議なものだ。

「いいわよ、モニカがそうしたいのなね。」

「……ねえ、」

「なに？」

「どうして私達こんなことしてるの？」

私は思わず疑問を口にする。

そう、今私達がしていることはなんとも滑稽だといえるだろう。

私は床に膝を付け、床に耳を押し当てているという姿。

これで話しを盗み聞きしようというわけだ。

それにしてもなんとも古典的な方法だ。

しかもそれを勧めたのはレファーマーなのだ。

その本人はと言うと、

全く同じ格好で床に耳を押し当てている。

全く同じ格好で床に耳を押し当てている。

（私が言うのもなんだけど、精霊がそんな格好をするのはどうなのよ……）

まあ、自分もレファーマーに言われるがまま、同じことをしているのだから声には出さない。

だがんな古典的な方法でも聞こえるものは聞こえるのだ。  
格好だけがはしたないだけで……

（こんな姿誰にも見せられないわ……）

「どうかしたの？」

不思議そうな表情をしてこちらを向いたレファアーに、何でもないと言葉を振り、再び床に耳を押し当てる。

「で、話ってなんだ。」

私が去ってから沈黙し続けていた部屋。

はじめに沈黙を破ったのはフィオーラだった。

「仮にも主にそんな口の聞き方していいの？」

「……残念ながら俺は私公混合し質<sup>たち</sup>なんですね。それより、疑問を

疑問で返すなよ。」

今までにないくらいぴりぴりした雰囲気をもとい、言葉を発する彼に仕方なく、ため息をついた。

でもまあ、仕方ない。

自分が無理矢理おしかけたからだ。

「……まずお前に謝らないといけない、すまなかった。月華の森でお前達を襲ったのは元老院の奴らの精鋭隊だった。」

元老院とは官位・年齢が高く、人望のある功臣のことだが、今の王宮に仕えている元老は欲望と野望で荒んでいる。

ある意味自分のためだけにしか動かない。

能力は優秀だというのに嘆かわしい限りだ。

「……予想はしていたが、まさか本当に元老院だったとはな。」

やはり。

頭のまわる彼のことだ、想像はしていたのだろう。



「だから、すまない。家臣の監理ができていないのは俺のせいでもある。」

そこで頭を下げる。

端から見ればなんとも珍奇な光景なのだろう。

普段からあまりたじろぐことはないフィオーラなのだが、さすがにそういう訳にはいかなかったようだ。

自分の主ともあろう人が頭を下げて許しをこうてくるのだから。

戸惑った瞳と真意な瞳とが交差した。

実はと言うと、フィオーラはここまでされるとは思っていなかった。ハーレイにも元老院にも。

自分が長年仕えてきた主なのでその性格は知っているつもりだった。

ぶっきらぼうだが優しく、自分偽り、面を取り繕う。優しくそんな笑顔をする割には腹黒で、内心何を考えているのか分からないという厄介な性格。

はつきり言って性格は知っているが心の内は知らない、といったところだ。

まだ小さい頃は素直だったように記憶している。  
自分と彼は幼なじみなのだ。

「頭を上げて下さい。主が部下に頭下げてどうするんですか。」

言葉遣いを正し、ハーレイに頭を上げると。

確かに自分は怒っていた。

だがそれはほぼ八つ当たりだったのだ。

そう、自分へのふがいなさ。それを身に染みて感じたのだ、今回の奇襲を通して。

モニカを関わらせないようにするために馬に寄せ、あの時逃がした。  
だが逆にそれしか方法が無かったのだ。

確かに彼女は強い。

剣の腕も、精神も。

あのままモニカがいても追跡者からは逃れられた。

しかしそれではいけなかったのだ。

追跡をしてきた者の中には国守りもいた。

国守りは独特な雰囲気をしている。なので彼等は自分達の同胞を見分ける術を持っている。

モニカはまだ完全には覚醒しきっていない。  
なのでそんな術は使えない。

だがフィオーラは違った。

なんでもそつなくこなせせ、その実力も人並み以上だ。

それに妹のモニカと日々過ごしていれば能力者の見分けがつくぬうにっていた。

これも、フィオーラが天才と言われるゆえなのだろう。

そして追跡者の中に国守りがいると悟ったゆえにモニカを一人で逃がした。

あのままいればモニカは確実に王宮へと連行されていただろう。

「いや、謝ることはありませんよ。向こうはモニカのことに感づいていましたから、仕方なかったんです。」

「な、に！」

「追跡者の中には国守りもいましたから。」

「そんなこと……ありえない。」

それを聞いたとたんハーレイは頭を振りながら言った。

ハーレイが信じられないのも無理ないだろう。

国守りは一度王宮ひとたびに入れば二度と出ることは叶わない。  
そんな存在だ。

「だが私には馴れた気配だったので間違いありませんよ。モニカにはまったく及びませんがね。」

「おまつ！気配で分かるのか。」

明らかに驚いた声音のハーレイ。  
無理ないだろう。普通ならば分かるはずのない気配だ。

「一応は、ね。それでも伊達に兄妹として育ってきていませんからね。」

そんなフィオーラの言葉に、ハーレイは飽きるばかりだ。

「それにしても……どこから情報が漏れたんだか……。」

「俺もそれが気になるんですよ。ばれているならしかたないですけど、どこから漏れたかが気になるんです。今後もしこのようなことがあつては困りますからね。」

フィオーラはいっそ清々しいほどに開き直り、情報の漏れ所が気になるようだ。

「なら俺も動ける限りのことはしよう。」

口にした言葉に嘘偽りはない。  
だが、

「俺でさえフィオーラに妹が居たことを知らなかった。なのにどうして元老院がこんなにも早く情報を掴めるのか。」

「そうですね。俺でさえ陛下にはれないようにしていたぐらいになに……」

「……………」

沈黙の後、ハーレイとフィオーラがため息をつく。

「どうやらお前の従者は好奇心旺盛なようだな。」

客間の扉を見つめながら呟いた言葉。  
それは相手にも聞こえていたようだ。

緩く開いていたドアからビジーラはひょっこりと現れた。

自身の従者なのだが、その軽率な行動に呆れて物も言えないフィオ  
ーラ。

「いやあ、フィオーラ様すみません。報告しにきたんです。そした  
ら殿下と話なんかしているじゃありませんか。入る機会を逃してし  
まいましてね、つい」

「出来心で盗み聞きをしたと。」

己の従者の言葉を途中で遮り静にその先を紡ぐ。

ハーレイはフィオーラが無言で怒っているのを感じていた。

まあ、普通はそれが当たり前だ。

彼等二人が話していたのは国の機密にも入るようなことだ。

「いえ、盗み聞きなら同罪者がいますよ。ホラ？」

そう言つて彼が指した先。

そこにはモニカがいるであろう2階の部屋。

私は真つ先に、兄の従者であるビジューラに睨みを効かせた。

だが彼はそんな私の視線を痛くも痒くもありません、とばかりに素知らぬふりして口笛をふいた。

そんな様子に腹立った。

けれど今はそんなやつに構っている余裕はない。

だつて……

「モニカ、盗み聞きつていうのはコイツのようなどうしようもないヤツがするんだ。可愛い妹がそんなことを覚えてお兄ちゃんはいそいそ。」

うん。

前半はよしとしよう。

だが後半はいただけない。

「でもそんなことを言いながら、フィオーラはモニカが盗み聞きしていたことしてたよ。」

横からそう助言をくれたのはハーレイだった。

その言葉に私は「えっ！」と驚いた。

「勝手に、何暴露してくれるんですか。せつかく俺がお兄ちゃんツラしようとしてたのに。」

そうなると私はまんまと兄の手の平で踊らされていたことになる。

「何がお兄ちゃんツラよ。サイテー。」

その一言で大ダメージ。

フィオーラは床に撃沈した。



でもフィオーラが私のことに気づいていたと言ったハーレイ。なら彼も知っていたということになる。

（どっちもどっちね。）

内心呆れながらため息を吐く。

「それにしてもモニカがそんな大胆？なことをするなんて思わなかった。」

そう

私にしては珍しい行動だ。

屋敷にいる時ならばそんなことはしなかった、……はずだ。

そもそもその発端となったレファアは隠れてしまった。

彼等が来る前に。

今彼女が居る場所は私の髪の毛中。

中と言っても首の根元辺りだ。

しかし、なかなかこそばい。

どうしても身じろぎして首を動かしてしまっ。

途中、いつそのことばらしてしまおうか、と幾度となく考えた。

私の意志を無視してハーレイを傷つけようとした事。

このことだけでも憎む理由になりかねない。

だが何故だか憎めない性格を彼女はしている。

「だって知りたかったんだもの。それにしても……………」

じつとハーレイを見つめ帰せば彼は少したじろいだ。

「……………貴方、王太子殿下だったのね。」

しみじみとそう呟けば彼はどことなく寂しそうだった。

（これで辻褄が合うわ。）

月華の森で助けられたと聞いた時。

連れて行かれた先、そこが隠された土地ベルシアからそれほど離れていない場所に位置した屋敷だと知った時。

兄の事を知っていると言われた時。

兄が敬語を使った時。

私はこの答えを頭のどこかで知っていたのかもしれない。

月華の森になど、人は数えるほどしか踏み入らない。  
そんな中に彼がいたのだ。  
普通ならありえない。

「兄様も人が悪いわ。なんで教えてくれなかったの。」  
と問えば関わらせなくなかった、となんと簡潔な答えが返ってきた。

（関わらせなくなかった、って。自分の主に？）

いつもより真剣な表情。

そんな表情をされると何だか不安になる。

ふとビジーラの方を向けば、彼は何の反応もしていなかった。

（あいつ……全部知ってたわね！）

何だか自分だけが仲間外れにされたようで、何だか悔しい。

確かにビジーラは兄様の従者だ。だからって私だけ知らされていなかったただなんて……。

……兄妹なのに。

そんなに私は頼りないだろうか。

「まあとにかく、モニカはどこまで話を聞いた？」

「えっ？えっと……、王太子殿下でさえ情報を掴むのに苦労したのに、元老院が私の事を知った上で動いていたところ、かしら？」

そう言いながらも私も考える。

情報通である王太子殿下。

それには劣るがなかなかの実力を持ち合っている元老院。彼等が同時期に私の情報を得た。

誰かが流していると思えない。

もちろん屋敷にいる家人だという方法もあるのだろう……一般は。

だが私はそんなことを全く疑っていない。

私の屋敷で働く彼等はもちろん、家族との絆は生半可なものではない。

それだけは言い切れる。

私の家。

フロランス家の使用人は一時期から全く入れ代わりをすることはなかった。

それからは信頼できる者しかいない、と言っても過言ではない。

考えながらもハーレイの方を向けば、何となく何か言いたげだった。

どうかした？と聞こうとすれば兄の言葉に先を越された。

言葉を発するために開かれた唇は何をするでもなくまた閉じた。

だが自分の瞳が何とも言えない悲しい顔をしていることに気づきはしなかった。

「問題は誰が情報を漏らしたということじゃなく、何が漏れたかということだ。」

しかし兄の一言。

「何が……」

そこまで呟いてハッとした。

兄の言いたいことが分かったのだ。

「……私の力。」

「そうだ。それがどこまで相手が知っているかをこちらも把握する必要がある。」

（けどこの様子じゃ　　）

ハーレイも同じ事を思ったのか口を挟む。

「君達二人を追うのに国守りを使ってきたぐらいだ。あいつらも国

の要に近い存在を動かすとはどういう存在を相手にしているかは分かっているようだね。」

どういう存在

その言葉にビクリと肩が揺れた。

それは奏霊弔者のことを指しているのだろう。

「だから俺は屋敷には帰らない方がいいと思う。」

それは私に向けられた兄の言葉。

「屋敷に……帰らない……。」

まさかそんなことを言われるなんて思いもしなかった。

「フィオーラ、それでは」

「わかつている。」

何かを言おうとしたハーレイをフィオーラは遮った。

「わかっていないだろう！お前は妹に、家族と離れて暮らせと言っているも同然の事を言っているんだぞ。」

「……これしか方法はないんだ。」

苦し紛れにそう呟かれた言葉。

そこから私は兄の覚悟を汲み取った。

「探してもしないで決め付けるのか。これしか道はない、と。その上モニカの幸せまでもを決め付ける。その方法が正しいと何故言い切れる。」

普段の柔和な雰囲気など何処へやら。

触れたら切れそうな、鋭く鋭利な刃物を思わせられた。

「ちょっと待って、殿下！殿下の言った通り、自分のことなら自分で決めるわ。それが私の力のことなら尚更なおさらね。」

「……モニカ。」

普段私にベッタリな兄の困惑しきった表情。そんな表情をさせてい

るのは他でもない私だ。

「なら、どうしたい？」

言つのをためらっている私を優しく促したのはハーレイ。

「私は……私は王宮に行くわ。」

これは私が悩んだ結果だ。

「待て、何でそうなる！」

兄の焦った声がした。

次いで隣を見れば、驚愕した顔をして私を見るハーレイ。

こちらは驚きすぎて声も出ないようだ。

「モニカがああの偏屈ジジイの巣窟魔に行くなんて……。」

そう言っつてヨロつと倒れる‘振り’をする兄。

それを受け止める‘振り’をしたのは、何とも嘘くさい声を出した  
ビジーラだった。

「ああ、フィオーラ様お可哀相に。こんなにも心配なさっている兄  
君を、放って行かれるのですか。」



今まで黙っておいて、傍観者を決めこんでいたのに今さらだ。

（うわぁ。なんて嘘くさいの。）

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、ハーレイが制止の声をあげた。

「止めてくれるかい？ ビジーラ。…空気が悪くなる。」

躊躇った彼が口にした言葉。ある意味凄いことを言った。

「それにしても、自分から王宮に行くなんて正気かい？」

これは純粋な疑問なのだろう。

「正気に決まってるわよ。けどね、ノコノコ元老院に付いて行くってわけではないのよ。相手に気づかれないように王宮に入るの。」

いくら元老院といえど、世間知らずの小娘が自分から敵地に乗り込んで来るとは思ってもいないだろう。いや、世間知らずだからこそか。

いくら目を外に光らせていようと、外にダーゲットがいなければ

意味のないことだ。

まさか自ら敵地へ乗り込んでくるなんて思いもしてないはずだ。なので必然的に王宮‘内’は手薄になる。

これが私の狙いだ。

（何より、このままここに居たら迷惑がかかってしまう。）

「俺は反対だ！」

ようやくショックから立ち直ったのか、フィオーラが喚きだす。

「べつに兄様に反対されようが、私は行くわ。」

元から、反対されるのは予測の内だ。

そのままツンとソップを向けばビジィーラが目に入った。そして思いっきり顔をしかめる。

（コイツ、気に食わないわ。）

気まぐれで首を突っ込んで、ひっくり回す。

しかも自分の利益、不利益は全く関係なく。

腹に何かを据えているようで、全くその真意をあらわにしない。

そして

助けるふりをして、本当は助けようなんてしていない。

だから嫌いだ。

「行くって言ってもどうやって潜入するんだい？」

「私は使用人として入ろうと思っていんだけど、どう？」

「どう？と聞かれても……」

輝いた目をした私に話を振られたハーレイはとても困っている。

「だって貴方、王子様じゃない？」

それを言われた彼は困っている。

何をそんなに渋る必要があるのか、私には分かりかねない。確かに兄、フィオーラが渋るのは分かるが。

「俺を置いて話を進めるな。」

そこでふて腐れたフィオーラの呟き。

一瞬にして空気が軽くなった。

嫌いなものは…（後書き）

モニカはビジューラが嫌いなご様子。けど、嫌いとは少しちがいます。

今回でやっとサイトと同じ所まで追いつきました。  
今度からは同時進行できればな、と思っております。

## 触れ合い（前書き）

サブキャラ数人登場  
です。

## 触れ合い

あれから10日経ち。  
一ヶ月がたった。

今私は王宮の一角にある室内で支度をしていた。

一般人には少し豪華で、金持ちには少し物足りない、そんな部屋だ。

（別にこんなに綺麗な部屋を使わなくてもよかったのに）

思い出ただけでもため息が出る。

自分の兄の強引さには。

そう。

私は王宮に行く宣言をした後、すぐにベルシアを起った。

しかし王宮されど王宮。

入り込むには身分証明がいるし、使用人となりたければそれなりの身分もいる。

それを、兄はツテで私を王宮に招き入れてしまったのだ。  
まったく、これじゃあ頭を抱えてしまう。

ため息をまた一つ。

なんだか近頃頭を悩ませることが多い。

どれもこれも兄様のせいだわ、と責任転嫁をしつつも身支度を終えた私は余裕を持って部屋を出た。

私の王宮内での仕事は侍女だ。

侍女とは自分の働く場所が自分の位のようなものだ。

例えば厨房と洗濯。

どちらの仕事が上かという厨房での仕事の方が上だ。

もちろん厨房には専用のコックがいる。だがそこに立ち入ることができるのはコックとその料理人、そしてそれ専用の侍女だ。

料理とは宿舎泊りの兵士から貴族、王族が口に入るも。だからこそ信用されている者にしか携わることができないということなのだ。掃除にもいろいろある。

公共の場では下の位、すなわち下の侍女が使われ、貴族の屯す場には中の侍女。

そしてその上にあるのが上の侍女。だがそれはごくわずか限られた者にしかなれない。なぜなら王族付きの侍女ということになるのだから。

私は中の侍女。だがこれにはまだ細かく分割された身分があるのだ。それは正侍女と民家侍女。

正確に言えばこれを出す者にはまだ細かく分割された身分があるのだ。これを口に出す者は、分別が付かない馬鹿共だと私は思っている。正侍女とは家柄が良いか、貴族でないと成れないのだ。それと比べ民家侍女とは、その名の通り一般の者になる侍女のことだ。よっぽどの賄賂や大層な功績を残さない限り、正侍女になることは難しい。

（生まれで、自分の将来が決まってたまるかつてのよ。

……あゝ嫌なこと考えた。」

とそこで廊下の向こう側からやって来る人影が見えた。

「あゝっ！モニカさん、今から仕事ですか？」

そう気さくに声を掛けてきてくれたのは第3王子付きの侍女マルーシャだった。

「え、ええ、そうです。マルーシャさんも一仕事終えて、移動中ですか？」

もしよければお手伝いします、そう言ったのだが、大丈夫よ、とやんわり断られた。

彼女は一応、上の侍女になるのだが、出が一般家庭なので正侍女にはなれず民家侍女のままなのだ。

だが上の侍女のなかでは親しみやすく、気さくに話しかけてくれる。

私は中の侍女なのだが正侍女なので後輩、先輩、同僚共に特別視されていた。

なので彼女のような態度はとても嬉しかったのだ。

「そうですか。また何かあれば何でも言ってくださいね。そう言えば、……王子は、いえ、王子様は寝起きが大変だとお聞きしますが大丈夫ですか？」

このことは王宮に遣えるようになり、初めて聞いた話だ。

「始めは大変だったのだけどね、段々慣れてきてしまったようだわ。



「そう言い、苦笑するマルーシャさんはどことなく懐かしそうだ。彼女もいろいろ苦労していたのだろう。」

その後、彼女は次の仕事があるから、と洗濯物を持ち慌てて駆けて行った。

（私も次の仕事しなきゃね。）

「うわあ！」

そう思い振り替えたたん、声と共に衝撃があつた。

なんとか持ちこたえ転倒しなかったものの、瞬時に何があつたのかはわからなかった。

衝撃に反射的に閉じていた目を開ける。

だが私の目の前には、これといった物が無かった。

それに驚き目を見開くが、目線の下に何かうずくまっていた。

「……えっ？」

その何かは小さな男の子だということはすぐにわかった。

「……っ！！」

「ごめんなさい。大丈夫……ではなさそうね。」

ちょっと待ってね、そう言い手に持っていた物を通路の脇に除けた。

「なにをするんだ！」

「あら、開口一番にそれはだめよ。そんなんじゃ女の子に嫌われち

やうわ。」

「何でお前にそんな心配されなきゃならない。」

（確かにその通りなんだけど）

「いいの？逃げなくて？」

こちらに向かってくる気配が複数あることに気付いた私は、彼にそう言った。

途端に彼の顔はポカンとなる。

それもそうだろう。

突然ぶつかった相手に、いきなり女の子に嫌われるどころ言われた挙げ句。自分が何かから逃げていることを示唆されたのだから。

「ほら、早くしないと追いつかれちゃうわよ。はい、立って。ここに入ってるといいわ。オネーサンがなんとかしてあげるから。」

そう言って私が指したのは、使われてない一つの部屋だった。

「すみません。」

「はい。何でしょう？」

私に声を掛けてきたのはやけに容姿の整った男性2人だった。

一人は紫紺色の長髪を後で一つに括られており、黒色の瞳をしていた。中性的な顔立ちの男性だろうか。着ている服は文官のような出で立ちだ。

そしてもう一人は、赤髪に緑の瞳だ。緑の瞳をしているせいか、少し親近感が湧いた。

服装はTシャツにパンツという、動きやすさを重視したものだったが、むさ苦しくは無くむしろ気品を感じさせられた。

服の上からでも分かる程よい筋肉は、ここに他の侍女がいたら黄色い悲鳴が飛んだであろうと思われる。

「こちらに、このくらいの小さな男の子は来ませんでしたか？」

ご丁寧に、身丈までもを手で示してくれる。

そんな文官の男性に申し訳ないと思うと同時に、内心舌を出した。

「男の子、ですか？侍女のわたくしにはあまり縁の無いお話ですね。」

ですが、先程見かけましたわ。その先の廊下を右に曲がり、駆けて行きましたけど。

何やら切羽詰まっていた様子でしたので、少し御容赦して差し上げてくださいな。」

勿論これは出鱈目だ。

「丁寧にありがとう。工作中引き止めてすまないね。だが助かったよ。」

よかったら、名前をお教えてくれない？」

こちらは赤髪の男性の方だ。そんな格好をしているので、騎士だとは思う。

が、荒っぽさを感じさせない身のこなしと言葉遣いをみれば女タラシだと分かる。

「いいえ。」

どうってことありませんわ。困った時はお互い様ですもの。ですが私は一介の侍女ですので御容赦を。」

名前を聞かれては後先後悔しそうだ。

私は無難な方法で切り抜けようとする。

「そうか。それは残念だ。」

けど、次に会った時には是非教えてね。」

（しつこいわね。）

割と丁寧な物言いなのだが、なにせしつこいのだ。

少しの間渋ったものの念を押され、仕方無しに頷いた。

それに満足げに微笑むと、文官を引き連れて私の言った右を曲がり、消えて行った。

それをしっかりと目で確かめて、私は一息ついた。

しつこい男は嫌いだ。

仕方ないわね、と口の中で呟き、荷物を持って彼らとは真逆の方向へと進み出した。

その様子を物陰から伺っていた二人。

私が自分達が元来た方へと歩んでゆくを見て、彼女を影から覗き見るのを止めた。

「シオン、だから彼女は白だと言っただろう。なんでも疑うのは止めろ。」

自分と同じように彼女を覗き見ていた男、シルガーが口を開いて自分に呆れを含んだ物言いをしてきた。

「まだ白と決まったわけじゃない。」

それにしても、俺達は殿下の命を受けて王子の教育係をしているのに、王子は相変わらず脱走するし、困ったものだな。」

「わたし。」

「。」

「ワタシ。」

「。」

「俺、ではなく、私、です。」

幾度となく言葉遣いを訂正してくるシルガーに渋々口を開いた。

「わたし。」

「そうです。良く出来ました。」

どこか子供に言い聞かせるような口調に嫌気がさした。  
昔っからこういうヤツだった。

「そんなことばかり言っていてイイのか。今夜が楽しみだな？」

不適に笑って言ってやった。

が、近くを歩いていた侍女が見てあらぬ疑いをかけられたことは全く本人の知らないところだ。

不適にも見える笑いは、妖艶な艶やかさを感じさせるモノとも見て取れたようだ。

会話でさえ誤解を招くものだったとは本人も気付いていなかった。

たいていシオンがシルガーにこんなことを言ってくる時は、腹いせのためにシルガーの寝室に女を勝手に侍らす時だ。<sup>はべ</sup>

そのことを長年の付き合いで理解しているあたり、ため息を吐き出した気分だった。

そんなことをシルガーが考えているとは露ほど知らず、シオンは先程の少女を思い返す。

前髪が邪魔をしてよくは見えなかったが、整った顔立ちだったように思う。

髪の色も綺麗な黒だった。

だが、近くを通り過ぎる瞬間、仄かに薰った匂いを思い返せば眉をしかめる。

あれは髪染め粉の匂いだ。

女性とよく触れ合う機会が、この上なく多いので良く分かる。

娼館に通うと顧客の要望に応えるために、髪を染める女性は多々いるのだ。

安物であれば、1ヶ月以上は普通に匂いが付いてまわる。

だが良質の物は1ヶ月もあれば大分消え、匂いは薄れていくのだ。

彼女のは常人ならば普通に薰らない程度の残り香のような物だったが、近衛の並外れた五感を持っているシオンには分かったのだ。

それに、染めているならば普通はあんなにも綺麗に色が出ることはまずない。

なぜならばこの国、アラインダ国の人間は色素が濃い者が主なのだが、彼女の髪の色素がもし淡泊なのであれば、綺麗な色彩が出るのも頷ける。

では何故容姿を変える必要があつたか……

そこまで考え、シオンは報告をするべきか考えた。主に。

だが、ただでさえ忙しい主の手を煩わせたくはない。

なので独自調査をしてから報告しようと、そう考えシルガーと共に王子を探すべく身を翻した。<sup>ひるがえ</sup>

## 触れ合い（後書き）

皆様お久しぶりです。

次の更新も間が開きそうですが、頑張ります。

初登場のシオン君、意外に腹の中黒いです。

抜け目のない男ですね

それに比べシルガーさん、ある意味被害者です（笑）  
ですが侮れません



## 王子の憂鬱

それからというものの、私は王子と会う機会がかくだんに増えた。

それは意図的に、といっても過言ではない。

私から、と言う訳ではない。

行く先々に王子が出没するのだ。

だから私は首を捻る。

（わたし、怨まれるようなことしたかしら？）

王子と私は今、書庫にいた。

私は女官長に許可を取り、王宮に入ってからというもの、ここに入りしていた。

そのことを知っているのは許可してくれた女官長と幹部である女官の数人だけ。

女官とは侍女の上の上にある特別な管理職のことだ。

それはごく数人しかねない。

何故数人なのか、と言うと身分に関係なくなれる代わりに、それなりの実力が伴っていないければ成ることは叶わない。

箱入り娘だったり、どこぞの権力を駆使して入った輩などは以っての外。簡単には成れない役職なのだ。

並大抵のことではなることできぬ仕事。

その代わりとは言ってはなんだが、優に10年は苦労しないだけの給与が払われる。

なので平民でもなれるが故、血の滲むような努力をしてきた者が多い。

「ナニを読んでいるんだ？」

物思いに耽っていた私は、かけられた言葉に意識を戻した。

「ああ、これですか？『精霊戦争論考』です。王子も読んで御覧になられますか？」

「僕は、遠慮しとく。」

私に合わされた目線を気まずげに反らすその様子に首を捻る。

「どうかしたんですか？」

そう聞いてみたは良いが、相手から答えは返ってこず、視線は反らされたまま。

ずいぶん前までは威勢がよかったのにどうしたことが。

私はそれを少し淋しく思う。

書庫に沈黙が満ちる。

今日はこれくらいにしようと立ち上がったところで、真っ正面に座っていた王子が眠りこけていることに気づく。

「あら、眠かったのね。」

しかし季節の移り変わりの時期にこんな所で居眠りしていると風邪を引きかねない。

困ったわね、と思索していると背後に気配がした。

見知った気配に振り返ると、そこには見知った顔があった。

見知った、と言っても一度会ったっきりの関係だ。

赤髪に隠れた瞳が鋭利な輝きを見せる。

一応挨拶はするべきかしら？と考えたが、結局口を開くことはなかった。

シオンは瞳を隠すように伏せていた頭を上げ、こちらを見る。  
だがその瞳には先程の鋭い光りはなかった。

私は、内心舌を巻いた。

瞬時にその瞳は敵意を隠してしまったのだ。

「これはこれは、先日御見かけした侍女殿ではありませんか。」

「

わざとらしい言葉。

「これは奇遇ですわね。」

「どうしてこちらに？」

「あら、私もお聞きしたいですわ。」

ここは書庫だ。

それもあまり人の寄り付かない。

そして偏見になるが、彼のような騎士の職につく者は滅多と近寄らない。

「いや、ただ本を調べに。」

「そうですね。けれど調べ物でしたら図書館の方が最適ですよ?」

ニツコリと微笑みながら言ったが、笑っているのは口だけだと十分理解している。

王宮にはとてつもなく大きな図書館がある。各国のことや地方の気候を記した書物。もちろん歴史書なども数多くある。  
ならば調べ物は、そちらの方が最適なはず。

「そうでもないですよ。しかし、貴女の名をお答え下さるといふ約束は守って下さいますよね?」

「その似合わない口調、どうにかして下さらない?」

名を再び尋ねられたことへの苛立ちが、私のそれを言わす引き金となった。

「でしたら貴女もやめてくれませんか?

同等の匂いがするから

ね。正直めんどくさかった。」

口調が途中から変わった。

そして、そう言った彼の瞳には再びあの光が宿っていた。

「 ちょうどいいわ。私も面倒臭<sup>わたし</sup>かったから。」

はつきり言って、敵意を向けてくる相手に敬語を使うのは癪だったのだ。

「 。

「 。

「それで、どうしてここにいるんだ。」

沈黙の後、意外にも先に口を開いたのはシオンだった。

「貴方こそどうして。」

「どちらも譲らない。

否、譲れない。

私は先に口を割るつもりはさらさらない。

「 なら質問を変えるよ。」

それは、

そこで寝ている少年が誰であるか、知っているのか。  
あるいは、その子の口から何かそれらしきモノを聞いたか。

というもの。

私は迷わず首を振った。

あの子は、一切自分のことは話さない。

私が王子、と呼んでいるのは“あくまで推測”だ。

私が首をゆるゆるのを確認して、シオンは王子を肩に担ぎ上げた。

米俵のように。

あえて指摘したりはしない。

男同士でお姫様抱っこをされても困るからだ。  
リアクションに。

「邪魔したね。」

私の方をチラリと一瞥したきり、シオンは振り返ることなく扉を潜り、書庫を出ていった。

その彼が、扉を閉める直前。

私はボソリと漏らした。

その子の弱さもちゃんと見つめてあげて、と。

その言葉が、彼の耳に届いたかどうかは定かではない。

そして扉は閉められた。

沈黙の戻った書庫で、私は一人呟いた。

「強い面ばかりを求められれば、あの子はいつか壊れてしま  
うわ。」

相手がその弱さを知っているだけではいけないのだ。

大切なのは、見つめてあげること。

手は貸さず、見守ること。

手を貸すことは、いけないことではない。

だが、その貸方、かしかた度合いを間違うくらいならば、貸さなくていい。

（私はそう思うから　　）

## 赤髪の事情（前書き）

視点がシオンに変わります。  
少しですが



## 赤髪の事情

王子の私室に着いた頃。

ようやくシオンが足を止めた。

先ほど会った彼女の言葉が耳に残っている。

けっして大きな声ではなかった。

そして、独り言のような声だった。

「その子の弱さもちゃんと見つめてあげて。」と。

あれは、どういう意味だったのだろう。

そして、思い返す。

彼女の事を。

自分が探していた小さな王子は、書庫の机に突っ伏して眠っていた。初めは、向かい側に座っていた彼女が何かをしたのではと、一瞬ヒヤッとした。

が、直ぐにそれは思い違いだと理解することになった。

書物を真剣に、だが、どこことなく楽しそうに読んでいた彼女。だがフと顔を持ち上げ、立ち上がる。

翡翠のような、淡い瞳に目の前で眠っている王子が映し出された。瞳の色は、どこか冷たい冷めたような印象を持たせるそれだったが、

目の前の人物が眠っていると知ると瞳が和らいだ。

「あら、眠かったのね。」

聞き間違いでなければ、彼女はそう言った。

そして何故か、困ったような表情をしているものなので、シオンは部屋に一步踏み出したのだった。

そういえば、尋常じゃない五感を持っている。でなければ第六感だろう。

書庫に足を踏み込んだだけでらシオンが入ってきたことに気がついたのだ。

では、外にいた時は気づかれなかったのだろうか。  
まるで、テリトリーを張っているかのような。

ますます怪しい。

そう思えてならない。

## 傍観者と関係者（前書き）

視点戻ります。

## 傍観者と関係者

「あゝあゝあ、完璧怪しまれてるわねー。」

あらどうしましょ、と言うように、口に手を当て私は言った。

それを聞き付け、グレファーもといレファアーが、首筋の髪影からヒヨコリと顔を覗かせた。

「その言い方、まるで傍観者の台詞だね。私が言いたいくらいよ。」

「まあ、いいじゃない。傍観したくなることもあるのよ。」

自分の事でもね、と付け加える。

「貴女は傍観しすぎよ。」

レファアーの言葉に、まあね、と笑いながら返すと呆れられた。

「それより、私が書庫に籠っている時、何処に行ってるの？毎回よね？」

「ん？ああ、あれのこと？まあ、社会見学つてことで多めに見て。」

妖精、いや、精霊に社会見学もクソもないと思う。

あえて口にはしないが。

「それより、どうするの？あのホルモン撒き散らし男、貴女のこと探ってるわ。」

再び口を開いたレファアの言葉に、聞き慣れないものがあつた。

「ホルモン撒き散らし男？」

「あの、色香を振り撒く騎士のことよ。」

「もしかして、赤髪の騎士の人の事を言っているの？」

「そうよ。それ以外に誰が居るって言うの！」

「あまり良い、ネーミングセンスでわないわね。せめて“歩く公害”、辺りにしとかないと、品位を疑われるわ。」

「　　実際、品位とかそんなもの、これっぽっちも考えてないでしょ！？それに、“歩く公害”ってのも十分酷いわよ。」

私はその言葉にそうね、と笑い、ただ苦笑した。

それは中庭でのことだった。

貴族の室内にあったゴミを焼却炉に持って行っている途中。

木の下に、誰かを見つけた。

影になっており、分かりにくく、俯いているので顔は分からない。

だが、目も覚めるような鮮やかな赤だけははっきりと見えた。

赤い髪と言えば、あの騎士しか思い浮かばない。

けれど、身長かしても、雰囲気からしてもどちらとも当て嵌まらない。

おかしいわね、と思いつつ足を進めると、申し訳程度の声が聞こえた。

「い、いも比べやがって。貴と俺は違う人間なんだ。なのにどうしてそのままでいたらいけないんだ。」

近づけていた足がピタリと止まる。

そして、また再び動き出す。

「世の中、人間は人の足元を見るヤツばかりだ。」

「あなたは？貴方はそうではないでしょ？」

思わず、口を挟んでしまった。普段なら有り得ないのに。強い自己犠牲の念に、私は顔をしかめた。

赤髪の少年は、突然表れた私にビクリして固まっている。それもそのはず。

この場所は滅多と人が通ることはないのだから。

私は少年の元までユツクリと足を進めた。

その間も、少年は動く気配はない。

否、動けなかったのだ。

突然表れた少女。

そして言われた言葉。

どちらも予想外だったのだろう。

「そんなに辛気臭い顔してると、善いことなんて何も起きないわよ。嘆くだけじゃ何も変わらないわ。　　って、私が言える台詞ではないけれどね。」

そして少年が口を開く。

だが、そこから言葉が出てくることは無く、ただ返ってくるのは頼りなげな瞳がけた。

何度か口を開閉したが、結局言葉が出てくる事はなかった。

そして私は、ただ少年を見つめ返すだけだ。

少年が痺れを切らし、こちらに動こうとした時。どこからともなく悲鳴が上がった。

何事かと思い、私も少年も辺りを見、出所を探そうと視線をさまわ

せた。

すると小15人ほどの、柄の悪そうな男が武器を持ってこちらに駆けてくるではないか。

手には何かの袋だろうか。

リーダーらしき男以外は、全て皆金目になりそうな物を持っていた。だが、先頭切って走って来るリーダー（定着）は、生地は良いが小さな袋だけだ。

（何かしらあれ？）

そう疑問に思い視線を向けていると、なんとこちらに走って来るではないか。

（あらら、何だか面倒臭い事に巻き込まれそうな予感）

そして男達は二人に気がついた。

「おい、女がいるぞ。」

「調度いい。連れて行くか。」

勿論私の隣に居る少年には目もくれない。

少年一人、たいしたことないと思っているのか。それとも、本当に気がついていないだけなのか。

どちらにしろ無い物として扱われている。

「あらいやだ。」



口を手で隠し、わざとらしくも聞こえる声音を発した。

小声で、呟き程度だったそれ。けれど少年の耳にはしっかりと届いていたようだ。

アラインダ国の王宮は、こんな不屈き者の侵入を許してしまうほど、警備が手薄だと言っのだろうか。

いや、そんな事は無いはずだ。

何故なら腕の利く者が沢山居るからだ。

ならば可能性が大きいのは初めから内部にいた、考えるのが妥当だろう。

陰へと消えた彼女へ（前書き）

視点があやふやに  
すみません。

赤髪青年の方ぱいです。

## 陰へと消えた彼女へ

「んな野蛮な奴らの言うことなんて聞くわけないじゃない。」

ボソツと私はそう漏らした声は以外とハッキリ聞こえた。

まさか城内でまでこんな言葉を吐くやからが居るなんて思わなかった。

こういう類いの者は十中八九卑劣なことしか考えていない。

だが、他の者の瞳が鈍よりと濁っている中、先頭に行く男のそれだけは濁っていないかった。

比較するものがあるからこそ、それは一目瞭然だ。

人の心は瞳に現れる。

良く耳にする言葉だ。

「ねえ。」

反応は

ない。

「ねえ。」

「？」

「あゝもう。貴方のことよ。」

“貴方”の所を特に強調していった。

指された本人はビックリしている。

「先頭の人以外なら手を出していいから。どうかしましょう。」

すっかり戦闘意欲丸出しだった彼に。

その言葉がよっぽど以外だったのだらう。

当然だ。

私は女性であって騎士ではない。それは外見で見ての通り。

しかし私の発した言葉は、彼に頑張つて、とエールを送るものではなく、指示を出し、同じように戦闘意欲を剥き出していた。

嘘ではない証拠に、瞳に彼等に対する敵意が剥き出しにされていた。

「まさか、あいつらを相手にするつもりですか!？」

「あら、そう聞こえなかった？」

疑問を疑問で返す私。

「いえ。そう聞こえたから尋ねているんです。女性なら、普通身を隠すことを優先しますよ。」

普通の女性のような行動をしない私を前に、青年は敬語になってしまつた。

「普通の女性、ならね。」

質問の問いに答えた私の表情は、どこか儚げで、陰をまとっていた。

「それより、貴方は右側をね。私左するから。ほら、直ぐそこよ。」

質問よりも辺りに気を配っていた私は、その言葉を言い切るか切らないかの内に走り出していた。

「あつ！！ちよつと」

「待つて」口にしようとしていた彼は、口を閉じるしかなかった。チツ、と短く舌打ちをすると、自分から見えにくい死角から襲ってきた剣を避け、相手の手首に手刀を落とす。

そして人体の急所である鳩尾に容赦なく拳を叩き込む。

「ぐっ！」と、くもぐつた声を出して男は地に倒れた。

しかし彼は、最期までそれを見届けることなく次へと向かった。

そして、蹴りを入れて何人かを地に沈めた所で、遠くを走り去る人影に気が付いた。

その正体は、私が手を出すな。と暗に言った、先頭を行っていた男。それに気付いた青年は、それほど離れていない場所で男達の相手をしていた私に初めて顔を向けた。

すると偶然なのか、必然なのか。私が調度青年に顔を向けたのとは同時だった。

そしてもう遠くなった人影に視線を向け、私は首を振った。

それは追うな、と言うことなのか、諦める、と言うことなのか。青年には分からなかったのだろう。

だが、一つ頷きまた男の相手をし始めた様子を見れば、追うことだ

けは辞めたことが分かる。

そして、最期の一人を地に沈めたのはどちらが先だったか。それを確かめる前に、前方から駆け寄ってくる人だかりを二人は確認した。

「来るのが遅いのよ。」

誰に悪態をつくでもなく、私はため息を零した。

そして重要なことに今気付いた、という風に慌て、青年に一言言っ  
た。

「このことは内密にしてね。」

自身を指差しながら、私は口早にまくし立てた。

そして私は木陰に放置してあったゴミを手には、木々の合間を縫って  
駆け出した。

青年が口を開いた時には、時既に遅し。  
私の姿はそこには無かった。

## 嵐は唐突に

あの日以来、侍女達は落ち着きなくソワソワしている。

それは城に不逞なやからが持ち込んだ不安もあるのだろう。

だが、城を巡回する者が変わったたり、警備隊の配置の総入れ替えなどが余計に不安感を掻き立てているのだ。

そして極めつけは、その不逞なやからと一人で対峙したと噂される、目身麗しい赤髪の騎士。

仕事仲間のマルーシャさんによると、彼はそのことを否定も肯定もしていない、だそうだ。

その謙虚さがたまらない、などと言うファンが続出。そして今に至るのだそうだ。

（別に肯定しても良かったんじゃないかしら。）

何故なら、私も手を出したが、彼も戦ったのだから。

（まっ、そういう所が実際謙虚なんだろうけど。）

そんな人事のような事を考えながら歩いていると。

噂をすれば何とやら。

前方から赤い髪が際立って見えた。

一瞬、引き返すという選択肢が頭に浮かんだが、相手はこちらに気が付いていないようだった事もあり、そのまま進む事にした。

もちろん、顔を俯ける事も忘れずに。

これならば勇姿を褒めたたえられた彼を前に、少し恥じらいながら横を通り抜ける少女。と言った所か。

しかし、物事は上手く行かないものだ。

後に、何故隣に並んで歩いていた人影に、気付かなかったのかと、問い詰めたくなる。

「やあ、今日は非番かい？」

耳元で聞こえた声に身体が戦慄した。

「　　っゝ！！」

耳を押さえ、顔を俯けることも忘れて勢い良く振り返れば。声の主が、いけしゃあしゃあと微笑みを浮かべて、こちらを見ていた。

「っ、何すんのよ!？」

赤髪の青年の事など、頭の中から綺麗にすっ飛んだ。  
そしてその変わりに、歩く公害。もとい赤髪の騎士がそこに居た。

「何って、挨拶だよ。」

きつとこの笑顔の下には、悪魔的な黒い笑みを浮かべている。などと、勝手な確信を持ってそう思った。

「こんなのが挨拶なものですか!貴方の頭、沸いてるんじゃないかって!」

もう表面を取り繕うことすら忘れ、応戦していた。



「ああ。こっちの挨拶が良かったんだね。なら期待に応えるしかないな。」

そう言うや否や、唇を塞がれているのに気が付いたのは3秒後。

「ご馳走様。」

そう言った彼を思い付く限りの言葉で愚弄ぐろうしてやりたい、と思いな  
がらも、グツと口を噤くづんで、そして一言言った。

「沸いていたんじゃないくて、溶けていたようね、あんたの脳ミソ。」

そのままフンツと顔を背け。そこを後にする。肩を怒らせながら。

後に廊下の巡回をしていた騎士団員が言った。廊下で鬼を見た、と。

## 嵐は唐突に（後書き）

モニカが災難としかいいようのない  
本当に唐突に来了嵐（タイトル参照）でした。

## 始まりの音

どうしても腹の虫がおさまらなくて野外に出た。  
すると、どこから来たのかレファアが飛んできた。

一体今まで何処に居たのだろう。あれ以来、夜には私の元に帰ってくるものの、昼間はほとんど言っていないほど居ないのだ。それは彼女自身が言った社長見学、とやらをしているらしいが、私はあまり信じていなかった。

「モニカ、どうしたの？何かあったわけ？」

第一声からの的を射た物言いだ。

そんな顔して、と言われれば条件反射のように今まで以上に顔が歪むのは仕方ないと思う。

「何も。何もないわよ。」

何もない、と言う割にその口調はそこはかとなく苛立っている。  
それを聞いて、小さなレファアは私と同等のまで飛び目線を合わせる。

私はと言うと、真っ正面から面と向かって見つめられ、たじろぐ。

「なに、してるの。」

それも間近で。

「モニカ、嘘ついてるでしょ。目を見ればわかるんだから！」

突然そう言ったレファアーには驚かされた。  
間近でガン見されていたのは、こういう訳だったと知り、驚かずにはいられない。

軽く目を見張る私に比べ、対するレファアーは少し頬を膨らましている。

「話して、とまでは言わないわよ。だけどごまかすことだけはやめてよね。」

「いい？」と念を押されれば、頷くしかなかった。  
しかし驚いた。

「何があつたのか話して！」と言われるかもしれない、と何処かで思っていたのは否定できない。

「どうして何も聞かないの？」

気が付いたらそう口にしていた。

「聞かないわよ。話しづらいことなんでしょ。話してくれるまで待つてる、だなんて大層なことはいないから。だから、吐き出したい時は、誰かに聞いて欲しい時だけ言ってくれたらいいわ。言わない、と貴女が決めた物だけ胸に仕舞っておいて。私が言いたいのはこれくらいよ。」

何故だかレファアーの背中が小さく見えた。  
強気な発言。なのに、どこことなく力無く。

ただ、自分のせいでレファアーにそんな顔をさせていることだけは分かった。

「じめんね。」

これは何に対する謝罪なのか。私には分からなかった。

あれからレファールと会話をしていない。

いや、正確にはいつものような会話をしていない、と言うことだ。今は単語で話しているようなものだ。

では、どうすれ元の様に戻れるのか。それが私の悩みだった。

そして頭の中にはシオンにされたこと。そしてあの時隣には、赤髪の青年が居たと言う事など微塵も頭には残っていなかった。

「モニカ、手紙が届いているわよ。」

そう言ったのは誰だったか。

なかなか取りに出来ない私に渋ったのか、隣に居たマールシャが代わりに手紙を持ってきてくれた。

「どうしたの？気もそぞろね。」

「はい、これ。」と手紙を差出ながら、マルーシャが口を出した。

「あつ、ありがとうございます。」

反応もワントンポ遅れている。

「誰かと喧嘩した？なら、あまり良いアドバイスをしてあげられないわね。」

一か八か、彼女に相談してみる。と言う選択肢が頭には浮かんだが、マルーシャは、確かにアドバイスをしてあげられない、と言った。

何故喧嘩した事が分かったのか。そして相談しようかと悩んでいた事を知っているのか。疑問はかなりある。

その疑問が口を突いて出る前に、マルーシャが口を開いた。

「けどね、疑問をぶつけてみるのもいいわよ。」

「え？」

「貴女は今さつき、私に疑問を持ったでしょう？」

「違う？」と聞かれれば頷くしかない。

「そんな感じに、喧嘩した相手にもぶつけるの。よっぽど不利な質問でなければ、相手は答えてくれるはずよ。」

「疑問を？」

「そう。分からないなら聞けばいいの。聞かないと、人の思いは知ることはいないわ。」

ストーンと心にその言葉が入って来た。

一気に自分の視野が広まった感じた。

「なんだか納得です。」

「でしょう？まあ、これはある人の受け売りなんだけどね。」

普段の仕事熱心な彼女からは、想像もできないような笑みだった。悪戯が成功した時のようなそれ。例えるならばそうだ。

「それはそうと、もうそろそろ敬語、止めない？」

悪戯っ子のようなそれに、私は思わず笑ってしまった。

「そうね。じゃあ、改めましてこれからも宜しくね、マルーシャ。」

「宜しくね、モニカ。」

私は、清々しい気持ちでその場から駆出す。

目指すはレファアの所。

もう迷いのない私は、振り返ることなくその場をさる。

瞬間、一気に風邪が吹いた。寒い季節の予感を知らせて来るようなそれに、マルーシャはひっそりと笑みを作った。

もうすぐ冬だ。

雪が積もり、この世界を真っ白に塗り替える季節。

「あれから、もうすぐ2年になるかしらね。」

誰も居ない廊下に、彼女の言葉がやけに響いた。

だが、それを耳にする者はいない。

それを冷たい風だけが、言葉を何処かに運んで行った。

さあ冬の始まり。

季節を変え、人を優しく見守っている。

どこかで始まりを知らせる音がした。



## 始まりの音（後書き）

もういい加減メインキャラが揃<sup>そろ</sup>ってきたことなので、そろそろ本題に入ろうかな、と思っております。

第3章からはしっかり頑張ります。

**漏れ出す事実（前書き）**

ここからは第3章です。

## 漏れ出す事実

明け方に少し開けた窓の隙間。そこから寒気が音も無く入りこみ、じわじわと室内の温度を下げてゆく。

私は、冷えた体にグルリとシヨールを巻き付けると、床に足を付けた。

なぜだかこの季節に入ってから、あまり夢見が良くない。悪夢を見る、などとそんな物ではない、と思うが。何かを夢で見て、目が覚めるのだ。

そしてこの季節は室内の空気が滞ってしまいがちで、私は気分が滅入る。

寒いのと、気分のどちらを取るかと言われれば気分だ。

なら夜間ではなく昼間換気をすればいいのでは、と思うが、昼間は仕事に出ている。なので、自室を無防備に開けるということは嫌だった。

「散歩でもしようかしら。」

思いつきに口にした言葉。

それが妙にしっくりした。

部屋に籠っているのは嫌だ。

ならば早い方が良く、と思い立つたら行動だ。

自分の足音が反響する音。

ほとんど言っていないほどそれしか聞こえない。

あと、聞こえる物と言ったら、風が葉を揺らす音ぐらいと言ったところだ。

「これは下手したら私、夢遊病者が徘徊しているだなんて思われそうね。      あながち間違っていないかもしれないけど。」

だって夢見が悪く、宛もなく歩き回っているのだ。違いと言えば、意識がしっかりしているくらい。

空を見上げれば、先ほどよりは僅かに明るくなっている。

（そろそろ夜が明けるか。）

このままここに居る訳にはいかない。

見回りの者に気をつけながら歩いてはいたが、夜が明ければ騎士の者達がどつと増える。

変なところで疑われかねない。

今の私にがしななければならないことは、目立たないで顔を覚えられないようにすること。

その上で安全を確保しなければならない。

足早に廊下を通り抜ける。

もうそろそろレファアが帰ってきているかもしれない。

問いただされる前に戻らないと。

（見つければ説教物ね。）

レファアーが頬を上気させて怒ってくる姿が容易に想像でき、思わず笑いを噛み締める。

次いで想像してしまった事があまりにも笑えなくて、顔からは笑いが消える。

何となしに、レファアーが妖精の姿から精霊に代わって説教をされた事はないな、と考えたのだ。小言で済めばいいが、レファアーが力を奮ったらと、ぞっとする。

自分の身は他者にバレない程度に守れるからいい。だが、建物はどうだろうか。私の見立てでは、この華奢で繊細な装飾の施された宮は精霊の力に、威圧に堪えられない。

この国に居る国守りが束になれば、精霊の威圧は何とか抑えられるが、力までは取り抑えられない。

そうなれば、私自身の力を解放しなくてはなくなる。精霊の力を滅除できるのは一級品の奏霊弔者だけだ。

この四面楚歌な中、その力がバレずに使えるだろうか。

（あゝ、やだやだ。何でこんなにも、悪い事ばかり思い付くの。）

頭を一振りして気分を切り替えようと試みる。

まあこの悪条件の中、マイナスに考えてしまうのは仕方ないと思うが。

いくらなんでもねえ、と呆れ混じりに息を吐き出す。

それはため息として出て行った。

足音が前方から聞こえたため、回り道をして帰ろうと道をそれる。だがそれもハズレだった。

人の気配が、また前方からやってきている。

引き返すにしても、先程の通路にはもう無理だ。

先程の通路から向かって来ていたのは、騎士ではないはず。しかしこちらの通路からは気配がしない。ならば騎士なのだろう。一般騎士と言ったところか。

騎士に見つかれば厄介だ。

ならば引き返すべきだろう。

そう思い立てば、身を翻していた。

そして先程の通路に戻る手前にあった部屋。私は何の迷いもなく、そこに足を踏み入れた。

扉から顔を背け座り込み、床に膝を付ける。

何か、何か嫌な予感がする。

気配を消し、念には念を。結界を張った。

きっとレファアーは、私が力を使ったことを感じとっただろう。

一息ついて、軽く深呼吸する。そして扉に向き直り、手を当てる。

耳を当てれば声が聞こえる。

まるで、ベルシアでレファアーと盗み聞きをしていた時のようだ。ただ違うのはレファアーが一緒ではないことと、あの時よりも遥かに緊迫した状態だということ。

「はまだ見つかっていない。だが、様は力を感じたと言っていた。」

「しかし、本当に王宮にいるのか？」

「様が居ると言っていたのだ。間違いないだろう。それとも貴殿はそれを御疑いになられるのか？」

「まっ、まさか。そんなことなかるう。私の忠誠を疑われるのですか？それにしても、この事を王には？」

「言つてはおらぬ。他の国守りにも、他言無用だと釘を刺してはい。だが一人、ヌーベル女史が信用ならんがな。」

「ああ、あの。女のくせに、我らに口出しする忌ま忌ましい国守りか。」

「そうであろう。他の女史の国守りのように、口を挟まなければ良いものを。」

そのまま私には気付かずに、廊下を曲がって行った。もう声は聞こえない。

だが私は座り込んだまま、動くことができなかった。心臓が、早鐘を打つように早い。自分の血液の音が聞こえるかのようだ。

「あの人達、っ！」

なんて言った。

「王宮に居るって。」

確かに言った。

顔から血の気が引いていく。きつと効果音があつたなら、サーと音がしていただろう。

（もしかしてバレた！？）

けど、そこまで大きな力は使ってない。

ナゼ

なぜ

何故

内容からして、先程の二人は王宮に居ることを確信しているぞぶりだった。

見つかるのも時間の問題だと言っことだろう。

見つければ

そんな考えが頭を横切る。

「       だめ       」

「       ナニが？」

背後から突然声がした。

突然のことで、ビクリと肩が震えてしまった。顔を見なくても誰だか分かる。

シオンだ。

だからこそ振り返れない。



今振り返ったら、情けない顔を見られる。

返事をしない私を不信に思ったのか、こちらに歩んでくる気配があった。

「こないで！」

とつさに口を突いて出た言葉。

相手に拒絶を示すそれは、思ったより部屋に響いた。

私の言葉に、彼からの返答はない。  
だがそれ以上は近付いてくる気配は無かった。

これは私の問題。  
いくら馬が合わない相手でも、気に食わない相手でも、彼を巻き込むわけにはいかない。

グツと手を握りしめ、今にもブラックアウトしそうになる自身の意識を叱咤する。

ゆっくりと立ち上がれば、シオンの影が見えた。そちらの方向に顔を向けないように気をつけながら、私は声を出した。

「何でもないわ。手間とらせてごめんなさいね。」

謝罪の言葉を口にするものの、それは突き放すようで、他人行儀な口調。

今の私には、これしが精一杯だ。  
悔しいけれど、これ以上関わらす訳にはいかない。

相手は騎士。

それも、全ての下のを纏める位にいるのだ。それがシオンの責任。そして役割。

これ以上、彼等に甘える訳にはいかない。

（これは私の問題だもの。）

グツと奥歯を噛み締め、力を抜かないように気を付けながら、室内から出ようとする。

だがドアノブを回す瞬間。  
手を掴まれた。

振り払う気力すら残っていない私は、声を振り絞って言う。

「　　離して。」

だがそれに返答はない。

いつもなら嫌味の一つや二つ、軽々と口にするはずなのにそれすらもない。

「離して。私、仕事があるから　　。」

シオンから見れば、きっと私は違和感ありありだろう。

手を掴まれても振り向かず、扉を見たまま言葉を発するのだから。

仕事と、言う言葉に反応したのか分からないが、シオンの掴む手の力が弱まった。

ドアノブを掴んでいない方の手。シオンには掴まれていない方の手で、ドアを開ける。  
部屋を出て、手を強く引つ張れば、掴まれていた手はいとも簡単に外すことができた。

「一応、お礼は言っとくわ。ありがとう。けど、もう私には関わらないで。」

「もう関わる事もないでしょうけど。」「と小さな声で呟いた。そして息を吸い込み、口に出す。

「さようなら。」

一度も相手の顔を見ることは無かった。  
そして振り向くことさえせず、その場を去る。  
向かう先は自分に宛がわれた部屋だ。

たとえ相手がシオンでも、一目見れば相手に縋ってしまいそうになるから。

誰にも会うことなく、無事に部屋にたどり着く事ができた。  
明け方、部屋を出た時と何ら変わりはない。  
ホッと安心したその時、視界の端が歪んだ。  
何だろうと、思い手を当てれば気が付いた。  
涙だ。

「可笑しいわね。何で今更、涙が出るの。」

笑えてるつもりだった。

だが、目の前にあった鏡を見れば情けなくなつた。  
弧を描き、笑みの一部を造っているのは口だけ。眉は頼りなさげに下がっているし、瞳には意欲がなく、光もない。そしてあるのは涙だけ。

笑う事を諦めて、ベッドに顔を押し当てる。

笑う事を諦めた顔には、いとも簡単に目尻に涙が溢れた。

今だけは

涙を流すトキを下さい

夜になれば

明日になれば

私は強く

前を向くから

その夜。

私は王宮を離れた。

足枷を付けた鳥は、鍵の付けていなかった鳥がここから外へ。

足枷は鳥の足に。

本当の自由が得られる時はあるのだろうか。

銀色の鳥はいずこへ。

シオン said (前書き)

視点が変わります

シオン said

「　だめ　」

「　ナニが？」

咄嗟に声が出てしまった。

少女の肩がビクリ震える。しかしこちらには振り向かない。  
いつものような破棄も、意欲もない。

心配になった。

何時ものように余裕なんかは観られない。

彼女の事を怪しいと思うのは、今でも変わらない。

だが別に敵意を持っている訳ではない。

シオンは、そう思う自分のことも良く分からなくなった。

彼女に近づく一步を踏み出していた。ほぼ無意識に。

だが、聞こえた言葉は拒絶。彼女を見れば、震えを無理矢理押し殺しているようにも見えた。何時もは強く見える彼女。  
一度もこちらを振り返らず、その顔色は伺えない。

わずかな光りでも反射し、自分の色にしてしまえる白銀の髪。その髪からわずかに覗く肌。顔は見えないが、赤みなど全く無く、むしろ青白い肌が見えた。

ゆっくりと彼女が立ち上がる。

それでもこちらを振り向かない。

「何でもないわ。手間とらせてごめんなさいね。」

彼女の言った言葉に、ただ疑問を持つ。

それは謝罪の言葉。

謝られるような事をされた覚えはない。

彼女を追い詰めるのは何か。

見落としているような気がしてならない。

気が付いた時には、彼女のドアノブを回す手を掴んでいた。

それは驚くほど冷たい手だった。

何時からこの部屋に居たのかは分からない。だが、長い間外気に包まれていたことは分かる。

「  
離して。」

呟くくらいの大きさの声。寒さで声が震えているのかと思った。しかしどうやら違うようだ。

「離して。私、仕事があるから。」

もう一度。深く息を吸い込んで、堅い声が発せられた。

このまま彼女を見失ってはならない気がした。  
姿ではなく、彼女の決意を。

騎士であるシオンはあの背中に見覚えがある。



あれは、何かに立ち向かおうとする背だ。

きっと表情は強張っているのだろう。誰かに見られることを是とせず、ただ自分だけの足を頼りに立っているのだ。

シオンは手を緩めるしかなかった。

自分の足で立つことを望んでいる彼女を引き止めれる訳もなかった。

彼女は掴まれていない方の手でドアを開けると、素早くシオンの中から手を引っこ抜いた。

元々無理強いてまで引き留めるつもりはなかったので、仕方ないと言えば仕方なかった。

「一応、お礼は言っとくわ。 ありがとう。 けど、もう私には関わらないで。」

そう口にした彼女は、やはりこちらを見ることもしない。

斜め後ろから、伺い見ていた口元が僅かな動きをする。しかしそれは言葉としてシオンの元には届かなかった。

思わず手を伸ばした。届かないと知りながら。

そしてその手は彼女に届くことなく空を切った。

「さようなら。」その言葉だけを残して、彼女は明け方の微かな闇に溶け込むかのようにその場から立ち去った。

伸ばした手で頭をかき、顔を覆った。

（今日の自分はどうかしている。）

その夜。

一羽の鳥が王宮から去ったのを、シオンはまだ知らない。

銀色の鳥はいずこへ。

## 花影

明けゆく空を見上げながら私は言った。

「今頃心配してるかしら？」

そう。

言ってきたないのだ。王宮を抜けることを。そして侍女を辞めたことを。

兄にもハーレイにも、ヴィオラにも一言も告げてはいない。

唯一知っているのは仕事仲間のマルーシャさんくらいだ。あえて言えば、後日屋敷に届くであろう手紙には私が侍女を辞めたいきさつなどを綴った物が母達の元に届くはずだ。

そしてそこには、自分を捜すことはしないで欲しいと言う内容が暗に書いてある。

同じ王宮内に居ながら、相談もなく辞めた事をフィオーラは怒っているかもしれない。

しかし容易には王子の側近であるフィオーラに近づけなかったのだ。けれどそれは言い訳にしかない。近づこうとすればできない事も無かったのだ。

「やっぱりお咎めはありそうね。」

（ああ、嫌だ。）

フィオーラの説教はねちねちとしつこいのだ。そして的確に核心を

突いてくるので、ごまかしようが無いのだ。

思い出しただけでも戦慄してしまう。

「ねえ、モニカ。」

「ん？」

「何処に向かっているの？」

頭上から聞こえてくる声。

「何処って

れ、レーフああー!!」

私のすっきょうな声が辺りに響く。

「五月蠅いわ。」

そんな私にもグレーファーは冷静に突っ込む。

「何時の間に付いて来てたのよ。だって私、レファーが居ない間に  
出てきたのよ。」

しかも私の頭に乗っかっていたなんて、と落ち込む私を余所にグ  
レファーは飄々と言ったのけた。

「私が気づかないとも思った？」

「わよねー。」

もう呆れるしかない。

いや、気づかなかった自分もどうかと思ったが。

「で、何処に行くの？行く当てがあつての行動でしょうね。」

「勿論行く当てはあるわよ。だけど場所が分からないのよね。」

「は？」

「え？」

疑問に疑問を返してしまった私。  
言うなれば、反射的にとでも言った所だ。

「何で当てはあるのに場所が分からないのよ。しかも場所が分からないのに、何ふらふら出歩いてるの！」

「大丈夫よ。」

呆気爛々と言つてのけた私に、何が大丈夫なのかと問い詰めるグレファア。

しかし、大丈夫と言つた私の顔は、何か裏のある笑みを作っていた。

「向こうが見つけてくれるの。」

心底楽しそうに、そして何故か意地悪そうに言い切る私に、グレファアは何が大丈夫なのかと問い詰める。

「見つけてくれるって何抜かしてんのよ。そんなことあるわけ」

ザッ

私の目の前に黒が広がる。

それは黒い人影が舞い降りた。ためだ。

一瞬後にグレファアは妖精の姿から精霊へと変化した。

「ダレ。あんた。」

冷たい声が私の隣から聞こえた。

だがそれに答えず影は地に片膝、片肘を付けて顔を俯けている。尚も黒いフードを深く被っており、私達からは全くと言って言いほど顔は伺えない。

それに業を煮やしたのか、グレファアは私より前に出ようとした。

しかし私はそれを手で挺した。

そして口を開く。

「見つかってしまったわね。案内してくれる？」

少し残念げに放った言葉に影も気づいたのだろう。

少し困惑げな雰囲気醸し出していた。

そういえば、とグレファアは思い出した。

私は王宮を出てからと言うもの、人気の無い所ばかりを選んで歩いていたのだ。それはこの影から逃れるためだったのだろうか？

初めは、影がグレファアの事に物凄く警戒心を持って接していたが、彼女が戦う戦意を失い物騒な気配を解くと影も警戒を緩めた。

グレファアはこの影が私の言っていた「見つけてくれる相手」だという事は直ぐに分かったし、私に対しての殺意も何も無かったので妖精の姿に形を潜めた。

「そういえば、場所はまた何処になったの？ この道を行けば町外れになるはずだけど。」

話掛けた私に影は頷くだけで、出会った時から一度も声を発していない。

（これは交渉しなければいけないわね。）

その対応に予想はしていたものの、忠実過ぎて呆れるしかない。

「こっち向いて。」

影は私に言われたように後ろを歩いている私の方を向く。

その時に彼女は、影の頭から黒のフードを剥ぎ取った。

身のこなしが軽やかな影が私の手から逃れられないはずもなかったが、影は甘んじてそれを受けたのだろう。

「これで声を出して話してくれるわよね。」

私のそれは、もはや問い掛けではなく確認だった。

グレファアは相変わらず私の肩の上で傍観を決め込んでおり、我関せずと言った様子だ。

「ねえ、失礼だと思うのよ。案内人が一言も喋らないだなんて。」

尚も食い下がる私は思ってもいない事を口にする。  
彼女にそこまで言わして、影は喋らない訳が無かった。

「失礼しました。私は党首様より案内を仰せつかっています。」

「分かったわ。よろしくね。」

そう差し出した私の手を、影は困惑げに手に取った。

彼女が更なる事を思案しているとは気づかずに。

（名も名乗れるよう、頼んでみるかしら。）



私の言った通り、進んで行った先は町外れだった。  
町の華やかさなどとはかけ離れた郊外。

案内されたのは数件ある内。一軒の古びた、けれど古風で風格のある屋敷だった。

敷地内に踏み入り、玄関をくぐれば床の木材がギシツと音をたてる。しかしそれは私が踏み込んだ時だけのことで、影の人の場合は何の音もたてなかった。

流石と、言った所か。

（影の人は男の人なのに、何だか負けた気分。）

しなやかな身体に、目立たず付いた筋肉が影にはあるのは分かる。  
なのに、だ。

これは経験の差だろう。

「モニカ。久しぶり。」

通された部屋のソファで、優雅にティーカップを掲げながら彼女は言った。

年齢から行くと二十歳はおに過ぎてはいるが、三十路には全く見えない。

「久しぶりです。やっぱり今回も見つけるのは早かったですね。」

「ふふ。私を誰だと思っているの。」

「花影の党首サマですよ。」

「分かっているじゃない。」

呆れるた私が嫌味を込めて様付けしたのに、軽く答えられて私はがっかりだ。

「じゃあ貴女の事だから、何で私が王宮に居たのか、どうして王宮を出たのかはお見通しなんでしょうね。」

残念だわ、今回は大丈夫だと思ったのに、と嘆き呟いている私に彼女は凄く楽しそうに笑う。

「当たり前よ。これくらい朝飯前なもの。」

国会機密を調べるのを朝飯前と言い切ってしまう知人に、私はもはや言い返す言葉がない。

ようやく言いたい事は言い切ったのか、雰囲気が少し変わった彼女。

「どうかした?」

こちらをじつ、と見てくる彼女に胡乱げに尋ねるが、返ってきた言

葉は予想外だった。

「  
    気に喰わないわ。」

てか、憎い！！などと呟かれ、私は意味が分からない。

「はっ！？」

何を考えていて、どう言う思考回路に陥ったのかは知らないが、彼女の脳内ではきっと突拍子もない事を考えていたに違いない。

「その男が気に入らないの。」

その男と言われて、どの男？と聞き返すも、この部屋に男性なんて居ない。

そもそも、此処まで案内してくれた影の男性は、私が室内に入るのを見届けてから何処かに行ってしまった。

「まず、どう言う判断でそういう考えに陥ったのか教えて下さい。」

（切実にそう願います。）

「だってねえ。モニカ綺麗になったんだもの。」

「え？」

何か突拍子もないことを言われた気がする。

「女が綺麗になった時は、決まって男が出来たりする時よ。」

「ちよっ！！待つて。」

（なぜに男が出来た限定。）

けれど嫌に納得した。だから男が関係してきたのか、と。

「ダメよ。まだお嫁には出さないわ。」

何も言っていないのに、話しは嫁ぐ話しにまでジャンプしていた。

「もう！私の話しも聞いて下さい。」

あまりの話しの進まなさに、私は苛立ちをあらわにする。

端から見れば、会話は噛み合っているようで噛み合っていない。

「聞いているわ。私に黙って男を作った罪は重いわよ。」

（これはダメだわ。）

なかば諦めかけた時、彼女が不意に押し黙った。

「そう言えば気になってたんだけど、彼女はナニ？」

鋭い瞳で見据えてくる所は、さすがと言った感じだ。

その先に映し出されたものは、妖精の姿になっているグレファア。

ひとえに、今の今までグレファアの事を指摘しなかったのは、害の

無い者だと判断したからだろう。

彼女の事を説明しようとした私を制したのは、グレファアだった。先ほどまで乗っていた肩を降り、私の目の前に立つと姿を変えた。グレファアの本来の姿。精霊の姿へと。

「初めまして、かしら。隠された土地の精霊さん？」

花影の党首、ネイラーが口にした言葉は意外だった。

「どうし

」

「なるほどね。そこまで分かっていたら十分よ。お察しの通り、私は隠された土地の精霊。グレファアよ。」

私の言葉を遮り、口を挟んだグレファアは何時にも増して饒舌<sup>じょうぜつ</sup>だった。

「そう。私は花影十三代目党首ネイラー・グラン。よろしくね。」

花影とは、金銭では決して動くことを是としない裏組織。

歴史の仲で花影が陰で暗中飛躍してきたのは数知れず。だが自ら組織全体が動いた事は一度たりともないと言われている。

「花影、ねえ。上等だわ

」

（ モニ力を守るぶんには。 ）

声にこそ出さなかったが、グレファアの表情からネイラーは読み取

つたらしい。

花影の由来は、自分が従うと決めた主【花】の下で暗躍する【影】であるから【花影】という。

## 光影のいわれ

仲間に引き入れる分には不足はない、と判断したのだろう。

「やっぱりネイラーは博識ですね。何でレファアーが妖精じゃないと分かったの？レファアーも隠れてたのに。」

普通は分からないわよ、と呟けば、ネイラーはふと妖艶な笑みを浮かべた。

「うふふ、普通じゃないもの。伊達に花影の党首をやってないわ。」

それもそうんだけどね、と渋々納得するが、あまり釈然としない私は渋面だ。

「親御さんには、そのまま連絡を絶つつもり？」

やはりと言うか、流石と言うか、知っていたようだ。

「言える訳ないわ。」

絞り出すように言葉を紡げば、頭に手を置かれた。

そして軽く数回頭を叩かれる。

それは幼子を宥めているそれに似ており、少しムツとする。

「いじけないの。」

諭すようにネイラーに言われれば、そんな顔していたかと頬に手を

当てた。

しばらくネイラーにされるがままになっていると、だんだんと眠くなってきた。

ネイラーは頭に手を置く際に隣に移動して来たので、調度良い感じ隣に肩がある。

いつの間にか私はまどろんでいた。

その頃王宮の一部ではちょっとした騒ぎとなっていた。

「これはどういう事だ。」

荒げた声を発したのはフィオーラ。

「ちょっと、落ち着けよ。」

「そうですよ。少し落ち着いて周りをみれば違う観点から物事を」



先程からシオンとシルガーが宥めるように言葉を掛けるが、全く成果は無い。

シルガーに至っては、話しが合っているようで合っていないが。

事の発端はシオンの一言だった。

「そう言えば　。」

シオンが言葉を発するのを途中で止めた。

今は第一王子、ハルギレーイの側近が集まり、近頃の王宮内の不穏な動きについて知り得る全ての情報を話し、情報交換をしていた。

「　　？何かあったのか？」

それをいかぶしむようにフィオーラが先を促す。

「いや、あるにはあった　　んだが　　。」

フィオーラはシオンの上司。

だが公式な場では敬語を使うが、普段は砕けた口調だ。

シオンは第一王子、ハルギレーイの持つ第一部隊の指揮者兼隊長だった。

そしてフィオーラはハルギリイの持ち得る全ての軍隊の最高指導者。

実はと言うと、二人は同期で実力もどっこいそっこいと言ったところ。そう大差ないのだ。

だがシオン本人たつての願いでフィオーラが上司になった。

その事にシオンは一切後悔していない。

「何かあつたなら、逐一報告するのが我等の役目ではないですか。」

いままで口を挟む事のなかったシルガーにまで言われてしまえば、シオンは報告するしかなくなる。

そしてシオンは話した。

早朝に高官の国守りが話していた事。侍女が、その話を聞くために入った部屋に居て、座り込んでいた事。

「なあ、それはどんな侍女だったか覚えてるか？」

しばしの考える仕草の後、フィオーラは言った。

国守りが言った言葉よりも、彼が侍女に興味を持つ事は大変珍しく、シオンは不思議に思った。

今の今まで、フィオーラが侍女に興味を持った事はないはず。

ならばあの侍女が、ならば何かの鍵なのだろうか。

「前髪が少し邪魔で、あまり容姿は良く分かないが大体なら覚えて

る。容姿はかなり整っていたように思うよ。瞳は薄緑でだったが、あまり黒髪に馴染んでいなくて違和感を覚えた感は否めないけどね。」

あまりそこまで容姿に注意していなかったせいで、彼女の雰囲気しか直ぐには思い出せなかった。

手繰り寄せるように思い出せば、フィオーラは名前の事まで尋ねてきた。

シオンは珍しい事でもあるものだと思いつつ、彼女の名を口にした。

それが間違いだった。

後にシオンは後悔することになる。

その後、フィオーラがパニックしたのは言わずもがな。

「なんでお前がそんなに焦るんだ。もしかして  
恋人だったのか。」

自分の言った言葉に有り得ない冗談だと思った。  
だがあながち間違っていないかもしれない。

歳はそう離れているようには見えなかったから。

「は？何を言っているんだ。私は俺の妹だぞ。」

フィオーラの口から何か有り得ない言葉が飛び出したように思う。

「すまないがもう一回言ってくれ。」

「だから、私は俺の妹だ。」

「冗談だよな。」

「何故俺が冗談をつく必要がある。」

心底呆れた、と言う風に言われてシオンはムッとして言い返す。

「だって似てないだろう。髪色も瞳の色も。しかも兄妹ならもっと知れ渡っているはずだ。俺の耳に入ってくるくらいにはな。」

フィオーラの髪は焦げ茶色に、瞳は漆黒。一方私は違和感のある染めた黒髪に薄緑色の瞳。全くと言って共通点がない。

しいて言うならば、容姿が二人とも整っている事くらいだろう。

「あまり周りに知られるのを是としない性格だな。」

あながち間違っではないない。そして嘘は付いていないぞ、と内心細く笑んだフィオーラ。

一方シオンは納得したが、何故か違和感が否めなかった。

ハルギーレイの執務室に向かう側近組3名。

言わずもがなフィオーラ、シオン、シルガーである。

「フィオーラ、こちらは執務室の方向ではありませんよ。」

いつもと違う道を進んでゆくフィオーラに、その後から着いて歩くシルガーが疑問を顕わにする。

「ん？執務室には向かってないぞ。」

「なら何処に向かつてるんです？」

「こつちの方は貴族の客室しかないだろう。」

まさか妹に会いに行くつもりか、と呆れて言ったシオンの言葉など無かったものと扱われた。

廊下でとある侍女とすれ違う際、フィオーラは彼女に声をかけた。

「モニカが何処に居るか知っているか？」

「モニカ、ですか？      彼女なら、辞職されましたよ。」

「「「!」「」」」

思わず三人は息を呑んだ。

そんなに簡単に辞職をするようには見えなかったからだろうか。

「辞めた、っていつですか？」

一番早く立ち直ったシオンが、戸惑いを隠しきれない面持ちで尋ねるも、返ってきた答えはなんとも素っ気ないものだった。

「何故第一王子の側近であるあなた方に御教えしなくてはならないのです。」

何時辞めようと彼女の勝手ではありませんか。」

「俺は、ハルギリイの側近である前にモニカの兄だ。今までも、これからもそのつもりでだ。」

「その言葉、嘘偽りはございませんね。」

真意にフィーオーラが頷けば、鼻の頭にそばかすのある侍女は幾分か目元を和らげた。

「分かつてはいるとは思いますが、彼女はもう此処にはいません。」  
フィーオーラもシオンもそれは想定内だったので、取り乱す事はなかった。

「モニカは昨日、私に辞任の届け出を出しました。上の者には明日提出してほしい、との事で。そして明け方近くに出て行きました。」

「　。　」

シオンは黙り込んでいた。

頭の中では昨日の朝の出来事が原因なのだろうか、と今更どうしようもない事を考えている。

あの時の様子は今でも覚えている。それくらい衝撃的だったのだ。

「そうか　。」

それ以降、フィオーラは口を開く事はなかった。

それ以上騒ぎ立てない所を見ると、彼女の身に危険は無いと判断したのだろう。

だが、ハルギリイの執務室に向かうとそこには珍しく先客がいた。

「ヴィオラ様、どいしてここに？」

ハルギリイの座っている所に詰め寄り、机を挟んで胸倉を掴んでいた。

そんなヴィオラにシルガーの声が届くわけもなく、二人は睨み合っている。

「説明なさいよ。これはどういうこと！！」

何時もは上品そのものの、その対象としかかなりえない彼女の激昂を聞いたフィオーラ達3人はその場で思わず立ち止まる。

「どうして止めなかったの。貴方が力を奮っていれば、それは避けられた事態。分かっていながらそれをしなかった！！あんななんて最低よ！」

そのまま入口付近に居る3人に目もくれることなく、彼女は出て行った。

室内には、ドアの露骨にも大きな音を立てて閉まった音以外何もなかった。

「 ヴィオラがこの部屋に来るなんて珍しいな。」

誰に言うでもなく、シオンがぼつりと呟いた。

それに促されるように残りの二人も口を開く。

「何であんなにも怒っていたんだ？」

フィオーラは疑問を口にした。

「そうですね。彼女があんなにも怒りを顕わにするのは珍しいです。」

シルガーが執務用の椅子に座ったままのハルグレーイを促すかのようにつづいた。

「 フィオーラ以外、少し外してくれ。」

静かな、少し消沈したかのような声が空気を震わす。



いつもの丁寧語をのけたハルギレーイの言葉。ただそれだけで、全く雰囲気が変わる。

何処か頑なにも聞こえるそれに、2人は従わざるをえない。

パタンと2人が出て行った扉が音をたてて閉まる。

二人分の気配が遠くなったのを見計らい、フィオーラは口を開いた。

「どういう事だ。」

それは仮にも主に対する口調ではない。

しかしハルギレーイはそれを咎める事はしなかった。

「先に謝っておく。すまなかった。」

そしてハルギレーイは話し始めた。

王宮を出たモニカの行方が知れない事を。

ハルギレーイ曰く、馬車も何も喚ばず王宮を出たモニカ。それに身を案じたため、ハルギレーイは影を付けて安全に屋敷まで連れ帰るよう命令を下したらしい。

だが、王宮を出てしばらくたった所でモニカの行方が分からなくなつたと報告が入った。  
だからすまない、と。

「なんだと！」

それを聞いた瞬間フィオーラが始めて声を荒げた。

「残念ながら、事実だ。影の實力は知っているだろう。それに、この事をお前に話したのはモニカが自分から行方をくりました可能性がないか聞きたためだ。」

「ない、とは言い切れないだろうな。」

「そうか。」

再び沈黙がおとずれた。

両者とも、それぞれ思う所があるのだろう。

不意に天井から一枚の紙がふってきた。

それを慣れた様子で拾い上げるハルギリイはさつとそれに目を通す。

「フィオーラ、あの二人を呼んできてくれ。」

普通なら、誰かが天井から降ってきた紙について突っ込まないとおかしいだろう。

だが彼等にとってはそれは日常茶飯事の事。

「話したい事がある。光影からの情報だ。」

影とは主のために遣え、暗殺から間諜、命じられた事なら忠実にこなす忠実な裏の存在。

主となった者に【影】と付く名を付けられた時から、その者の影となり手足となって動く存在。

それは王族にしか遣える事を是としない。

その事を知っている側近組はさして驚く事はない。

ハルギレイは早足で部屋を出て行ったフィオーラの気配と複数の気配を感じとり、閉じていた目を開けた。

「全員揃ったな。始めに聞いておく。

影花を知っているか。」

繋がる糸（前編）（前書き）

6 / 3 より 月鈴

## 繋がる系（前編）

「花影を知っているか？」

その問いに、側近である彼等は戸惑いを隠せない。

この王宮内で花影の事を口にしないのは、暗黙の了解と言って等しかった。

王家は昔、花影にひざまずく事を命じた。すなわちそれは王家に着け、と言うこと。

だが彼等はそれを受け入れなかった。理由は簡単なことだ。王家の上からの物言いが気に食わなかった。ただそれだけ。

それに花影の党首は代々女性だ。それは決まり事ではなく、単に女性の方が実力を握っていたと言うだけの事。そんな花影だからこそ、王の物言いが余計気に食わなかったのだろう。

当時は女性の社会進出が進んではなく、党首が女性ということもあり見下ろされていたのだ。なので、無理もないと言えば無理もない。

しかし花影はそれに見合うだけの実力を有していた。

それは政を行う王家には、喉から手が出るほど欲しいものだった。当然手に入れようとする訳だが、その手を優にかい潜った。そして

元から姿を見せる事は殆どなかったが、全く姿を見せなくなつた。

いかに詮索の手を広げようと、見つかる事のない花影の事はいつしか王宮内では禁句用語と化していった。

「口にしくなくても、誰もが知っているだろうな。」

「それは言えてる。大体侍女達くらいしか今は口にしないからね。」

「いいえ。若い文官達の間でも口にされますよ。」

侍女が口にするのは、女性が力を握っている花影の事が憧れと等しいからだ。

そして文官達の間ではは女性の社会進出についての議論をするたびに、それとなく出てくる話題でもある。

「まあ、大体は予想していたが。まあ花影について知り得る情報には大差ないだろう。なにせ情報自体が少なすぎる。だが、フイオーラの妹、モニカの姿を見失つた辺りで光影がこれを見つけた。」

そう言つて差し出したのは深紅の薔薇。

きちんと棘は取られている事から、誰かが摘み取つた事は確か。

そしてこの薔薇はただの薔薇ではない。

「これは！」

文官であるガイシーは博識なので、目にただけでこれが何なのか理解したようだ。

「名前ぐらいは聞いた事あるだろう。影花、別名女王の戒めとも呼ばれている。」

「確か花影の党首しか咲かす事のできない、幻の花と言われているはず。まさか実物を目にする日が来るなんて。」

その実物を見たことのないシオンが口を挟む。きっと架空図書の書物でも読み漁っていたのだろう。

「これが世にも珍しい影花。由来は花影からとったのか。」

フィオーラが推測気味に話せば、答えは直ぐに返ってくる。

「そうみたいだな。【花影】は花を主と例え、花のの影として暗躍するから。【影花】は影（花影）の咲かす花だから。」

本当に良く付けたよ、とシオンが言えば周りも同感らしい。

「で、なんでこの、世にも珍しい影花が、ハーレイの手元にあるのか御聞かせ願おうか。」

全員が一番気にしている所はそこだ。

「まさか、【花影】と接触したのですか？」

「いや。違う。接触したのはモニカなんだよ。」

「「「！」「」」」

返ってきたのは、3人にとって予想外なものだった。

「なるほど。花影とモニカが関係があるかもしれない、と言うわけだな。」

なるほど、と頷くフィオーラ。  
当然それに食いつく者もいる。

「！兄である貴方が否定しないと言うことは、何か知っているという風にとつてもいいんでしょうか？」

シルガーの言葉。

それに一斉にフィオーラの方を振り向く。

「いや。肯定も否定もできないぞ。」

「理由を聞いても？」

珍しく彼は食い下がる。

それは単に花影と接触しているモニカから、新しい情報を知り得る事ができると言う期待からか。それとも、接触をしている疑いのあるモニカを不信に思っている事か定かではない。  
たとえそれが同期の妹であろうとも。

フィオーラは苦笑して口を開いた。

「モニカは普段、自室で本を読んでいてな。」

言葉少なに話すフィオーラ。



幾人かは首を捻る。

接触の有無の事を話していたはずだ。

「その自室の窓からは裏門が見える。そして部屋の窓側には立派な木がある。」

ますます関係性を感じない内容になってきた。

「もしかして、その窓から出入りをしていたのか？」

ふと考える仕草をしたシオンは、何か思い当たる事でもあったのだろうか。そんな事を口にした。

「何を馬鹿な」

「良く分かったな。」

「なっ!!」

絶句して固まったシルガーはそのままに、話しは進んで行く。

「遠回しに言っていたんだろう。借りにも名家の令嬢が窓から出入りしている、なんて言えないだろう。」

シオンがしんつらに言葉を返せばフィオーラは同意を示す。

「お前、“借りにも”ってな。」

本人の知らない所でモニカはお嬢様が借りだと言われている。それに憐れみを持ったハルギーレイは口を挟んだ。



繋がる系（前編）（後書き）

皆様、久しぶりの更新で申し訳ないです。

サイトのほうで新しい小説を書いておりました。

続きをなるべく早く仕上げられるよう、頑張ります。

たぶん

6月3日

繋がる糸（後編）（前書き）

6 / 19（日曜日）  
に更新

月鈴

繋がる系（後編）

「それより、お前は窓から抜け出していたのを知っていたんだな。」

「それが、つい最近知ったんだな。」

誰もその回答は予想していなかった。  
当然驚く。

「お前が？」

上司でもあるフィオーラを、お前と呼びながらもいささか驚いた風にシオンは口を挟む。

「そうなんだがな。モニカのヤツ。あいつはあれでも手練れだぞ。」

またもや驚きを隠せないでいるシオン。  
シルガーはもはや例外だ。

残る一名は。

「なるほどね。納得したよ。」

「納得するなよ、ハーレイ。」

一応妹の事なので言い返してみるフィオーラ。

「ちなみに実力は？」

再びフリーズしているシルガーを横目にシオンは尋ねる。

文官であるシルガー。武術は全くと言っても過言ではない。それなのに令嬢であるモニカが武術が出来る事に軽くシヨックを受けたのだろう。

「一応、俺と対等には戦えるんだがな。ただ、力の差があるだけだ。」

それは男女の差で、フィオーラには一步及ばない事を暗に指している。

「なら俺とも対等か。」「

「それは私とも一緒だよ。」「

軽く落ち込むシオンにハルギーレイは労りの言葉をかけた。

シオンは改めてモニカは規格外だと、失礼な事を考えるしまつ。

「でもな俺が、モニカが窓から出入りしていると気づかなかったのは、屋敷の者のせいでもあるんだぞ。」「

「というと?」「

「召し使いが手を貸していたんだ。正しくは一方的に、だけどな。」「

「なら、モニカはその事に?」「

フィオーラは首を振る。

「実際のところは知らないだろう。」

「例えばどんなふうによ？」

興味をそそられたのか、今度はハルギーレが口を開く。

「主に 天気のいい日はモニカの部屋にあまり近寄らなかったり。外を眺めていると、召し使いの者は足早にその場を後にして、何時頃には再び来ると予告をしていたな。」

「わかりずすぎるだろう！」

「文句でもあんのか、シオン。」

「そんなわけないだろう。ただそれだけの彼女の行動では、わかりづらいと言っただけだ。」

シオンがそう言うのも当たり前だろう。

天気の良い日は、異常気象がない限りよくある事だし。彼女が窓の外を眺めるのは、日常生活の中に幾度とあるだろう。

「それはそうだな。分かるんだよ、感じで。」

「感じ？」

「つまりは使用人が見て、今日辺り行きそうだな、と思うと行きやすくてやるんだ。」

「なおさら分かりにくい。けど、屋敷の者は彼女の事を良く見ているんだな。」

「そうだな。」

しみじみと言った風なフィオーラは、顔に少しの影を落とす。

それに当然シオン達も気付く訳だが、とても聞けるような状態ではないのが分かる。

悩み、と言う今突き当たっているものではないのかもしれない。  
この王宮仕えの人には様々な事情があり、政治的な思惑が交差している。

それは大抵の人には軽く当て嵌まることだろう。

悩みのない人なんていない。

顔に出すことはあっても、話せない悩みもあるのだ。

いくら仲がよくとも、彼等は話せる事とそうでない事を区分して話している。

それは決して信用していないからではなく、信用しているからこそ話せないのだ。

それを彼等は良く理解している。  
だからこそ気が合うのだろう。



「しかし、その後は誰も付き従わず街に行くみたいだな。当然足取りも、誰と接触したかも分からない。」

フィオーラのそんな言葉に3人は絶句。  
言葉も出ない。

モニカが妹だと言う衝撃の事実を、つい数時間前に聞いたシオンもシルガーも、彼は過保護かと問われれば揃って首を縦に振るだろう。ハルギーレイも言わずもがな。

その過保護な彼が足取りすら確かめないなんて。と驚く他ない。

「だけど、フィオーラが焦っていない所を見ると、彼女が無事だと言う確信はあるみたいだね。」

必然的に、一番彼と接する機会が多いシオンはなんとなく理解できるようだ。

しかし文官であるシルガー。

文官だからこそ証拠がないと信じれないようだ。

なので、その証拠はなんだ、と問うてくる。

当然フィオーラが証明出来る訳なく。

結局は家族だから当たり前だ、と言う始末。

それにシオンとハルギーレイは呆れ返り。シルガーに限っては何やら煮え切らない顔をしている。

結局その不毛なやり取りは数刻続いた。



**繋がる糸（後編）（後書き）**

6月19日の更新でした。

花影と光影？（前書き）

6 / 2 1（火）の更新。

前の更新から空けずしてなんとか  
気力が尽きました

## 花影と光影？

ガヤガヤと五月蠅く感じる事が一般の街の騒音。けれど私にはそれすらも安らぎに感じる。

しかし肩に乗っているグレファアは違うようだ。眉間にシワを寄せて、眉を潜めている。

（ああ、もう。せつかくの顔が台なしじゃない。）

見える人はここにはいないけれど、どうしても彼女の整った顔が歪んでいると気にせずにはいられない。

内心苦笑しつつ、質屋で物を見繕っていた私は重たい腰を漸く上げた。

「お邪魔しました。」

結局何も買う事なく店を出たが、一応挨拶は忘れない。

むしろ何も買わなかったのに、長時間居座り続けて居たことに罪悪感を持つ。

そんな私をグレファアは不思議そうに見上げる。

「どうして買わなかったの？」

「欲しい物がなかったただけよ。」

にべもなく言い返すが。嘘だ。

それなりに良い物はあったし、買ってもいいと、思うような品はあった。

しかしグレファーは余りそこには居座りたくはなかったようで、気分が悪そうに見えたからだ。

実際あの店の雰囲気ダメだったのだろう。

品もそれなりに良かったし、揃えも悪くなく、店主もいい人だった。しかし欠点が一つ。

そこに在った物が本物だった、という事だ。

解りやすく言うと、そこに在った品がグレファーには合わなかったのだ。

魔力の籠った品は、力のある神官などが作り出せる。

しかし彼等の数は少なく、それなりの物を作るとなれば時間が取られる。

多忙である彼等の中で、それらを作るのはほんの一握りの人だけ。

そうなれば魔法具が不足する。

そこで何処の誰が思いついたかは知らないが、妖精を遣う事に思い当たった人がいたのだ。

つまりは道具を遣うために妖精を遣う。

それは妖精の殺生をしたと言うことを表す。

正直私が知ったのもつい最近。

それはグレファアーに指摘されて気づいた。

グレファアーは精霊だ。

同族とも言える妖精を遣われた品々に故意的には近付きたくはないのだろう。

改めて無理をさせてしまったか感が拭えなくて、我ながら至らないばかりだと唇を噛む。

そんな私をグレファアーは無遠慮に見た後、ため息を付いてこう言った。

「別に私に気を使わなくていいわよ。それは今に始まった事じゃないもの。」

グレファアーのその言葉に、私は目をひん剥いで振り返る。

「なによ。そんなに驚く事？」

軽く聞こえる言葉だが、私には苦痛を我慢しているようにしか見えなかった。

それが悔しくて、私はまた下唇を噛む。

「そんな事言わないで。」

「え？」

「そんな事思っていないのに言わないで!!」

グレファアはハッと息を飲む。

私の大声に街の人々が振り返る。

しかしそれに気づく訳もなく、私は滲み出てきた涙を拭う事なく走り出す。

「　　っ、モニカ!」

グレファアの声があるが、止まらない。

止まりたくない。

今追いつかれたら、思っている事全て吐き出してしまいそう。  
そんなこと言えるわけ無かった。

よく前も見ず走っていたからだろう。

思い切って角を右手に曲がった所で、頭上に影が落ちた。

気付いた所でもう遅い。

ぶつかると思い、足にストップをかけるが。人間そう安々と止まれ



るわけがない。

案の定、私は出していたスピード分の勢いで相手にぶつかった。

しかし予想していた衝撃とは少々違った。

「えっ？」

相手にぶつかった衝撃で自分の身体は跳ね返るはずだった。

そして相手も、跳ね返りまでせずともよろけるだろうと。

だが私の身体は、地面に投げ出される事なく受け止められたのだ。

「おっと。危ないねえ。モニカお嬢さん。」

見知らぬ人に名を呼ばれた事に驚き、相手の顔を確認める。

「　　ビジーラ。」

あまりにひよんな出会いだったので、私は呆然と呟く。

いつもなら、彼に会った瞬間に逃亡を謀ったかもしれない。

だが今はそんなことをする気力すらない。

二の次が告げなくて、絶句していると。思いがけずビジィーラから声が掛かった。

「どうしたんっすか。」

こんな所で。と言われて。

私は答えられる訳が無かった。

そんな私を不思議に思っただろう。

当然だ。

彼は私よりも身長が遥かに高い。

そして、街に出る際にネアーラに渡された帽子がある。

きつと髪色と容姿で素性がばれないように、との配慮だろう。

しかし兄の従者でもあるビジィーラには、ごまかしは効かなかったようだ。

沈黙を守る私に、困ったようにビジィーラが頬を掻けば、何時もと違う仕種に私は目を見開く。

普通の彼ならば、私がどんな状況でも気にはしなかっただろう。

ただ気にするのは私の、フローラル家の末娘としての心配。  
そして安全だけだ。

それが今はどうだろう。

様子のおかしい私を見て、困っていた。

その時に少し俯け気味だった顔を上げたせいだろう。

きつと顔がはつきりと見えてしまった。

私は先程グレファアから逃げる時に、涙を零した事をすっかり忘れていたのだ。

「どうして泣いてるんですか。」

まだ乾ききっていない涙を見ての言葉。

私は急に気まずくなって顔を逸らす。

さっきと同じ沈黙がまた続くが、雰囲気が軽くなったのは気のせい

だと私は思いたい。

すると不意に気配が増えた。

ぱつとそちらを振り向けば影花の影だ。

ほつと安心するも、ビジューラは警戒しているようで、視線を外すことはない。

敵ではないことを伝えようと、口を開いた、が。

思わぬ邪魔が入った。

シュン

空を切り裂く音。

キン

何かに当たる金属音。

音の正体は、花影に投げ付けられた飛び道具。

飛び道具は空を切り、花影に向かったが。

花影が目にも止まらぬ早さで手刀を抜き、

それは城の光影。

いわゆる影の存在。

（もしか何かの牽制？）

実際に光影を見たのは初めてだが、気配に城のレクイエムや国守りの気が充満している。

それは清浄な気配。

きつと影華は聡いので気付いてはいるだろうが、敢えてその姿勢を崩す事はない。

どうしようかと、考えあぐねていると。  
予想もしない人物が口を開いた

「モニカ・フローランス様ですね。」

（嗚呼、今日はやけに思いもしない人に名前を呼ばれる日だわ。）

「　　　　　違いないわ。」

「我が主の命により、王宮まで御同行お願いします。」

彼の言う主、だなんて分かりきっている。

しかし王宮の影。しかも光影が言葉を発するとは思わなかった。

花影の方を気にしつつも、任務を真つ当する彼は凄いと思う。

（そりゃあ気になるでしょう。）

なんて言っただって花影だ。

当たり前だけど、黒で統一した黒衣。それにある左胸の紋様。

銀の刺繍で、棘の付いた蔦と薔薇を象つたものだ。

詳しい人にしか分からないだろうが、その薔薇のモチーフは影花。

きっと光影の人もそれを知り得ていたのだろう。

花影と光影？（後書き）

6月21日の更新でした。

B  
Y  
月  
鈴

知りたくて（前書き）

7 / 3（日）

の更新



知りたくて

一般の人は知り得ない事。

むしろ物語に出て来る登場人物、としか思っていないだろう。

だからこそ王族からしか聞き得た事のない存在に、興味を示す事は不思議ではない。

まあ、割と女性の中で花影の名は浸透してはいるが。

どうやらこの時代。女性の社会進出を目指す人達からの注目が絶えないのだ。

なぜなら花影の頭首は実力行使主義で、代々女性のほうが地位が高かった。

なんでも花影の技術は、力のない女性でも努力しだいで容易に扱えるような物に開発されている。

いわば女性のために出来たような物だ。

花影が引き受けるのは、これが国のためになる。と判断し、自分の正義を貫くためにある。

ネイラーに聞いた事があった。

「どうしてあんなに頑張るの？」と。

「花影は、社会で虐げられた人達ばかりなのよ。」だから頑張るの、と言われた。

ぼんやりと、訓練所での影の訓練を見ていた私は、何度も相手に向かって行く女性に心を打たれた。

戦っている相手は男性だ。特有の腕力で女性を擦じ伏せる。それでも彼女は諦めない。

自身の素早さと、身軽さを生かして何とか反撃を繰り出す。

そして、それは一瞬の出来事だった。

女性が相手の動きを利用して、地に叩き付けたのだ。自分よりも力のある男を。

私は呆気にとられ、それを見ていた。

心のどこかで、敵うはずないと思っていたから。

だが実際は違った。

力を物ともせず、彼女は相手を倒してしまった。

「す、すごい。」

意図せず口からは感嘆の声が漏れる。  
それを横目にネイラーは言った。

「理由なんて、一見単純なのかもしれない。」と続けて言うネイラーに、私は何も言えなかった。

それは虐げられたから頑張るのが、と言う意味なのか。  
しいた

私には、そうであつて、そうでないように聞こえた。

ただ分かる事は、彼女もその虐げられた内の一人だと言うこと。

いつも自信に満ち溢れ、余裕の表情を見せる事もしばしある彼女の言葉とは思えず、しばし私は口を閉じたのだった。

閉じていた瞳を開けば、目に映る銀色が見える。

風で煽られた私の銀髪。

息を飲んで私と光影のやり取りを見ていたビジーラ。

なんの同様も無しに私達を傍観する花影。

そして私を王宮へ連れていこうとする光影。

私はやれやれ、と息を吐き出す。

「悪いけれどお断りさせて頂くわ。」

どうやら彼は、私の返事を聞くまでもなく、その返事を予想していたようだ。

「では、我が主の事とは誰かをご存知で？」

私は何を分かりきった事を、と鼻で笑ってしまった。

「そんなの知らない人の方が珍しいくらいよ。」

「そうですか。では私が半国守りなのはご存知で？」

コイツは何が言いたいんだ。

そう思わずにはいらなかった。

「光影なんて、みんなそんなものでしょ？」

実はこの内容は国家機密だ。

何故そんな機密を、国の何も担っていない私が知っているかと言うと、そんなの簡単だ。

「なぜそれを？」と別段焦ったふうもない彼は、大体予想はしていたと見る。

「それは貴方が想像している通りだと思うけど。」

チラチラと花影の影を目を向ければ、目元しか出ていない装束。そこから覗く一対の瞳。  
その瞳が「まだか」と問うてきているのを私は知っている。

そう、わたしの情報網。

それは花影から譲り受けるもの。

当日、ネイラーは言ったものだ。

「これは花影からの恩恵だと思いなさい」と。

悪いけど、私はこれ以上を光影と話す気は無かった。

「ビジイーラ。」

そして花影、光影共に表れてから口を開いていなかった兄の従者に声をかける。

「兄様には大丈夫だと伝えといて。私、今は会えない。きっと

捜してくれてるんでしょう？」

毎度毎度、何かがあつた度に過剰に心配する兄の事だ。きつと従者であるビジーラに搜索を頼んだろう。

「やつぱりと言うか、何と言うか。予想はしてたツスけど、帰らないんですね。」

私は頷く。

「なら俺が言う事は何もありませんね。ただ、大丈夫だと、その言葉を本当にフィオーラ様に伝えていいんツスカ。」

「心配かけたくない。」

「もう十分してますがね。」

ビジーラに切り返された言葉に、うつと詰まる。

オブラートに包まれてはいるが暗に、これ以上心配かけようがかけまいが大差はないのだと。そう言われている気がする。

「なら本音を貰った方がフィオーラ様はよっぽど嬉しいと思いますか？きつと大丈夫、だなんて言った所で、それが上辺だけの言葉だと見透かされるとは思いますがね。」

本当にコイツは痛い所をついてくる。

自分に否があるのは分かっているので、全く反撃ができない。

この従者は至上主義者だ。

主であるフィオーラを悩ます私には、容赦が無かったのは重々承知はしていたはずなのだが。

だが私にも譲れないモノがある。

「それでも、大丈夫だと言って欲しいの。大丈夫にするから私はこの言葉を兄様に届けてもらうの。兄様に宣言したからには“大丈夫”にするしかないじゃない？」

きつと大丈夫じゃないと思った日には、道は断たれる。

だから私は“大丈夫”だと言葉にする。

コトバは力となり、原動力となるから。

ついに折れたのはビジーラだった。

「分かりましたよ。貴女がそう言うのでしたら信じましょう。貴女はあの人に言った事だけは守るんでしょうから。」

その言葉に私は笑った。  
本当に私達兄妹を良く見ている。

「でしたら俺はこれにて帰らせて頂きます。」

花影が居ることにも、光影がしゃり出て来た事にも何にも触れずビジーラは身を翻して去った。

その姿を見送りながら、私は心の中で謝る。

自分勝手な事をして、心配をかけてごめんなさい、兄様、と。

一息を吐き出して、クルリと振り向けば、残る二名がそこにいた。

「分かりましたでしょう？私が王宮に行くつもりがないこと。」

「しかし」

きつめの言葉で暗に、いい加減帰れと言えば。相手も食い下がってくる。

しかし、遂に業を煮やした私はぴしゃりと言った。

「主の名だろうが、何だろうが、私は行かないと言っているの。分かったならさっさと帰りなさい！」



雰囲気が一辺し、纏う雰囲気までもを変えてしまった私に、辺りの妖精が反応する。

胸元のペンダントが熱を持って淡く発光しはじめた。

それにいち早く気付いたのは華影。

「彼女は我等が必ずお守りすると心に決めたお方。そんなに連れて行きたいのならば、私と一戦を交じわうか。」

光影でさえ怯む威圧を投げかけ、華影は毅然と前を向く。

深いフードから、ギリギリ口元と鼻が少し覗くくらいに見据える。  
もう少しで髪が見えるのかと  
言うほどだ。

そうして威圧に耐えられなかったのか、それとも華影の言葉に納得したのかは分からないが、華影は静かに去った。

だが私は固まったまま。未だその場を動けずにいる。

驚いた。その一言に尽きる。

話さないはずの華影が喋った。

それよりもその声に私は驚くしかなかった。

だってあの声は

「 マルーシャさん？」

信じられる訳無かった。

だって彼女のいつもの雰囲気とは、あまりにも掛け離れ過ぎていたから。

「 。

何も答える事のない彼女に、私は悲しくなる。  
どうして、と。

それはその事を話してくれなかった事に対してなのか、華影に属している事なのか、それとも王宮の侍女を辞めてしまった事なのか、私には分からなかった。

気が付けば走り出していた。  
彼女の手を掴んで。

彼女は抵抗しようと思えば、きっと私なんかをものともせず振り払う事は簡単だろう。

だがそうしないのは、甘んじて受けている他<sup>ほか</sup>ない。

走って走って走って。

手からは彼女の戸惑いが感じられる。

握り返す力は控え目で、どうしていいのかわからないような思いが感じ取れたから。

漸く屋敷に付けば、私は一気に2階まで駆け上がる。  
勿論、手は繋いだまま。

必然的に彼女も階段を駆け上がる嵌めになるわけで。

屋敷内にいた物は胡乱<sup>うろん</sup>気にそれらを見送るのだった。

ボタン

扉をなんの淑やかさもない開け方をして、私は部屋に飛び込んだ。

## 知りたくて（後書き）

初めからここまで読んで下さった方で、【モニカ】の名前を呼ぶ言葉が【私】になっていたら連絡を入れて下さると嬉しいです。文字列入れ替えをしたせいでそのようになってしまいました。

一応は確認したのですが、見逃し等ありましたらよろしく願います。

7月3日の更新でした。 癖で6月にしまいそうになる管理人

歪む面差し（前書き）

7 / 8（金）

の更新。

## 歪む面差し

そうして、威圧に耐えられなかったのか、それとも華影の言葉に納得したのかは分からないが、光影は静かに去った。

だが私は固まっただま。未だその場を動けずにいる。

驚いた。その一言に尽きる。

話さないはずの華影が喋った。

それよりもその声に私は驚くしかなかった。

だってあの声は

「 マルーシャ? 」

信じられる訳無かった。

だって彼女のいつもの雰囲気とは、あまりにも掛け離れ過ぎていたから。

「 。。 」

何も答える事のない彼女に、私は悲しくなる。  
どうして、と。

それはその事を話してくれなかった事に対してなのか、華影に属している事なのか、それとも王宮の侍女を辞めてしまった事なのか、私には分からなかった。

気が付けば走り出していた。  
彼女の手を掴んで。

彼女は抵抗しようと思えば、きっと私なんかをもともせず振り払う事は簡単だろう。

だがそうしないのは、甘んじて受けている他<sup>ほか</sup>ない。

走って走って走って。

手からは彼女の戸惑いが感じられる。

握り返す力は控え目で、どうしていいのかわからないような思いが感じ取れたから。



漸く屋敷に付けば、私は一気に2階まで駆け上がる。  
勿論、手は一方的に繋いだまま。

必然的に彼女も階段を駆け上がる嵌めになるわけで。

屋敷内にいた物は胡乱うろん気にそれらを見送るのだった。

ボタン

扉を、なんの淑やかさもない開け方をして、私は部屋に飛び込んだ。

「ネイラー!!」

案の定、その場にはネイラーが執務机には向かわず、ソファに腰掛け寛いでいる姿があった。

彼女は、私の呼びかけに方眉を上げこちらを見る。

「私は言わないわよ。」

相変わらず何の脈絡のないままそう言われれば、眉をしかめるしか

ない。

「……彼女は、… マルーシャ・グラフィッツですか？」

「……………」

その無言は肯定を表すか、否か。

答えはそんなの分かりきっている。

なぜなら、ネイラーは答えない、と初めから断言していたのだから。

「……ならっ、華影の影に喋る事を許可して下さい！！」

きっと私は自分勝手な事を言っている。と、分かっているても、そう  
言わずにはいられなかった。

依然繋いだままの手は相変わらず冷たいまま。

彼女と最後に笑い合ったのはいつだっただろう。

+++++

仕事の合間の、ほんのひと時の休憩時間。

まだ仕事の片付かない私を手伝いに、彼女は洗濯場まで来てくれた。干していた洗濯物を半分私の手から受けとった彼女の手が、あまりにも冷たかったから、私は言った。

「マルーシャはやっぱり心が温かいんだね。」

「……えっ!？」

触れた瞬間に、洗濯物を持って手を引つ込めてしまった彼女を見ても、私は尚も言う。

「あのね、町で良く聞くの。手の冷たい人は心の温かい人の証拠だって。私は残念ながら心が冷たいみたいで、手が温かいから印象に残ってたのよ。」

笑いながらそう言えば、マルーシャは強張らせていた表情を少し解いた。

「……そんなこと、初めて聞いたわ。」

自身の手を見つめながらそう言う彼女は、何か思う所が合ったのだろう。

「けどね、なんか嬉しく感じちゃうわよね。」

「嬉しい?」

「そうなの。だって私達って何でも見た通り、触れたりして感じた通りに受け取るでしょう。私なんか、外見から勝手に性格まで予想付けらるのよ。そうなるよね、その枠の中に入っていないといけないと感じてしまっただけだったな。だから、感じ取ったままじゃないこの話を聞いた時嬉しかったの。」

今まで思っていた本音。

いくら社交的な場面で顔を見せずとも、フーランス家であることには変わりがなく。どうしても決められた枠に入らなければいけないような疾走感に駆られる。

焦れば焦るだけ遠くなるそれは、私にとって重いプレッシャーのよ  
うな存在。

正直、街の市場でこの話を聞いた時は、私は見事に食いついた……  
…と思う。

父の娘だから聡明で、母の娘だから慈愛に満ちていて、兄の妹だから秀英だと。

そう言われる度に、そう在らなくてはいけないように感じて苦しむ  
事だけ。

だから本当に、あの言葉を聞いた時はうれしかった。

例えば心が冷たいと言われても、温かいと言われて期待されるよりも  
断然良い。

「ありがとう。」

「？」

「温かいつて言ってくれて、ありがとう。」

今でもその時のマルーシャの顔は忘れられない。

+++++

そう、あの時の笑顔と比べてしまうから。  
だから悲しく感じるんだ。

影となったのは最近ではないだろう。  
だからと言って、表情が固まるくらい無表情な彼女は見ていて嫌だ。

「私は別に、喋る事を禁じた覚えはないわ。喋る喋らないは個人の勝手。義務付けるのは趣味じゃないもの。」

「え？」

思いもしない事を言われた。

当然、喋る事を禁じているのだと思っていたから。

「喋らないのは自身の意志によるものよ。……私は別にどっちだっていいけどね。」

ネイラーから視線を外し、マルーシャを見ればやはり眼は合わせてくれない。

「そうなの？」

問い掛けても返ってくる返事はなく、それはもはや肯定しているも同然だ。

私はそう、としかと呟く事が出来ずに部屋から退室したのだった。

宛がわれた部屋に帰れば、何も無かったはずの窓際には一輪挿しがあった。

部屋を出た時には無かったはず。

興味を引かれて近づいて良く見れば一輪の薔薇。

だが、普通の薔薇ではない事は当の昔に教わった。

これは影花。

影の花となった花。

この国で存在するのは花影の側だけだ。

そして花影はこの花を扱う事を許された存在。

「……見守って来たのね」

この花は。

長い歴史を、そして人々を。

時代が変われば人々の生き方も違う。

争いは幾度となく存在し、消える事は無かった。

その争いを自分の信じる道へと導くために花影は動いた

人々のため、

未来のため。

祈ることだけでは嫌だと行動に移した人達。

その人達は、何を思っていたのだろうか。

きっとマルーシャも何かを思ってたのだろう。

だったら私はあの時、なんて言葉を投げかけてしまったのか……。

かけるべきはあんな言葉ではなかった。

「酷いこと言っちゃったわ」

マルーシャにも、  
グレファアーにも。

改めて思う。

なんて自分勝手なんだろう、と。

自分の理屈、自分の理念。

いろいろな考えがあつてこそ人間だと思うのだけれど、やっぱり感情に左右されてばかりだ。



さて、どうしたものか……。  
頭を悩ませ、考える。

あれからグレファアは帰ってはきているらしいが、顔を見ることはなく。

マルーシャはと言うと、何処かに引っ込んだらしい。

時々思う。

ついていないな、と。

一度に二人の人と拗れてしまうなんて、と。

今更悩んでもどうしようもないのだけれど、今はどう改善すべきかで頭を悩ませる。

どうやって会えばいいのだろう。

「おはよう、モニカ。話がしたいんだけど、少し良い？」

「あ、うん。……って、えっ!？」

掛けられた言葉に返事をしてから気付いた。

いつの間に入って来ていたのかは分からないが、話かけて来たのはグレファーだ。

「いつの間に……。」

全く気配など無かったではないか、と言えば気配を消してきたのだといけしゃあしゃあと答えられる。

「だってそうでもないと思っただんだもの。」

「は？」

ものすごく心外だ。

例え避けられる事はあっても、こちらが避ける事はあまりない。

「だってあの日、走って逃げちゃうんだもの。言いたい事も言えないわ。それにあれは言い逃げよ。反則だわ。」

「意外にもずけずけ言ってくれるわね。」

「当たり前でしょ。モニカに限っては、思っていることをハッキリと言わないと伝わらない事が分かったわ。」

ムッ

「それじゃあまるで、私が鈍感のような物言いだわ。」

「その通りじゃない。」

段々と喧嘩に勃発してきているような気がするのとは決して気のせいではないはずだ。

「だって、あれの時はっ!!」

「あの時は?」

「……………」

とつさに言いそうになった言葉を飲み込むも、何かを言おうとした事は明確で。追及されることは免れない。

でも、言える訳がなかった。

“あの時、魔法具を見つめるレファアの顔はとても哀しそうで、瞳

には険を孕んでいた”だなんて。

そこに憎しみの感情を閉じ込めるくらいなら、どうして口にしなかったのか、と。

どうして話してくれなかったのか、と。

これはマルーシャに対して持った感情と同等の物。

きっと私は悔しいんだ。

なにも出来ない事よりも、気付いてあげられなかった自分に対しての怒りや勢いどり。

「……何に対してそう思ったの？」

静かな問い掛け。

「多分、私は貴女やいろんな人の苦痛に堪える姿や表情を見たくないんだと思う。だからあの時のレファールを見て堪えられなかった。」

歪む面差し（後書き）

なんだかモニカが暴走気味……  
お、おちついて。

7月8日（金）の更新でした。

傍観の行く末（前書き）

7 / 15（金）

の更新

## 傍観の行く末

尚も私は言い募る。

「ああいう感情は、誰もが持っているものだわ。だけど、負の感情は他人やその人本人に悪影響を及ぼすものよ。持つな、とは言わないわ。だけどそれを一人で抱えるのはやめて。」

私は改めて自分が口不調法な事を思い知る。  
結局会話の主旨が上手く言えない。

「あはは、」

「な、何よ。」

突然こちらを向いて笑ってくるものなので、つい焦った。

けれどもグレファアはとても楽しそうに笑う。

「あは、だつてねえ。……でも、誰もがそんな考えを有しているわけではないのよ。それをモ二力は分かつてる?」

笑っていた時とは一見、ガラリと雰囲気は打って変わり、何とも言えない顔をしたグレファア。

「それは、この世界に生まれた時点で理解しているつもりよ。」

「そ、う。ならいいけど。……それから」

瞳に現れるのは悲しみ。

顔に滲み出るのは悔しさ。

その動きは何処か怠慢で。

彼女はゆっくりと降下して、私に近づいて来た。

そしていつもの通り肩に乗る。

ごめんなさい。

声にならない声が聞こえた気がした。



（眠れない……）

ゴロンと寝返りを幾度となく打った。

それでも眠気が訪れる事はなく、むしろますます目が冴えるばかり。

こういう時はいつもより感覚が研ぎ澄まされている。

よく気配を探ると、何やら下の階が騒がしい事に気づいた。

（何事かしら？）

気になって仕方ないので、そっとベッドを抜け出す。

まず先にネイラーの部屋に明かりがまだ灯っている事に気付き、そっと近付く。

「もうそろそろ、潮時………かしら？」

あまり良くは聞こえないが、ネイラーの声だった。

（潮時？…なにが……。）

ガチャ

そのまま一人考え耽ってしまっていたらしい。

私が気付いた時にはすでに遅く、部屋のドアが開く所だった。

隠れようと心みるも、そんな努力など虚しく中から人が現れた。

「立ち聞きするくらいなら、始めから中に顔を出しなさい。」

呆れた風にそんな事を言うのは、勿論ネイラーだ。

一方、私はと言うと。

ばれた事を恥ずかしいと思うも、やはり気配を消していてもネイラーには分かるんだと納得。

促されて室内に足を踏み入れた私は、思わぬものを目にするはめになった。

「……………」

「?どうしたの。」

驚きのあまり声も出ない私。

そんな私に話しかけるネイラーの言葉すら頭には入って来ない。

数秒の沈黙を守った私は、意を決してその真意を確かめるべく言葉を発した。

「…………ネイラー、この藁人形はナニ？」

そう、藁人形。

まだ普通の藁人形なら良かった。いや、良くはないが……。

だが、今私の目の前に有るソレは、ご丁寧にもフードを被った上、何体もある。

ざっと両手では足りるほどだが、等身大ほどの大きさの藁人形が何体もあつてはますます異様な光景だ。

極めつけは、その全ての格好が違つていゝと言ふ所。

リボンを付けているのも有れば、眼鏡を掛けているのもである。

（ちょ、ちょびヒゲ……）

フードから覗く顔を見てから後悔したのは言つまでもない。

その異様な光景に絶句している私は更に驚く事となつた。

なんとその藁人形、動いたのだ。

まるで人間のように。

「ね、ネイラー……。」

一歩、また一歩と近付いてくるそれに焦って、私はネイラーに助けを求める。

だが振り返った先のネイラーは緩く笑みを浮かべたままこう言った。

「じゃあ、あなた達の目的は達成したでしょう？満足したなら今まで以上に頑張ってもらわよ。」

「……御意。デハ、我ラハ行ク。」

機械的な声が何とも言えない。

怖くはないが、その異質な存在に得体の知れ無さが私を警戒させるには十分だった。

私の前に出たネイラーの裾をクイツと引けば、彼女は大丈夫だと言う。

そして嵐は去った。

静寂の満ちる室内。

外からは何の物音もしない。

当然と言えば当然だろう。

今は深夜だ。

今だに、目にしたが非現実的すぎて頭がフリーズしている。

（藁人形が、…服着て、立って、動いて、喋って……、えっ？）

思わず頭を抱えてしまいそうになる。

「ほら、後の事はあの子達に任せて。私達は傍観に徹しましょうか。」

（相変わらず、脈絡の無さが何とも……）

そう思わずにはいられないが、気になる単語を聞いた気がする。

「あの子達？」

聞き捨てならない一言だ。

まるで可愛い子供に言つようなそれに思わず食いつく。

「そうよね。まだ会った事無かったのね。あの子達は私の子よ。」

「うえっ!？」

どういふ事だと詰め寄れば、少し語弊は含むけど、と陽気な返事。

「藁人形が子供の存在って……。」

つくづく、私を基準にして考えると、彼女は決定的に何かが違うようだ。と改めて認識せざるをえない。

しかし、よくよく考えれば藁人形に気を取られて、ネイラーの言っ

た“傍観に徹する”という宣言を聞き逃していた事に私は気付いたのだ。

だが、尋ねはしなかった。

尋ねた所で、思いど通りの返答が合った試しはなく。むしろ何の脈絡もない言葉が返って来るか、答えてくれないかのどれかだ。

彼女の言葉は、ある程度時が経てば見えてくるものばかり。

意味を知りたくば時を待つ必要があるのだった。

あれから3日目

「 変化なし。」



ネイラーは傍観だと言っていたが、第一傍観するようなモノも無い。

いつも通りの町並みで、これと言った騒ぎもなく、この華影の拠点も至って平和。

何もないじゃない。そう思っている矢先だった。

「王宮から煙りが――！」

誰かがそう叫んだ。

街の活気が揺らぎ、至る所で悲鳴が上がる。

今まで歩いていた人々が立ち止まり王宮を振り仰ぐ。

だれもがその光景に釘付けだった。

短期間宮仕えしていた私には分かる。あれは焼却炉の辺りだ。赤い髪の少年と出会った場所。

その周辺には林があつたはず。

当然そんな所に火の手が回れば大事だ。

ただ救いはこの季節は湿気が多い、と言うこと。

乾燥している冬の季節より、幾分かはましだろう。

「大丈夫、よね……。」

兄は城には居るが、まずこの火事に巻き込まれたとは考えにくい。それに、兄の管轄ではないはずなので安心して大丈夫だろう。

出会った人々面々を思い返してみるが、巻き込まれる心配はないだろうと決めつけた時だった。

一人だけ居た。

正確に、何処に居るのかは分からないが。王宮の何処かに居るであろう彼女

「  
ヴィオラっ!!」

私はそう叫ぶと共に走り出していた。

向かうは王宮。

ヴィオラの元。

## 傍観の行く末（後書き）

句切の良いところで一旦更新。

ネイラーの個性がチラリと垣間見えています。

等身大の藁人形……。

自分で執筆しつつ、チョビひげのある藁人形に少々ドン引きしました。

そして、お気に入り登録、小説評価（ポイントを入れて下さった方）して下さった方、ありがとうございます。

7月15日の更新でした。

頼りと信頼（前書き）

8 / 27

の更新です。

## 頼りと信頼

はア、はア

はア

心臓が早鐘を打つように拍動し、息は切れ切れ。

早く進まなきゃと気持ちばかりが焦っても、身体は思うようには付いて行かない。

こんなことなら日頃からもっと運動しとくんだった。などと考える自分が少し情けなかった。

「あと、……少し、っ!」

少しうねっている前髪が汗で張り付く。邪魔なそれを手の甲で拭えば、また新たな汗が流れ落ちる。身体は暑いのに流れ落ちるそれは少し冷たくて、まるで氷解が流れ落ちるかのようで、背筋が凍る感覚に陥る。

慌てて頭をふるも、そのなんとも言えない感覚に苛まればなかなか頭を離れない。

ようやくたどり着いた離宮の奥まった門。

「あ、の…」

「あれ？あなたは」

「と、もだち…がまだ、中に、いるんです。」

すらりと口をついて出た言葉。この門は余り人通りはなく、ここを使用する者はごくわずか。  
入れる望みがあるとしたらここだけだった。

「そうか、今日は非番だったんだな。だけど中は危険だぞ。」

二人の内もう一人が言った。案の定、私がまだ辞めたことを知らないようだった。

「それでもいいんです。お願いです中に入れて下さいっ！」

二人で顔を見合わせて悩むそぶりは見せたものの、結局は“危険な所には近付かないように”といい聞かせてから中に入れてくれた。

「ヴィオ、ラ……どこ？」

そういえば王宮に入ってから彼女を見かけた事もなければ、話しても聞かない。てっきり私は王宮で彼女が過ごしているのだと思っていたのだが。

しかしハーレイと恋仲なのにはいないと言うのはどういうことだろう。

結局、門番二人の言い付けは守らず火の元に来てしまったが、見渡す限り辺りは野次馬と消化活動の隊員だけだ。

だけど人混みから見えるその奥、炎があがっている辺りにたむろす妖精の様子がおかしい。やけに興奮しているというか、例えるならば、猫がマタタビを嗅いだ時のあれだ。

「どうしてこんな事になってるの。」

王宮には国守りが居るはずだし、レクイエムもどこの街や宗教団体よりも揃っている。なのに何故こんな事態が起こったのか。レクイエムはレクイエムでもその人達は寄り選りの精鋭だ。いくら国守り



が多忙で手がはなせない事があるうとも、駆け付ける事ができるはず。

私が街から走ってくる間にも大分時間はあつた。その間に来れなかったということは、何か不測の事態でも起こっているとしたか考えられない。

「だれかつ！！中に私の子供がいるの！助けてえええ！」

隊員に押さえ付けられながらも、必死に炎の上がるそこに手を伸ばそうとして足掻いている。きつと下働きの人だ。自身の子供を連れてくる人は少なくはなく、むしろ多いくらいだ。

自分の子を助けてと求める彼女を見て、私は心臓をわしづかみにされた気分になる。自分は何をやっているんだ、と。救うべき命がそこにあるなら、何故救わないのかと。

「叔母さん。安心して、私が助けるから。」

気が付いた時には走り出していて、彼女とすれ違いざまそう言った。背後で悲鳴が上がり、隊員の人何か叫ぶ。だけど今の私にはそれは全く耳にはいらなかった。

ただあつたのは目の前の成し遂げるべき事だけ。

ただ、助けなきゃ、という思いが私を突き動かした。そこには強い意志があつた。

何も考えずに走り出した私はなんの準備もなく炎に飛び込んだ。もはや自殺行為だとも周りは叫ぶだけど炎に身体が焼かれることはなかった。

むしろ炎はアーチを作るかのように避けてゆく。そして熱風に煽られて髪がはためいているのかと思いきや、風はあるが熱くはない。

（もしかしてこの炎、幻？）

なら消化活動の隊員がいくら火を消そうと試みても火が消えないのも説明できる。だがそれでは何故炎が私を避けるように動いたのか分らない。

それに今焼けているのは焼却炉近くの小屋。作りは木で、ぱちぱちと木のはせる音がする。リアルに現実としか思えなくて、私は疑問を持つ。

とそんな時だった。

小さく咳き込む音と、荒い息遣いが聞こえたのは。

「そこにいるの!？」

「…だ、れ？」

案の定、聞こえてきた声は幼い男の子の声。  
しかし、誰か？と言う質問に何と答えていいのか分からなくて苦笑  
するしかない。

ようやく煙で見えなかったその子を見つけ出すと、次はその姿に驚  
く。そして慌てて駆け寄った。

「大丈夫！！あなた、これ……」

「？……おねえ、さんこそ、だいじょ、ぶ？」

「え、うん。私はなんとか……。」

（こんなの聞いてない。）

私だけ火が当たりもかすりもしないのに、男の子は足に火傷を負い。  
そしてその下半身部に辺る胴の辺りに物が倒れてきており、床に押し  
倒されていた。

そんな状態に置かれているのに彼は私の心配をし、されるなんて思  
ってもみなかった私は戸惑った。

しかし火の手はすぐ側まで迫って来ており、下手をすれば男の子の  
上に倒れている棚にまで火が移りかねない。

「少し痛いかもしれないけど、我慢できる？」

コクリとわずかにだけ頷くのを確認した後、私は棚を退かすために膝を着いて持ち上げようとする。幸い扉はガラスで出来た物ではなかったし、中身も割れ物ではなかったので安心したが、意外に思い。

「うっ、重いわねえっ。」

下から見上げてくる彼の心配そうな表情を見ると、そんなことも言ってもらえない。安心させるように軽く笑うとまた作業に取り掛かる。棚の端の方を横にずらし、彼の身体に載っている部分を浮かす。

「どっっ？出られそう？」

「なん、とか。」

脚はやはり痛むのか、腕力で身体を引っ張り出す。

ようやく抜け出せた男の子の息は荒い。煙を吸い過ぎたのだろう。そして辺りを再確認すれば大分火の手がまわり、抜け出せたとしても無傷では無理そうだ。

それに彼は怪我を負っている。立って歩けたとしても、それほど早いペースは望めなさそうだ。

だがやるしかない。

ぐっと力を入れ立ち上がって下を向けば、男の子の瞳とぶつかった。そして燃え盛る炎を見て一つのアイデアを思い付いた。

「ねえ、少し準備に時間が掛かつちやうかもしれないけど、二人とも無傷で脱出する方法を思い付いたわ。私を信じてくれる？」

王宮奥深くの一室。

そこによやく入って来た情報。

それを知らされたヴィオラは情報を持ってきた者に激昂した。

「何故もつと早くに知らせなかったのですか。貴方はそんなにも自分のプライドの方がお大事で？人の命よりも？ならそんなプライド捨ててしまいたさい。ついでに地位も権力も無くして差し上げますわ。」

「し、しかし私は…」

「上に従っただけ、とおっしゃりたいのですか。」

「そ、そうなんです！！私はただ言われた通に動いただけ」

「だからそんな変な意地もプライド全て捨てなさいと言ったのですわよ。」

いつになく険しい表情のヴィオラはその瞳で十分に人を射殺せそう  
だ。

そして震え上がる男。そしてまざまざと見せ付けられる実力の差。

今まで自分が馬鹿にしてきた存在がどれほどのものか、今さら思い  
知ったのだ。

「いいでしょう。こう言う非常事態の時だけわたくしを頼ろうとする  
あなたたちに、今日だけ力を貸して差し上げますわ。ただし……  
…条件があります。」

奥の部屋だろうか、建物が崩れる音がした。恐らく、もう残り時間  
はわずか。急がなくてはならない。  
視線をさ迷わせ、辺りを見る男の子。きつと先程の音で不安になっ

たのдарう。

あれから、私を信じると言ってくれた男の子に私は安心し、作業を開始したのだった。

この迫り来る炎から背を向け、今にでも逃げ出したいであろうに、私の目を見てしっかりと頷いてくれた彼に勇気をもらった。力を、使う勇気を。

だから今度は私が助けたいと思うのだ。

「大丈夫、もう少しだから。」

だから我慢して、と不安に晒されているであろう彼に話し掛ける。それにバツとこちらを振り向いた彼の瞳は揺れていた。

私は額を流れる汗に気を取られないように意識を手元に集中する。

「魔法……陣？お姉さんレクイエムなの？だけどこの陣、少し違う……。」

「……そう、ね。」

内心びつくりだ。こんな小さな子が魔法陣の形式を覚えているなんて思わなかった。

レクイエムと違うのは陣の縁にある小文字のスペルの違いだけ。この非常事態、そんな所まで観察するその目敏さに驚きだ。

「正しくは魔法陣ではないわ。自己流だけど、即席よ。」

自己流！？だと言う事に目をひんむく彼に私は目線だけずらしてクスリと笑う。

まあ確かに、これが普通の人の反応だろう。

「だ、だって魔法陣は」

「定められた形式でしか発動しない、でしょ？」

知っているわ、と苦笑するも、彼は信じられないと言う風に私を見る。

普通は描いた魔法陣に、術者が力を送り続ける事で効果を発揮する。そして力の注入を止めれば効果は失う。それが一般常識だ。

しかし私が使っているものは違う。描いている陣自体に力を送り込んでおき、貯めたそれを使うのだ。なので注入するのは初めだけ。後は注入が無くても力を発揮する。

「多分私の他に知っている人はいないわ。第一他の人に使える保証はできないの。」

「そんなことって……。」

「残念ながらね、一人は試したの。術者の腕もたしか、力もある。だけど出来なかった。……単に条件が揃わなかっただけかもしれないけどね。」





## 頼りと信頼（後書き）

久方ぶりの更新でした。  
長い間をあけてすみません。

8月27日の更新でした。

## 二度目痛感（前書き）

9 / 17 の更新です。

## 二度目痛感

「じゃあ、お姉さんはレクイエムじゃないんだね、国守りなの？」

「まあ……どれも無いわ。」

この子は私が今作業中なのを忘れてないか、と疑問をもつが、きつと忘れていたろうと判断する。

「どれも無い？そんなばかな！だってお姉さん」

「しいっ！！だまって。『 汝の名はモニカ。汝の名はモニカ。聞こえし我が守り手よ、今ここに集まりたまえ。』」

魔法陣が一気に膨張するかのように広がり、瞬くような光を発する。その時私はしっかりと男の子の手を握る。もう一人にさせないように。

元から集まっていた野次馬が拍車を掛けたように増えたのは、一人の少女が炎の中に飛び込んでからだ。

周りの空気は不安に揺れ、もう助からないだろうと口々に言う者ま  
でいる始末。その言葉を耳にした一人が叫ぶ。

それは、中に息子がまだいるんだと泣いていた女性。まだ頬は涙に濡れ、眉は下がっていたが、だが確かに瞳は諦めていないのだと訴える。

「あんたは信じられないのかい。信じて待ってもいないやつがこんな所で嬢ちゃんを待つんじゃないよ！そんなただの野次馬根性丸出しのあんたがこんな所にいたってこつちはちつとも嬉しくないね！今すぐここを出ておいき！ 他にも言ったやつもだよ！」

なまじりは釣り上がり瞳はそこ知れぬ鋭さを感じさせる。  
ただの泣いているだけの女性かと思っていた周りの者は驚く。そしてそれに気圧された幾人かは悔しそうに早足に立ち去る。

「そうね、ほかにもいたのじゃなくて？私ほ他にも言った者を見掛けましたわ。」

ねえ、と言っていた者数人に視線を向ける新たな登場人物。  
灰色の髪にシンプルだが上品な装いをしている少女。  
それを目にした隊員は目を見開く。

「『『ヴィオラ様！？』』」

幸いなのか不運なのか、ヴィオラに言われ逃げるように立ち去った者はその名を聞くことはなかった。

そして名を呼ばれても肯定も否定もしなかった。だが中には沈黙を肯定と受け取る者もいた。

「中には誰がいるの。」

「私の息子と、助けに入った少女が……。」

「そう……。」

一度も炎から目を離すことなく二人はやり取りを交わす。

「隊員は救急道具を手配してあるわね。」

「はい！ここに用意しております。」

それを聞いたヴィオラは目を閉じる。次に開いた時の瞳は灰色から赤になっていた。

その事に彼女の後ろにいた者は気づかない。だが、それより前に出ている隊員は気づきギョツと目を見開くも、状況を理解して詰めていた息を吐き出す。

「久方ぶりにネイン様を見たぞ。」

「前に見たのはいつだったか。」

「2ヶ月前じゃね？」

「ばか！半年前だ。」

ヒソヒソと話す彼らの声は丸聞こえ。

しかしそれを敢えて聞こえないふりで通す彼女、ネインもどちらかと言えば生まれ持った性分だ。付け加えるならば自分からはめつたと話し掛けない。興味を示すものがなければ基本無視だ。そして気まぐれ。

悪く言えば自分勝手、良く言えば物静か、と言う所。

そんな彼女が誰に言うでも無く、目を開いて言った。

「……………来た。」

その瞳が据えられるのは炎の中。だが確かに炎の中の何かを捕らえていた。見えるはずのない何かを。

一瞬、全て者には時間が緩やかに止まったかのように感じた。高く飛んだ物が落下する前に空中で停滞し、落ちてくるあの間のように。それに動揺しなかったのはネインただ一人。

そして時はまた時間を刻み始める。

ただ、出来事の前と違ったのは、彼女の腕に二人の人間が抱えられていたことだった。

お姉さんはいつ起きる？

ん、そうですね……あなたが幸せそうに笑っていれば目を覚ましますわ。

微かに聞こえるその声を聞けば、そんな事あるか！？と言う様な内容が語られていた。

誰だか知らないが、その“目の覚まさないお姉さん”は責任重大だな、と笑う。

しかし両者とも聞き覚えのある声で、一人は小さい男の子の様な声。もう一人は少女の声だ。それも独特の。



ぐつと力を入れ、あまり感覚の感じられない自分の身体を起きあがらす。

目の前には案の定見知った顔があった。

「な、な、なんで私にそんなに責任重大な事押し付けるの！」

「あら、目を覚ましましたわね。                      ほら、あなたのおかげでモ  
二力が目を覚ましましたわ。」

「ほんとだ。王女さまも凄いね。なんで分かったの？」

なんて無邪気なんだろう。逆に突っ込む気も失せた。  
しかし男の子はそんな様子に気付いた様子もなく真に受けている。  
しかし何かを聞き逃した感じがする。スルーしてしまっではいけない何かを……。

「……………はっえっ！王女様！！」

「あら、今さらだわ。」

「ちょっとまって！！今さら何も、私は今初めて聞いたわ。」

「だって言ってなかったんですもの。」

「いや、そこは言いましたよ……。」

「モニカを信じて待っていたんですわ。」

「信じる以前の問題だと思っただけれど……。」

もはや頭をもたげてしまった

「それじゃあヴィオラはハーレイと」

「兄妹になりますわ。年子になりますの。」

「なんだ……。そうだったの。」

今の今まで勘違いをしていた自分が恥ずかしい。ベルシアの近くの屋敷で侍女に言われた言葉をようやく飲み込む事ができた。仲が良  
い、と言うのは決して恋人同士と言う訳ではなく、兄妹としてだ  
ったのだろう。

それに翌々考えれば髪の色も瞳の色も全く同じで、似通っている。  
どうして今まで気づかなかったのかが不思議なくらいだ。

「お姉さん、もう大丈夫？」

「……あなた……。」

「うん。助けてくれてありがとう、お姉さん。」

男の子に言われる“お姉さん”と言う言葉が何だかむず痒い。

兄妹は二人つきりだし、私より下はいないのでその呼び名は新鮮だ。

「ねえ、その……お姉さんっていうの恥ずかしいから名前で呼ばない？」

「名前で？」

「そうよ。私の名前はモニカ。改めまして宜しくね。」

「うん！！僕の名前はアリス。よろしく。」

「アリス君？」

男の子でアリスと言う名は初めて聞いた。けれど意外に似合うものだとも思う。

彼の目はクルリと大きく、下手をすれば私より大きいかもしれない。そして鼻筋は整っており、綺麗な顔立ちをしている。

可愛い顔ね、なんて言えば気を損ねてしまうかもしれない。

危うくそれを言わない内に口を手で押さえる。二人にはうろん気な視線を向けられたが、笑ってごまかした。

「それよりここは何処なの？見た感じ、何処かのお屋敷って感じがするけど……。」

「あ、ここ僕の家だよ。って言ってもお母さんの家の方なんだ。」

「お母さんは？」

「今はここにはいないよ。」

そう言えば叔母さんには助けると啖呵を切るも、ろくに助けられない。ああ言った手前、顔が合わせずらいのも事実。

「お母さんとお父さんは一緒には住んでいないんだ。だからここにはお母さんがいないんだ。」

「それってやつぱり、……………」

「仲が悪いって訳でもないんだ。むしろ仲が良くらい。だけど一緒に住むことができない。」

仲が悪いの？と言う言葉を寸前で飲み込むも言いたい事は伝わったらしい。むしろ私が気を使わせてしまったようだ。

伏し目がちに事の経緯を話すアリスには色々と思う所があるのだろう。眉間に僅かなからシワが寄っている。

それを深く尋ねていいのか分からなくて、私は口ごもった。

「お姉さんもしかして気にしてる？」

「え、いやつ。そんなことは……。」

「大丈夫だよ。何でも聞いてくれても。」

「命の恩人だからっ」そう言って笑う彼が、とても私の目には強く映る。

「すごいよね、アリス君。」

その言葉に「どうして？」と首を傾げる彼に「とても強いから。」  
と言うと少しはにみ、小さく歯を見せながら笑う。

「でもあの炎から抜け出した時にネイン姉さんが居たことにはビツクリしたけど。」

「お姉さん？がいるの？」

「あれ、知らない？そこに居るでしょ？」

そう言って指差す先はヴィオラ。  
当の本人はどこ吹く風だ。

「……ヴィオラが。」

「そつだよ。」

「じゃあアリス君は……」

「御察つしの通り、立派じゃないけど第二王子です！」

本当に、人生はそう上手くはいかないのだと思い知らされた。

そしてその後らこれよりさらにそれを身を以って実感する事になるなど思ってもみなかった。

## 二度目痛感（後書き）

前ね投稿から大分経ちました。

掲載遅れて大変申し訳ありません。次回は春風の更新です。

9月17日の更新でした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5367p/>

---

精霊達のレクイエム（鎮魂歌）

2011年9月18日12時27分発行